ABSOLUTE WING

能勢恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＢＳＯＬＵＴＥ　ＷＩＮＧ

【Ｎコード】
Ｎ３８７０Ｚ

【作者名】
能勢恭介

【あらすじ】
極地に近いどこか。
戦う相手も理由もわからないバイロット。
北方戦役は拡大しつつあった。

1（前書き）

その者は、翼を持つ者である。
その者は、畏れを知る者である。
故に、その者は、勇気を持つ者である。

1

レシプロエンジンは調整にひどく気を使う。油圧、油音、排気音、彼が駆る機体は排気タービンを利用した過給機を搭載していたから、なおのこと低圧縮かつ高過給であり、高度一万メートルを想定した微調整は、パイロットである彼の領域ではなかった。

彼が駆る翼は、道端に散った木の実をついばむ小鳥ではなく、それらを狙う猛禽だった。彼は戦闘機乗りだ。初めて雲の峰を駆け上がってから、どれくらいの時間が経過しただろう。一人、蒼い世界に身を浸し、振り返ってもそこにはプロペラと垂直尾翼の向こうに広がる空と雲があるだけで、もはや鳥たちですら追いつくことのできない領域は、もはや人間の世界でもなかった。彼を地上に叩きつけようと狙うものは、彼と同じ戦闘機乗りと戦闘機だけだ。

エンジンに火を入れる。スロットルを開けてみる。過給圧は正常、オイルが温まってくると排気音が柔らかくシフトする。ゴーグルを通した滑走路は物憂げな青に染まり、グラブ越しに感じる操縦桿の手ごたえはことのほか心地よい。赤ん坊が空に憧れ、そしてその思いを果たそうと丘陵を風とともに駆け回れるようになる時間よりもはるかに長く、彼は戦闘機とともに空にいた。愛機は都度変わった。機種が変わるたび、性能が上がった。エンジンの出力が上がるたび、操縦性はこなれてくる。余裕が生まれるからだ。その分、あらゆる意味で限界も高くなる。最大速度であり、上昇限度であり、上昇速度であり、旋回速度であり、航続距離であり……あらゆる限界が彼の身体を痛めつけていった。だが、彼は幼いころに抱いた憧憬をいまだ翼とともに持ち続けていた。曳光弾がキャノピーを掠め、ときに主翼をえぐり、方向舵を弾き飛ばされても、彼は戦闘機とともに空にあった。

何人もの仲間が蒼い世界に飲まれていった。蒼い世界に彼らが飲まれるとき、決まって彼らの戦闘機は紅く燃え上がり、黒煙を曳い

て雲海に沈んでいくのだ。次は自分の番だと感じたことはなかったが、そうなる可能性は一度として否定したことはない。そして、失った仲間より多くの敵機を、彼は撃墜してきた。顔も知らぬ、同じ空に生きるパイロットたちに、彼は同じように曳光弾を叩きこみ、蒼い世界に生きつつ、紅い炎を吐き出させてきた。そう、彼は戦闘機乗りなのだ。機首に穿たれた対空機関砲は二十ミリ。破壊力は大きいが、銃身の長さを十分に取れず、初速が低い分敵機に接近しなくては命中しない。弾の首も太く、かつて彼が駆っていた戦闘機に搭載された十二、七ミリ機銃と比べても装弾数は少ない。一発の重さが違うのだ。彼は空にあって、いまだ一度も機銃を撃ちつくしたことがなかった。

滑走路の上を、薄い雲がたなびいていた。きっと上空は風が強いだろう。ラダーペダルに載せた両足がかすかにうずく。もう若くはない。今彼が駆る戦闘機も、もう若いとはいえない機体になりつつあった。彼は知っていた。瞬発力には優れるが高速性に弱みを持つレシプロエンジンはやがて廃れ、新開発のガスタービンエンジンが主流になるであろうことを。

黎明期にあるガスタービンエンジン……ターボジェット・エンジンは、同規模のレシプロエンジンに比べて推力には勝るが、瞬発力がまるでなく、加速力に劣っていると聞いた。まだ彼は空でジェット戦闘機に遭遇したことはなかったが、遠方の友軍機が、敵のジェット機に撃墜されたという噂は耳にしていた。速度ではるかに勝るジェット機は、高空から獲物を狙う、まさに猛禽のように、友軍の戦闘機を屠ったという。空では、最終的に速度と高度を温存できた方の勝ち、あるいは速度と高度を相手より早く稼ぎ出したほうの勝ちだ。加速力には勝っても、最終的に到達できる高度と速度に限界のあるレシプロエンジン機がジェット機を叩き墜とそうとするのなら、相手から高度と速度を奪い取るしかない。奪い取れなければ、逃げることもできず、ただ撃墜されるだけなのだ。それは考えればわかる。

彼はスロットルを開ける。敏感にエンジンは反応し、甲高い排気タービンの音が耳を打つ。プロペラ・ピッチを変え、ブレーキを離す。軽い機体は滑走路を駆け始める。いちばん気持ちが高揚する瞬間だ。いくつになっても、彼はこの瞬間が好きだった。蒼い世界の扉を開ける瞬間なのだ。

離陸する。

車輪が滑走路を離れ、機体は加速を続ける。上昇ピッチを低く押さえて速度を稼ぎ、そして引き起こす。エンジンは息継ぎもせず適正回転を維持している。バックミラーを一瞥する。二枚並んだ垂直尾翼の間でプロペラが勢いよく回っている。ブレードの先端からヴェイパーを曳いていた。湿度が上がっている。荒れるかもしれない。空の流れが変わるかもしれない。今日は迎撃でも対地攻撃でもエスコートでもなく、偵察任務だった。いわゆる威力偵察という奴だ。満載の燃料に、左右の主翼にひとつずつ、増槽タンクを下げている。普段より身体が重い気がした。ロールが鈍い。乗り込めば、戦闘機はすでに彼の身体の一部だった。

僚機がやや遅れてついてきていた。僚機操縦者は見知った男だ。ところかまわず煙草をふかし、整備員からはひどく嫌われていたが、空の上では頼りになった。彼らが駆る戦闘機、ＧＣ－８は二〇ミリ対空機関砲を収納する関係で機首が長く、前部下方視界が極端に悪い。またコクピット前部にカナード翼が配置されていた。要するに前下方から攻め上がってくる敵機に対しては極端に分が悪い。その不足する視界をカバーしてくれるのが僚機であり、今日ともに飛ぶ彼もまた、編隊の周囲を警戒する目をしっかりと持っていた。電探情報も大事だが、最後に頼れるのは、パイロットの目だ。地上での性格などどうでもよかった。空で頼りになれば、そして地上での振るまいが度を越えない程度であれば、気にする必要などなかった。

「イライ、少し雲が多くなってきた」

僚機操縦者が話しかけてきた。無線封鎖はしていない。偵察任務とはいえ気楽なものだ。

「タグサリ、調子は」
「タービンの調子がね。過給圧が今ひとつ上がらない」
「ホガリを大事にしないからだ」
「俺は奴は嫌いだ」
「そんなことは関係ないさ」
「イライ、あんたはどうなんだ」
「頼りになるさ」
　それっきり、僚機操縦者、タグサリは黙り込んでしまった。イライはバックミラーを一別した。主翼にそびえる垂直尾翼とプロペラのあいだに、タグサリのＧＣ－８が見えた。タービンの調子が悪いと言いながら、編隊長から適度な距離をとって離れない。バックミラーをのぞいたのが見えたのか、タグサリは主翼をわずかに振った。戦闘空域でなら、味方を意味する合図だった。なんとなく深い意味合いを探ってみたが、イライにはわからなかった。
　雲に入る。上昇はまだ続く。水平飛行で速度を稼いで上昇、そしてまた水平飛行。二一〇〇馬力以上の出力を誇っているＥＪ２０型エンジンも、さすがに寄る年並みにはかなわない。が、この機体を越える戦闘機を、まだ友軍機は持っていない。一応の最新鋭戦闘機がこれだ。愛称は「ノスリ」。幕僚監部が名づけた公式名なのだが、飛行隊の誰も、その名では呼んでいなかった。
「イライ」
　雲海を見下ろす高度になってから、タグサリが聞いてきた。
「ハーモニゼーションは」
「いつの話をしている」
「弾道が安定しないとあんたぼやいていた」
「どこで聞いた」
「ＰＸだ」
「気のせいだ」
「試射しなくていいのか」
「弾がもったいない。俺はホガリを信用している」

「奴がハーモニゼーションをやっているわけじゃないだろう」
「いい加減にしておけ、中尉」
「……了解、大尉」
　雲海が切れる。眼下は海だ。このまま海を越え、海岸線が見えたら高度を下げる。そして十分も飛んだ場所になだらかな丘陵地帯が見えてくるはずだ。そこを一周して帰ってくる。それが今日の任務だ。写真を撮るわけでもない。それは偵察機の仕事で、イライが乗るのは戦闘機だった。要するに、戦闘機が出向かえてくる可能性を示唆しているのだ。イライはそう理解した。
　日差しが強い。酸素マスクをつける高度でありながら、エンジンはいまだ快調だ。燃料消費もいつもどおり。空中給油機を呼ぶ必要もないだろう。タグサリはイライの機体からややはなれた低空を飛ぶ。波頭が白いのがここからも見える。海は荒れている。落ちれば一分と持つまい。寒流が流れ込んでいるこのあたりの海は、夏でも泳ぐことができないくらいに冷たい。そういえば、最後に泳いだのはいつだったろうか。イライは少年時代を思いだす。近所の川原で水遊びをし、日暮らしが鳴くころに畦道を歩いたあの夕刻の時間を。自分を待つ人間がまだいた懐かしい時間を。自分の住む町を、棚田が広がる里山の上空を三機編隊で軽やかに飛び去っていた戦闘機を見上げた少年の日を。懐かしい。
「イライ」
　呼ばれて我に帰る。
「なんだ」
「聞こえなかったか」
「なんだ」
「電探情報だ。機影を見たそうだ」
「どこに」
「方位二七〇」
「いくつだ」
「わからない」

「探せ」
「高度を下げる」
「了解だ。こちらはこの高度を維持する」
無線機のスイッチを二度鳴らし、タグサリ機がハーフロールを打ち、背面のままで高度を下げて行く。パワーダイブだ。タグサリ機の翼端から真っ白いヴェイパートレイルが曳いた。イライは操縦桿の安全装置を解除する。機銃はいつでも撃てる。親指の腹で空気を感ずる。殺気はない。が、情報を信じよう。敵が来る。
高度は維持、速度を上げる。エンジンにまだ余裕はある。増槽タンクはまだ切り離さない。任務は継続中だ。海岸線が見えてきた。オン・マップ。すでに味方の領域ではない。中立地域への偵察は違法でもなんでもなかったが、相手がそう思ってくれるとは限らない。人差し指はまだ操縦桿から浮かせたままで、キャノピーの向こうに目を凝らす。まずは遠くの雲に焦点を合わせ、周囲を警戒する。自分の目なら、十マイル以上離れて飛んでいる戦闘機を見つけることができる。先に見つけたほうがはるかに有利になる。ボードゲームと同じだ。先手を打った側がとりあえず優位に立てる。
「イライ」
タグサリの声が耳に届く。旋回中なのか、息が荒い。
「見えるか」
「まだ見えない。そっちはどうだ」
「波が荒い。漁船が何隻かいるだけだ」
「俺が見えるか」
「……見えてるよ」
「ついて来い」
「わかってる」
海岸線を越える。イライは操縦桿をそっと、しかしすばやく左に倒す。エルロンが敏感に反応し、地平線が垂直に立つ。ラダーを入れ、そのまま旋回。高度が落ちる。スロットルはそのままだ。
「会敵したら」

タグサリの声。
「墜とすだけだ」
「了解だ」
高度が下がる。速度は上がる。整備指示書や諸元表に記された限界速度まではまだまだ余裕がある。機体年齢以上にこの戦闘機はまだ若い。
（俺の身体以上に）
のしかかってくる重力加速度にひるんだら負けだ。すべてにおいて負けだ。イライはそれを意識しないようにする。考えただけでも負けだ。
海岸沿いの道路は、地図が正しければ、そして自分の記憶が確かならば国道のはずだ。走る車の姿は見えなかった。さらに高度を下げる。まっ平らに見えていた地表に起伏がよみがえる。民家の屋根瓦が見えるくらいに高度が下がる。速度は二五〇ノット。さすがに速い。タービンの音が背後から聞こえる。タグサリはさらに低空を飛ぶ。今はイライが上方監視、タグサリが下方監視だ。このあたりに対空機関砲が設置されているという情報はない。が、こちらの情報がすべてのはずがない。人間は、味方は神様ではない。どこに何があるのかわからない。もちろん敵も神様ではない。だからこそ、雑木林の影や丘の向こうが気になる。海から向かってくる戦闘機を撃墜するのに、どこへ対空機関砲を配置すればいいか。こちら側が嫌だと思う場所こそが怪しい。イライはそうした場所から逃げず、飛ぶ。タグサリもそれをわかっているから、ついてくる。
「タグサリ」
呼びかけにタグサリは無線機のスイッチで応じる。新人パイロットならば、帰還してまず一発お見舞いするところだが、タグサリはそういう人間だ。イライはわかっているからいちいちそんなことに腹を立てはしなかった。
「何か見えるか」
「何を」

「何かだ」
「じいさんが柿の実を軒先でかじってるよ」
「電線に気をつけろよ」
「冗談だろう」
　イライは操縦桿を右に倒す。方位を変換、牧場のサイロが右の主翼の先を掠めるようにすっ飛んで行くが、高度はまだまだ余裕があった。静かだった。丘陵地帯は小春日和の陽射しに照らされ、干草ロールがごろごろと転がっている。敵がいるなら、こちらのエンジン音を聞きつけて、いい加減ぶっ放してくるころだ。情報は正しいのだ。このあたりに対空機関砲の陣地はない。
　先に見つけたのはイライではなくタグサリだった。
「イライ、方位〇四〇、上空、見えるか！」
　応えるより早く示された方角を視線の端で見る。
　蒼空にかすかな黒いシミが見えた。薄めた墨汁を、ほんの一滴だけ垂らしたようなあとが二つ。
「見える。見えてる」
「電探で言ってた奴か」
「知るか」
「どうする、編隊長」
「高度、方位とも維持。任務続行だ」
「墜とさなくていいのか」
「待て」
　イライもタグサリも水平飛行。地形を追随するように低空を行く。タグサリはイライ機の右後方同レベルに占位した。彼に対しては余分な命令はいらなかった。
　恐ろしいほどに静かだった。ＥＪ２０型エンジンは快調で、高高度でも低空でも俊敏な反応を見せてくれる。まだ最大速力まで達しない。しかしあの黒いシミが電探情報のとおりだとするなら、こちらの高度は低すぎる。位置エネルギーで負けている。
　バックミラーを一瞥する。タグサリと目があった。同じことを考

えたらしい。
「上がるぞ」
「了解」
スロットルを叩きこむ。プロペラピッチを最大に。はじかれたように、とは行かないが、イライ機は加速する。タグサリ機も加速する。息切れするなよ、ポンコツ。口の中でイライはつぶやく。
「イライ、あれは」
黒いシミはシミ以上の大きさになった。あちらは進路も高度も見つけたときからかわらない。こちらに気づいていないのか、気づいていない振りをしているのか。
「噂を確かめるまでだ」
黒いシミに見えるのは、排気煙だ。間違いない。あれは戦闘機だ。操縦桿を腹にひきつける。エネルギーを過度に失わない程度に引き起こし、機体はいい角度で上昇を開始する。昇降計が回りだす。噂の敵の新型は、上昇時に昇降計の針が振りきれると聞くが、そんな機体が存在するものか。確かめてやる。そして、叩き墜としてやる。いい天気じゃないか。ゆっくりこの草原で眠ってくれ。
一気に上昇した二機は、ほぼあの黒いシミと同レベルに達した。向こうはこちらに気づいてるのか。
「イライ、どうだ」
「任務は続行だ」
「きつい任務になりそうだ」
「お前が弱音を吐くとはな。帰ったらホガリに話しておこう」
「ふざけるなよ、大尉」
「上官侮辱罪と抗命罪で上に報告してやるから楽しみにしていろ」
「帰れたらな」
「必ず帰るさ。いつもどおりだ」
イライは猛然とダッシュする。あの黒いシミめがけて。黒いシミが米粒くらいまで見えてくる。間違いない、プロペラがない。新型だ。ここでお目にかかれるとは。イライはそっと人差し指を引き金

にかける。そう、銃でいうならこれは引き金なのだ。頼むぞ、ホガリ。三日前のハーモニゼーションではまるで弾が集束せず、不安だった。直してくれたんだろうな。

イライとタグサリは相手よりわずかながら高度に分があるようだ。上昇したのが功を奏したか。それにしても、この距離で気づかないか？　試すまでだ。合図もなく、イライは操縦桿を倒し、いきなり相手に襲い掛かった。増槽を捨てる。敵からみれば背後よりやや左後方上空。首を捻るまでもないだろう。殺してやる。引き金を絞る。機首の二〇ミリが火を吹いた。曳光弾が草原の緑に映えるじゃないか。そのまま死ね。イライの腹が冷たくなる。いつも感じる衝動だ。曳光弾は二筋、敵機の左主翼付け根に吸い込まれていく。いい加減見えているはずだ。さすがに少し遠かったか。しかし当たるはずだ。

敵機の左フラップに何発かが命中したのをイライは確認した。遠い。が、当たった。年季の差だ。ほくそ笑む。そのまま燃料を吹いてくれれば、撃墜だ。速度はそのまま、さらに敵機が近くなる。初弾を発砲してから五秒とたっていない。被弾した敵機がようやく、そう、イライからしてみればようやく右にハーフロールを打った。フェイントかと身構えたが、奴は素直に右へ旋回した。煙は出ていなかった。そして、機体の形状がくっきりと見えた。プロペラがない。やや後退ぎみの主翼に、一枚の垂直尾翼。コクピットを包むキャノピーは一体成型なのか継ぎ目がない。排気口と思しきノズルが機体の尻に穿たれていて、水平尾翼が排気口の横に一組。これで機首にプロペラがあればオーソドックスなトラクタータイプの形状だが、プロペラがあるべき場所には機銃がついているようだ。片側に三つ、六門か。口径はわからない。これまでの通例なら敵の機銃は十二、七ミリか。主翼に機銃がついているかどうかは、イライも回避行動をとったため見えなかった。

「タグサリ、来るぞ」

相手は組んでいた編隊をブレイク、被弾した機は一気に高度を下げた。速度を稼ぐ気か。しかしイライ側も加速していた。速度差は

ないに等しい。こちらと同じ速度なら、ハンディはない。イライは喰らいつく。止めをさしてやる。
「ウィングマンに気をつけておけ」
「俺がやる」
「離れるな。二対一ならこちらが有利だ」
イライ側は編隊間をつめない。そのまま進む。ふと見あげた雲が綿アメのようだ。こちら側は風が弱いのか。基地の空に流れていた雲と表情が違う。
被弾した敵機は加速中のようだが、動きは鈍い。真後ろに占位したイライ機のキャノピーに雫が散る。燃料が漏れている。やれる。あと数発で奴は火を吹く。ジェットエンジンがどれだけのものか知らないが、ここで葬ってやる。イライ機の機銃が火を吹く。短く撃つ。敵機までの距離、三〇〇メートルもない。当たる。確信する。そして、次の瞬間、草原の緑に紅蓮の炎が散る。相手機のエンジンが火災を起こしたらしい。今撃った機銃が当たったのか、それとも初弾がはなから致命傷を与えていたのかはわからない。だが、理由はどうでもいい。撃墜だ。火を吹いた敵機はロールを繰り返しながら劇的に高度を落としていく。パラシュートは出なかった。そのまま牧草地に散る。カナードが邪魔して最期を見届けられなかったが、そんな暇はなかった。当たれば、当たって火を吹けばそれで終わりだ。相手の最期を看取る必要などなかった。
「タグサリ」
「来てる。速いぞ、レベル」
「お前が行け。援護する」
タグサリ機が前に出る。武装は機銃だけ、増槽を切り離したこちら側は身軽だ。タグサリ機は抵抗を最小限にするため、必要以上のロールもピッチも打たない。そして、相手は急上昇することもせず、急下降もせず、急旋回をすることもなく、増速している。それでもやや降下気味なのか、追うタグサリ機のカナードが上がっている。
「速い！」

タグサリが叫んだ。
イライはタグサリ機の右後方にいたが、タグサリが叫ぶより早く、息を呑んでいた。敵機が突如急上昇を始めたのだ。ありえない。エネルギーを一気に失うはずだ。が、奴はやった。
「なんだあれは」
タグサリが短く叫んだ。急上昇した相手に追随せず、わずかに機首を上げた状態だ。
「イライ！」
相手機の排気ノズルから激しく炎が吹き出していた。タグサリは一発も撃っていない。エンジン火災に似ていたが、違う。相手機のノズルからは青とオレンジを混ぜたような炎が、激しく吹きだしていた。
「まずい、ついていくな、速度を失う」
「わかってる。しかし、ありゃなんだ」
「考えるな。ダメだ、逃げるぞ」
「大尉」
タグサリ機はハーフロール、そのまま背面に入れて反転、スプリットS機動に入る。
「速度を失うな」
「……俺を、……誰だと、……思ってる、大尉……。くそ、重い」
速度が出ている状態でのこの機体の悪癖が出ている。タグサリの機体は暴れていた。ある速度を越えた段階で、動翼がひどく重くなるのだ。分けてもエレベーターが極度に重くなる。従順だった戦闘機が、いきなり駄々っ子になってしまう。増槽タンクを捨てたＧＣ－８はロールには敏感になっている。が、それは急激過ぎる変化で、慣れないパイロットはモーメントの変化に戸惑い、その間隙を突かれて撃墜されることもある。タグサリはＧＣ－８に乗ってから確か二年と言っていた。癖は知り尽くしているはずだが、一度高速域で旋回操作に入れた機体の反応は、ロールには敏感に、ピッチ方向に鈍感になる。タグサリはその状態に陥っていた。まずい、イライは

ゴーグルの下で目をしかめた。タグサリ機を追う。一瞬見上げた空に、敵機のシルエットが見えた。敵機はループの頂点から急降下に移行していた。逆落としだ、来る。

「タグサリ、ブレイク、ブレイク。右だ、逃げろ」

無線スイッチを操作する余裕もないのか、耳にはタグサリの激しい息遣いが届く。敵機が狙っているのは間違いない、タグサリだ。イライは急旋回、速度を失うのも承知でタグサリ機の援護に入る。緩降下で高度を速度に変換する。

「イライ！」

タグサリが叫んだ。同時に曳光弾の軌跡が空から降ってくる。冬の初めの霰か、さもなければ舞い落ちる打ち上げ花火だ。次に見えたのは、紅蓮の炎だった。イライは背筋を一適、汗が流れたのを感じた。やられた。

「タグサリ！」

応答がない。イライは機体を傾ける。黒煙、そして炎。タグサリ機の左主翼の半分以上が失われていた。左垂直尾翼もない。敵機の砲弾はタグサリ機のちょうど左肩あたりから入り、右脇腹へ抜けた格好だった。派手に火を吹いているがプロペラは回っている。エンジンはまだ生きている。しかし、あれではエンジン本体への被弾は間違いなかった。

「大尉、イライ、ダメだ、機体がいうことを聞かない」

雑音がひどい。無線装置かアンテナも損傷したようだ。が、タグサリもまだ生きている。

「あきらめろ、まだ来る。ベイルアウトだ、タグサリ」

「脱出する、ダメだ！」

敵機がタグサリ機の黒煙を撒き散らすように通過する。速い。猛烈な速度だ。急旋回をしないまま、飛び去る。敵の戦闘機は塗装を省いているのか、シルバーの地肌に青空を映していた。それがイライの目に映えた。イライは奴の航跡を追うようにして機銃を撃つ。短く、一度、二度。曳光弾が敵機を追うが、当たらない。もちろん、

イライも当たると思って撃ったわけではなかった。イライはメーデーを打電した。

「タグサリ」

見ると、タグサリは緊急脱出ハンドルを引いたようだった。キャノピーレールから白煙が上がった。が、プロペラが飛ばない。機体後部にプロペラが配置されているＧＣ－８は、機体を捨てて脱出しても、回転するプロペラで乗員が殺される。緊急脱出ハンドルを引くとまずキャノピーロックが爆破解除され、次に、プロペラが爆散される。そして火薬の仕込まれた座席が機体を離れる。火薬の量は多くないが、手作業でキャノピーを開けて脱出するよりは、乗員の生存率は高くなる。ほんの数メートルでも座席ごと機体から離れられればだ。イライはタグサリ機のキャノピーが飛ぶのまでは見えた。が、座席が飛んだかどうかはわからなかった。敵機が旋回を始め、イライ機に向かってきたからだ。

（クソ）

胸の中で毒づく。口に出すほどの余裕はなかった。敵機は速度を保ったままゆるやかに旋回を続けていたからだ。急旋回をしないというのも情報どおりだな、そんなことも思った。敵機の旋回が終わる前にイライはスロットルを全開、エンジンが焼け付けと言わんばかりに速力を上げた。過給圧計の針が最大値のあたりで震えている。オーバーシュートを考慮しても余裕を持たせた過給圧だが、エンジンの圧縮比はそのために低い。整備員の精緻なメンテナンスを信じ、最大出力を維持する。対気速度は理論上の最高速まで届かない。最新鋭の名が鳴く。十八気筒の大出力エンジンは最大過給圧で悲鳴を上げる。最高速を出すには空気が濃すぎる。高度が低いのだ。じりじりとする胸中は焦りか。墜とされるのが恐いわけではない。きっと墜とされても屈辱を感じるだけだ。それが耐えられない。地平線が水平線にワイプする。海岸線が見えてくる。海に出てしまえばいい。僚機被弾、敵機一機撃墜の情報はすでに打電した。メーデーを受信した基地から友軍機が上がってくるはずだ。海に出てしまえば、

そう、海まで行けば奴らも追ってはこないだろう。全速力だ。がんばれ、ポンコツの最新鋭機。

逃げる？

そう、逃げるのさ。生き残ったほうの勝ちだ。相手を低空に引きずり下ろし、ドッグファイトに持ち込めば撃墜できるかもしれないが、最初の一機を墜とせたのは天佑か、あるいは相手が間抜けだったからだ。イライは謙虚だった。だから生き残ってこられたんだ。奇襲は一度しか通用しない。あの敵機の急上昇を見たあとで、イライの戦意は喪失していた。同じことをこの戦闘機でやれば上昇途中で失速する。自転車でモーターサイクルに勝負を挑むか？　挑まないだろう。

捨てるだけの高度は持っていた。主翼が抵抗にならない程度に機首を下げ、加速する。全身が座席からすっと浮くような、主翼の負荷が最低レベルまで落ちた姿勢を意識する。瞬発力ではこちらが上だ。そう信じる。増槽を捨てた機体は抵抗を減らしており、操縦桿は重い。対気速度計を見なくても、機体がほぼ出せる限りの最高速に到達したことを知る。この高度ではこの速度が限界だ。高度を捨てたのは失敗だったかもしれないと悔やんでみたが、もう下手な機動は自殺行為だった。往路に見たサイロが猛烈な速度で過ぎていく。国道を越える。振り向くな。バックミラーに敵機は見えなかった。グラブの中が汗でいっぱいだ。全身が緊張している。恐怖はなかった。屈辱を感じるだけだ。

海に出た。眼下に波頭と漁船。初めて振り向いた。敵の姿はなかった。ただ、タグサリが墜ちた黒煙が、ずっと遠くに見えていた。

涙など出るはずもない。

2

基地は海を渡り、海岸線沿いに国道上空を二十マイルほど飛び、ソラノ川の河口を十マイルほど上流へ、コヤチダ本線の赤い鉄橋を過ぎて真ん丸い沼地を越えたすぐそこにある。一面だけ伸びた滑走路は二五〇〇メートル。対空砲陣地の土塁が上空から確認できる。川の上で機首を振り、速度を殺してアプローチに入る。可変ピッチプロペラは大きく、反転トルクは着陸時に気を使う。が、増槽を捨てた挙句に空戦機動を経た機体は軽く、風の影響も無視できる程度であるから、着陸は楽だろう。

行きは二機で、帰りは一機か。イライは補充人員がいつ来るのか、グラブの中の汗がすでに乾いたことを感じながら、思った。タグサリが生還するとは思えなかった。コクピットへの直撃弾ではなかったようだが、座席も飛ばず、パラシュートも出なかった。自分が見えたのはタグサリ機のキャノピーが飛んだところまでだ。その時点で彼の機体後部は炎に包まれ、プロペラは回っていた。要するに緊急脱出の初動シーケンスであるプロペラ爆散が失敗したということだ。もし自分なら、脱出できる状況ではなかっただろう。脱出できたとして、パラシュートが開ききるだけの高度も怪しい。

沼を越えた。すでに主脚は下ろしている。降着灯を点灯させ、管制塔に帰還を告げる。労をねぎらう言葉はなく、未帰還のパイロットを悼む声もない。今日はまだましだ。六機が出撃して四機が帰還しなかったのは、つい三ヶ月ほど前の話だ。以来パイロットも戦闘機も補充がなく、班長はローテーションに頭を悩まし、パイロットは疲れ果てていた。飛ぶことに嫌気を感じたことはなかったが、イライ自身、果てしない諦観にとらわれて、気づけば仲間とはなれて自室のベッドに転がっていることも多くなった。まるで学校を出たばかりの新米のようだ。今日、果たして二機ではなく、四機で出撃していればタグサリは墜とされずにすんだか。それはわからない。

考えても無駄だ。
　主脚が滑走路に接地する。ほとんど煙も出ず、軟着陸。スポイラーを立て、スロットルを絞る。エプロンまで機体を運び、エンジンを切る。キャノピーを開くと、秋風が冷たかった。コクピットには一応空調が……といっても暖房だけだが……ついている。しかしそれ以上に、密閉された空間から開放されるこのとき、イライは気づけば大きく息を吸い込んでいる。
「お帰り」
　ホガリがボーディングラダーを用意する。イライは無言でラダーを降りる。
「タグサリは」
　知っているだろうに、ホガリは訊く。イライが答えないのも知っているのにだ。ラダーを降りきり、イライはわずかな時間、ホガリに向きあった。自分より頭半分背が低い。俺よりパイロット向きなのではないか、何度思ったかわからない。イライは飛行隊でいちばん上背があった。
「煙草、持ってるか」
　言葉の接ぎ穂が見つからなかったわけではない。もちろん探したわけでもない。ただ煙草を喫いたかっただけだ。
「持ってるが、ここではダメだ」
「わかってる」
　イライはホガリから離れ、やや早足で進む。ホガリは追ってこない。パイロットに代わって戦闘機に乗り込んだ。空中戦を終えた機体だ。そのまま掩体に格納するわけにもいかない。ホガリは牽引車を呼び、機体を整備庫まで運ぶ。イライはまっすぐ待機室へ向かった。扉を開ける寸前、わずかに振り向いた。愛機と、牽引車、そしてコクピットのホガリが見える。今日も被弾しなかった。が、タグサリ機は墜ちた。待機室に入ると、パイロットたちの視線が一斉にイライを向いた。飛行隊の年齢的序列では、イライは上から数えたほうが早い。タグサリはイライの次に年を食っていた。出撃前に彼

が喫った煙草は、きっとまだこの部屋の灰皿に残っているのだ。けれどイライはタグサリが出撃前、どのソファに身を投げ出し、どの灰皿に煙草の灰をぶちまけていたのかを知らない。イライの席は待機所の出入り口から最も遠い窓際と決まっており、そしてイライはタグサリがいつもどこに座っていたのかを覚えていない。

「イライさん」

指定席に腰掛けようとして、呼ばれた。セムラだ。ローテーションで一昨日いっしょに飛んだパイロット。年齢的には下から数えた方が早い。

「タグサリさんは」

イライは答える代わり、セムラの飛行服の胸ポケットから煙草を抜いた。

「もらっていいか」

セムラは答えず、オイルライターを差し出して火を点けた。きつい煙草だ。タグサリが喫っていた煙草と同じなのかどうかも、イライはわからない。

「イライさん」

「墜とされた」

我ながら感情が欠如していたと思う。案の定、セムラは表情を固めたまま、立ち尽くしていた。

「敵の新型だ。初めて見た。タグサリはあれに墜とされた」

言うと、場にいたパイロットたちが少しざわめいた。声のないざわめき。ここまで来たか、そんな印象の吐息が混じる。

「でもイライさん」

「なんだ」

「一機墜としたと」

窓の向こうから回転翼機の羽ばたきが聞こえる。救難機か。タグサリが墜ちたのは海ではない。そして、彼が墜ちたのは中立地域であり、彼は墜ちたのではなく撃墜されたのだ。回転翼機がどこへ向かうのか。

「気をつけることだ。奴は速い」
「新型、が」
セムラのよこした煙草はうまくない。自室に戻れば自分の煙草があったが、今は座りたかった。ソファに身を預ける。
「イライ」
セムラの肩越しに、別のパイロットが呼ぶ。チナミだ。年齢的には、真ん中。
「班長が呼んでる」
「これを喫ったら行く。伝えてくれ」
「自分で言え」
チナミも飛行服姿だった。
「セムラ、行くぞ」
セムラはイライの前を離れる際、ほんのかすかな躊躇を膝の裏に見せた。何か訊きたいのか。イライは喉から出かかったが、待機室の扉を音を立てて開き出て行くチナミの後姿に、言を飲み込んだ。セムラは胸ポケットの煙草を、イライの座るソファ横のサイドテーブルに投げ出すように置き、短く嘆息して部屋を出た。外はまだ日が高い。本日四ソーティ目か。ランナップするエンジン音がイライの耳にも届いた。牽引車に引かれて二機のＧＣ－８がエプロンに並んだ。機番はセムラとチナミの乗機だ。イライが以前配属されていた飛行隊では毎日乗る戦闘機が変わったが、ここは戦闘機とパイロットの数が同じで、パイロットは毎回同じ戦闘機に乗った。言い訳できないところが気に入ったが、くせのある機体をあてがわれたと文句を言うパイロットがいることも知っていた。それも言い訳だとイライは思っていた。
背後で何かを放り投げる音が響く。振り向くと、一冊の雑誌がゴミ箱に命中せず、床に転がっていた。
「はずれたか」
タグサリの次に年増のパイロットがつぶやいた。
「取っておいてやれよ。奴の読みかけだ」

別のパイロットが言った。
「イライの顔を見ろよ。帰ってこねぇよ。あいつは」
雑誌を放ったパイロットが、片手にサイダーのビンを握ってつぶやく。
「冷たい奴だ」
俺のことかと言おうとしたが、イライはとどめた。ソファに座った時点で、どっと疲れがあふれ出していた。目を閉じる。セムラとチナミの機のエンジン音が高まっている。まぶたの裏には、敵の戦闘機の排気ノズルから吹き出していた炎がよぎる。
新型か。
俺は新型じゃないからな。
イライは飛行班長が呼びに来るまで、ソファで午睡を決め込んだ。呼びに来たら報告に出向いてやる。たっぷりと、あの数分間のできごとを話してやる。班長が嫌になるまで。
タグサリは墜とされたのだ。

飛行班長はキリウといった。イライよりはわずかに若いと聞くが、実年齢は知らない。少佐の階級を持っていたが、純粋培養の臭いがした。ともに飛んだことが数回あるが、反転トルクを「上手に」利用した飛び方をする。イライはあまり好きではなかった。だが、腕はあった。キリウの駆る戦闘機は、鳥のように飛んだ。
「報告は以上です」
イライが言うと、キリウはシガレットケースから煙草を抜いて火を点けた。仕草そのものを言葉にしようとする、それは大根役者がリアクションに困って行なう小技のように思えた。反転トルクを利用するように、俺を利用してみろ。イライは眉に意思をこめてみたが、キリウには見えなかったようだ。
「ＤＦ２００だ」
ふた口ほど煙草を吹かしてから、キリウが言った。
「はい」

「あんたの見た新型だよ」
「はい」
「こんな奥地まで配備されてるとは思わなかった。上には報告を上げる」
「連絡機を出すのですか」
「バカな。撃墜される」
「では」
「定期便に報告書を載せる」
基地の裏手に、コヤチダ本線の信号所がある。航空ガソリンや弾薬、その他の物資はそこに作られた簡易プラットホームで荷受された。定期便とは、貨物列車のことを指していた。
「爆撃されないことを祈ります」
「皮肉か」
「タグサリは墜ちました。それだけで十分です」
イライはできる限り屈辱を唇の端に浮かべないように努力した。僚機が撃墜される。こんな屈辱は、自分が撃墜されるに次いでのものだ。
「救難機は入海を越えられない」
航続距離のことを話しているのか、それとも敵の脅威のことを話しているのか、イライは詮索しないことにした。
「レンダさんはなんと言っているんですか」
「隊長は何も言っていない」
「キャノピーは飛びました。けれどプロペラが飛ばなかった」
「絶望的だな」
「そうは言ってない」
キリウは手荒に煙草をもみ消し、罫線だけが鮮やかな複写式の書類を放り投げてよこした。
「明日までに書いてくれ。明日の昼には定期便が来る。それに載せる」
「出撃報告書でいいんですか」

「我々の戦闘機は偵察機じゃない。それともスケッチでもしてくれるのか」
「ご要望なら」
「期待してない」
「ハスミに描かせますか」
「モンタージュを作るわけじゃない。あんたの言葉でよく分かった。もういい。戻っていい」
飛行服のままのイライ、制服のキリウ。事務室の空気は淀んでいた。キリウの吐き出した煙草の煙が層雲のようだった。イライは一礼して踵を返す、が、退室寸前で立ち止まり、ドアを向いたまま言った。
「チナミとセムラを上げたのは誰の指示です？」
滑走路に面した事務室は静かだった。ブラインドのスラットは中立位置で、傾きかけた日差しが縞模様を床に落としていた。
「俺だ」
キリウが答えた。
「空対空装備で？」
「そうだ」
「ひとつ訊いていいですか」
沈黙。キリウが応えたのだ。
「俺とタグサリはなぜ飛ばされたんですか」
沈黙。
「本当は知っていたんじゃないですか」
沈黙。
「電探情報が俺たちを追いかけてきたのも不可解だ。違いますか」
「イライ大尉」
「はい」
「俺は答えられない。それが答えだ。わかってくれるか」
イライはドアを向いたままで、一度瞬きをした。普段なら瞬きなど意識しないはずなのに、そのときは自分が一度瞬きをしたと、は

っきりと認識した。
「わかりません」
イライはそう言い残し、部屋を出た。
煙草を喫いたかった。自分の煙草を。
イライは飛行服の前をはだけた。汗の臭いが上がってきた。航空ガソリンの匂いも上がってきた。短く刈った髪を、右手でかきむしってみた。汗が散った。煙草の前にシャワーでも浴びるか。
明日はアラート待機だった。ならばいい。今日はもう飛ぶことはない。
チナミとセムラが帰ってこなくても、今日はもう俺は飛ばない。そうさ。俺のノスリは格納庫で整備中だ。
右手の拳を握り、軽く壁を、ノックするように突いた。冷たかった。次に、今度は腰を入れて右腕を振る。壁が鳴る。思いのほか大きな音がした。
キリウにも聞こえたことだろう。
今日の空はことのほか青かった。

3

事務棟を出ると、碧瑠璃の空が目に痛いくらいだった。日は傾いていたが、一向に空は茜に染まる気配もなく、空中の湿度がそれでわかるような気がした。事務棟から宿舎へ続く道には落ち葉が散っていた。どこかからか、コンプレッサーが激しく作動する音が届く。もしかすると、ホガリがイライの戦闘機を整備している音かもしれない。整備や補修を行なう格納庫は、普段、戦闘機がねぐらにしている掩体とは離れていた。格納庫での整備が終われば、牽引車に引かれて戦闘機はトンネルのコンクリート部分だけを抜き出したような外観の掩体に戻る。俺も戻ろう。帰り際にロッカーから持ってきた煙草に火をつけた。なじみの煙草だ。オイルライターはやや点きがしぶかった。もうフリントも芯もしばらく換えていない。換え時か。基地のＰＸにオイルライターの芯やフリントがあっただろうか。町へ出れば購入できるが、あまり町に出る気もしなかった。

宿舎は事務棟を出て、くるくるゆっくりと回る電探のアンテナを眺め、葉をすっかり落とした雑木林を過ぎ、茂みの向こうに誘導路と針葉樹に囲まれた掩体を数えながら二十分も歩いた先にある。他の同僚たちは自転車やモーターサイクル、あるいは自動車に乗った。自動車でそのまま自機の格納されている掩体へ直行し、機付の整備員と出撃まで過ごす者もいる。イライはそういうパイロットではなかった。格納庫以外でホガリと顔を合わすことはほとんどなかったし、イライが飛んでいるあいだ、ホガリは＞自分の＜戦闘機が無事に帰ってくるのを祈り、ホガリが仕事をしているあいだ、イライは＞自分の＜戦闘機が羽をゆっくり休めている姿を想像するしかない。機体整備に関わる広く浅い知識はパイロットにも備えられていたが、エンジンの調整や動翼の整備に関しては、プロに任せるしかない。

（もう少し、エレベータが軽ければいい）

墜とされてしまったタグサリを想う。あのとき、タグサリ機は優

に三〇〇ノット以上出ていただろう。あれほどの高速になると、ノスリのエレベーターは錆びついたポンプのハンドル並みに重くなる。パワーダイブなどをかけ、機速が五〇〇ノットを越えようかという領域になると、下手を打てば引き起こしもできないまま墜落する。実際、そうして未帰還となったパイロットもいた。イライの同僚にも、コンプレッシビリティと呼ばれる操縦不能状態から回復できず、二度と夕食の席に現れなかった男がいた。

（エンジンを切れ）

誰がそう教えてくれたのだろう。

高空からパワーダイブをかけ、あまりの速度に戦闘機が石になったとき、パイロットはエンジンを切るしかないのだ。そして速度が低下するのを待つ。そのとき、敵機がいればそれまでだ。撃墜される。エルロンは利くかもしれないが、エレベーターが動かないのでは、早晩墜落するしかないからだ。

誘導路と掩体地区のあいだに茂る雑木林のなかの細い道を行く。この辺りには、本物のノスリがいると聞く。が、イライは見たことがなかった。それでも歩く。森が好きだった。暮れたあとの森の中を歩く気にはならなかったが、これくらいの時間は気持ちがいい。夏になると羽虫が波状攻撃を仕掛けてきて、それらの撃墜に奔走するからあまり楽しくはないが、春と晩夏のこの時季はいい。通用道路から外れたこの道は、宿舎への近道でもあった。基地は戦闘機の数のわりには広く、なれた者以外がこの道を選べば、そのまま原始林が広がる丘陵へ迷い込んでしまうかもしれない。基地はソラノ川と湿地と、なだらかな丘陵をびっしりと埋め尽くす森林地帯の真ん中に作られた。高低差はほとんどないが、あてもなく歩けば唐突に湿地やあのまん丸の沼に出たりして、奇妙な場所だった。空からは確認できる対空機関砲の陣地も、下を歩くとどこにあるのかよく分からなかった。迷彩されているからかもしれない。空を飛んでも、（そこに対空機関砲陣地がある）と知っているものでなければ、意識できないかもしれない。迷彩は重要だ。イライが駆るＧＣ－８型

戦闘機には、水色に灰白色を混ぜたような塗装が施されていた。本部の研究者たちが空の色の分布を散々研究して配合された色らしいが、誠に無愛想だった。一昔前なら許された、派手な飛行隊マークも禁止されていた。戦いはもう、自分の預かり知らぬところで繰り広げられ、もしかすると自分たちは、ただの下請けなのではないかという疑問すら感じる。それはある意味正解なのだが、イライは意識して考えないようにした。飛べればいい。飛べれば。

宿舎にたどりつく。木造、二階建て。山間部の田舎にある学校のような外観で、屋根はマンサード式、格子窓の枠は、かつて緑色に塗られていたのだろうと思わせるが、板張りの壁と同じくペンキははげ、ノスリに施された制空迷彩に似た色合いになっていた。

扉を開けると、それはもう十数年前に通っていた学校の僚を思わせる風情だ。誰が使っているのか、一度として受話器が取り上げられているのを見たことがない公衆電話が一台と、粗末な受付。傾いた植木鉢にはコニファーが植えられていたが、誰かが灰皿がわりに吸殻を土に挿したまま、イライはその姿がもうふた周りほど季節を巡っていることを知っていた。

イライの部屋は二階の北の角で、宿舎は部屋数よりパイロットの方が少なかったから、二人部屋を一人で使っていた。前の基地では同室の人間とそりがあわず、できるだけ部屋に戻らないように心がけていたが、ここではそんな心配もなかった。向かいも隣の部屋も空き部屋で、宿舎の規模からも、ここが以前は相当な規模の基地だったことがうかがわれた。単に戦闘機の数が足りないのか、それとも戦線がもっと別の場所に移動しているだけなのか。そのわりに敵の最新鋭機と遭遇したりするのだからたまったものではない。そういえば、撃墜されたタグサリの部屋はこの建物ではなかった。一度も宿舎で顔をあわせたことがなかった。宿舎の建物は基地の北側から順に何棟も続いており、さながら開拓村の団地のようだった。

二階に上がると、誰かがラジオかレコードを聞いているようだった。女性が二人、美しいハーモニーで、伴奏もなく歌っていた。そ

れは賛美歌のようで、民謡のようで、不思議な旋律だった。イライの部屋にラジオはあったが、めったにスイッチをいれたことがなかった。部屋で人工的な音をたてるのは、真冬にシューシューとやかましいスチームの配管か、緊急招集を告げる電話の音くらいで、普段、イライは本を読むか、ベッドに転がって眠った。

音楽はずっと流れていた。悪い気はしなかった。いい曲だと思ったりもした。イライはそのまま廊下を進み、洗面所の蛇口から水を手で受けて一口飲むと、部屋の扉を開けた。すっかり冷え切っていた。冬が近いのだ。窓から見える森はすべて赤茶けていて、針葉樹林だけが黒々としていた。基地の中なのに、この森の中に戦闘機が眠っているとは信じられない思いだった。うまく欺瞞したものだ。掩体は分散されているから、離陸直前を叩かれる以外、絨毯爆撃でもしない限り、すべての戦闘機を地上で潰すことなどできないだろう。もっとも、戦闘機ではなくパイロットを狙うのなら話は別だ。爆弾もいらない。ここを機銃掃射すればいい。けれど、敵の戦闘機や爆撃機が、識別圏を越えて基地の眼前までやってきたことは一度もなかった。今日の交戦は、こちらが中立地域まで出向いたために起こっただけだ。前線と呼べるのかどうかはわからないが、少なくとも「敵」の姿が見えないこのあたりの空気は平和だった。

イライはベッドに転がった。途端に全身がひどく疲れ切っていることに気づく。ぬるま湯の中に放り込まれたように、全身が弛緩した。心地よい苦痛だった。眠気が降ってくる。抗うことなどできようはずもない。イライは目を閉じる。一分も経たずに眠れそうな気がした。出撃して行ったチナミやセムラのことも忘れていた。薄情だろうか。そうではないだろう。みんなこんなものだ。タグサリにまつわる思い出が少ないのは、今日を予期していたからかもしれない。ここではみんな、一定の領域から相手側へは入らない。撃墜されるとか、そういう意味ではなく、深く知り合うと別れが重くなるからだ。機体も心も身体も、できるだけ軽いほうがいい。パイロットは。

飛行服もそのままで、イライは毛布に包まり、そのまま食事の準備が整ったという呼び出しが来るまで眠った。夢は、見たかもしれないが忘れた。

アラート待機は、二機が一組で、合計二組、四機の戦闘機が二四時間不寝番をする。とはいえ、片方の一組が十分以内に滑走路に出られる状態を二四時間維持すればいいだけで、四機の戦闘機が常に臨戦体勢にあるわけではない。戦闘機のエンジンをかけたままで滑走路端に待機する前進待機とは根本的に違った。また、中立地域を越えてここまでやってくる敵の戦闘機がいまだ一機も現れず、入海とは反対側の海峡の向こうからも、偵察機すらやってきたことがないこの地域にあって、アラート待機はいかに時間を早く進めるかが課題かもしれない。イライはその日、待機所に一冊の地図帳を持ち込んでだらだらと眺めた。

「どこへ行くんだ」

声をかけてきたのは、今日の待機で組になっている僚機パイロット、ハスミだった。

「どこへも行かないさ」

ハスミはここではめずらしく、煙草を喫わない男だった。だからといって、喫煙者を遠ざけることもしなかった。誰かが煙草に火をつければ自分が部屋を出て行くような男だった。

「じゃあ何で地図なんて開いている」

イライは今は煙草を喫っていない。だから近づいてきたのかもしれない。退屈な男に話かけてのだ。ハスミもよほど退屈なのだろう。もう一組のパイロット二名は、仮眠室で寝ていた。今はイライとハスミの組が十分待機だった。ホガリたち整備員も別室で待機し、連絡があればすぐにエンジンを暖気し、離陸できるよう臨戦体勢を取る。

「地図が好きだからだ。航法にも役立つ」

待機所は六畳ほどの広さしかないが、窓が大きい。アラートハン

ガーと続きの建物で、ハンガーへの扉は押せば開くパニックドアになっていた。その分隙間風が入りやすく、だから部屋には強力なストーブが設置されていた。そろそろ火を入れたい。今日は日が高くなっても寒かった。

「そうは思えないな」

ハスミは新聞を小脇に抱えていた。イライより五つ以上は若いと聞くが、実年齢以上に老成した態度で、その印象はタグサリよりずっと大人だった。自分の精神年齢が低いと自認するイライにとって、その老成さは羨ましくもあり、妬ましくもある存在だ。

「それはどこの地図なんだよ」

ハスミは中尉。けれどここには階級差が存在していないようだ。前の基地では顕著ではなかったにしろ階級差が歴然と存在していたが、ここの雰囲気はずいぶん違う。最初は面食らったが、季節を三周した今はもうそれが当たり前だと思うようになった。生きている奴が偉いんだ。いや、生きて帰ってきた奴が偉いんだ。

「どこの地図だってかまわない」

「航法に役立てるんだろう？」

「役に立たないかもしれない。けれど、いつかここを飛ぶかもしれないからな」

イライはそう言うと、ハスミを向くこともせず、紙面から照り返す小春日和に目を細めた。

「あんたは変わってる」

小脇に新聞を挟んだまま、ハスミはイライの隣に座った。

「あんたも変わってる」

イライは答えてやった。

「俺の、どこが」

「あんたはここより偵察飛行隊が向いているんじゃないか」

「皮肉かな」

「真面目に言ってる」

ハスミは笑って新聞を開いた。前線のことや継続中の交渉のこと

が載っていない。すべてが幻なのかもしれない。
「スケッチブックを持って戦闘機に乗れっていうのか」
「帰ってきてから描けばいい。どうせ現像には時間がかかるんだ。同じことだよ」
イライが言うとまたハスミは笑った。ハスミは趣味なのか本業なのかわからないほどに達者な絵を描いた。整備員から他機のマーキングを頼まれたりするらしいが、本人は断り続けているらしい。
「俺はカメラは得意じゃないな」
ハスミは新聞を眺めてつぶやいた。
「写真ならヒイラギに頼めばいいのさ。写真偵察なら」
「戦闘機に乗っているのに、偵察か」
「昨日は偵察だった」
「哨戒だったんだろう」
「似たようなものだ。中立地域に二機だけで行くなんて、自殺行為だったのかもしれない」
地図を広げ、その向こうに広がる滑走路を眺めて、イライ。
「なぜそう思う」
「上は知っていたように感じるからだ」
「おとりだったとでも？」
「違う。エサだよ」
「ずいぶん豪華な生餌だ」
「食いついてきたじゃないか」
イライが言うと、ハスミは新聞を四つ折りにしてテーブルに放った。
「噂じゃ、あんたの方から仕掛けたらしいじゃないか」
「誰から聞いた」
イライが問うと、ハスミは目を細めた。笑ったのだ。
「いまあんたが答えたさ」
「なに？」
「あてずっぽうだ。タグサリとあんたなら、あんたの方から仕掛け

そうだ。試してみたかったんだろう？　ノスリがミサゴに勝てるかどうか」
「ミサゴ？」
「あんたが出会った敵の戦闘機だ」
「そんな名前なのか」
「ＤＦ２００ってんだろう、形式名は。そこまでわかっていて、なぜあんたを上げたのか、俺にもよくわからないよ。貴重なパイロットと戦闘機を一機無駄にして」
　ハスミは表情をわずかにこわばらせたが、唇の端にはいつもの柔和さがあった。スケッチをしているときの方がよほど恐ろしい顔をしている。飛行隊の中で、イライが相手の趣味まで知っているパイロットは少ない。ハスミはその中の一人だった。
「ノスリとミサゴか」
　イライはひとりごちた。
「しけた名前だ」
　ハスミが言う。
「どっちがだ」
「両方だ」
　ハスミが答え、イライはほんのわずかに眉毛を寄せてみせた。笑ってやったのだ。怒りと屈辱と憎しみと葛藤以外の表情を他人にぶつけることは、イライはめったになかった。笑顔など見せられるか。それは脆弱な腹を敵機に見せてロールを打つようなものだ。撃ちこまれたら終わりだ。
「お呼びがかからないことを祈る」
　ハスミはふたたび新聞に手を伸ばす。
「弱気だな」
「あんたが命からがら逃げ帰り、タグサリは墜とされた。そんな奴の相手を俺はしたくはない。俺が鷹や鷲ならミサゴを相手にしてやるさ。ノスリじゃな」
　ハスミは三面記事ばかりを読む。イライも地図を追った。古い地

図だったから、今目線で追っている高速道路がどこまで伸びているか、実際に飛んで確かめたくなる。地図上では途切れ、その先は点線で表示されているが、実際はどうだろう。山を突っ切り、コンクリート製の立派な橋脚がそびえ、トンネルポータルが山腹に穿たれているかもしれない。
「新型が来るかもしれないそうだ」
ハスミは新聞の記事を読むように、そっけなく言った。
「なんだって」
「新型機が配備されるかもしれないそうだ」
「どこにだ」
「ここに」
「まさか」
「ノスリはいい加減、くたびれている。最新鋭といっても、前線じゃもう四型が登場してる。そろそろモデルチェンジだよ」
ハスミはページをめくる。
「誰から聞いた」
イライ。地図上のドライブは小休止だ。
「風の噂」
ハスミはイライを向こうともしなかった。待機所の奥からくしゃみがひとつ。仮眠中のパイロットのどちらかだ。確かに少々冷える。空は晴れている。山地のこちら側は乾いた空気が気温を奪う。今朝は放射冷却で冷え込んだ。雪はいつだろう。気象隊に聞いてみようか。けれど気象通報以上のデータを拾えるだろうか。
「風はどこから吹いて来るんだ」
イライは地図を閉じた。眠気を感じた。
「さあな」
ハスミは新聞をめくり続けた。
「新型が来たって、誰が乗るんだ」
「さあな。パイロットも一緒に来るんだろう。未修訓練に誰かが出張するなんて噂は俺は聞いてないからな」

「乗りたいのか」
「なんで」
「鷲や鷹なら乗ってみたいと」
「違う。鷲や鷹ならミサゴを相手にしてやってもいいと言っただけだ」
「その新型は、鷲や鷹なのか」
「ミサゴ以下かもな」
「なら、俺はノスリでいい」
「俺もだ」
ハスミは新聞の影から顔を半分だけイライに向けて、また笑った。前歯が一本欠けている。なぜ、いつ、欠けたのかは知らなかった。知ろうとも思わなかった。ハスミは絵を描くのが好きな男だ。それだけ知っていれば十分だ。
十分待機のローテーションが変わったのは日暮れ。緊急発進を告げる電話が鳴ることもなく、ディスパッチャーも欠伸を噛み殺していた。こちらから出向かない限り、もしかすると撃墜される可能性などないのかもしれない。ずっと気づいていた。イライはそれが、納得できなかった。屈辱だ。墜とされるのも屈辱だが、敵に無視されるのは腹が立つ。
けれど、日の落ちた滑走路と、誘導灯をこれ見よがしに点灯させ、それを背にして新聞を読み続けるハスミを見ると、それでもいいような気がした。
仮眠室に入ったが、イライは眠れなかった。
気分が高揚しない限り、覚醒し続けても眠気はやってこない。
病気かもしれない。
イライは地図帳をまた広げた。ハスミはとなりのベッドに転がり、枕を頭の上に載せて身じろぎひとつしなかった。眠ったようだった。
静かな夜がきた。

4

夜半過ぎ。イライは仮眠室のベッドで目を開いたまま仰向けになっていた。隣のベッドではハスミが枕を頭の上に載せたままの姿勢で寝息をたてていた。およそ警戒感のない姿だった。たとえば子供のように。イライがそんな連想をしたのは、もしかすると予感だったのかもしれない。

日付が変わろうとしている時刻、基地は平和だった。緊急発進を告げる電話は沈黙を保ち、待機室で十分待機を続けるもう一組のパイロット二人の低い談話の声が、薄い扉とパーティションで区切られた仮眠室までしとしとと届く。もう一組のパイロットはユサとアイズで、ユサがイライと同じ大尉、アイズは少尉だった。アイズは確か、三回目のアラート任務のはずだ。ユサがイライと同じ四機編隊長資格を持っているのに対して、アイズはまだ二機編隊長資格すら持っていない。ようするに若かった。イライから見れば、高等学校を卒業したての子供と同じだ。戦闘機操縦過程を修了してそのままこの基地に配属されたらしい。アイズとは二、三回しか言葉を交わしたことはなく、ともに飛んだことはまだなかった。そんなことを思ってベッドに横たわっていた。静かな夜だった。

このまま夜が過ぎてくれればいい。計器飛行に頼らざるを得ない夜間飛行は、誰もが敬遠する。それはイライも同じだった。海の上を飛ぶときは、漁船の灯火と空の星座が相対して区別がつかなくなることもある。美しい、そんな感傷が湧きあがったときがいちばん危険だった。人は何かに見惚れるとき、自分の位置を失っていることが多いのだ。戦闘機に乗るとき、自分の意思を失うことはすなわち死を意味する。確かに美しい夜空のもと、イライも星座を探すことはあった。航法のためだ。が、意識して見惚れないよう注意した。自分はそういったものが好きなのだ。だからなおさら。

ハスミが寝返りをうった。スローロール。右のエルロンを使って、

機体を滑らかに横転させる。操縦桿を劇的に操作し、くるりとロールさせるのは誰でもできる。それを倍の時間、三倍の時間をかけるのは難しい。スローロールを一定の速度でこなすことは、たとえばアイズには無理だろう。ハスミは、きっとできる。ユサも、多分できる。けれど、中立地域へ飛んで、ハスミが「ミサゴ」と呼んでいたあの戦闘機が襲いかかってきたとき、スローロールなど役に立つだろうか。フェイントとしてなら役に立つかもしれない。それにしても奴は速かった。排気管から吹き出していた青白い炎は忘れられない。あれはなんだったのか。飛行隊長のレンダに訊いたところではぐらかされるだけだ。幹部学校出の純粋培養組はイライたち飛行学校出を軽視する傾向にあった。それは班長のキリウも同じで、航空団幹部はみな同じだった。そういえば、今待機所で低い声でアイズに空中機動を伝授しているらしいユサも、幹部学校出のパイロットのはずだ。彼らは誇り高く、一様に抑制の効いた性格の持ち主だった。

目を閉じてみた。すると、聴覚が冴えてくる。耳の底に、夕刻宿舎に流れていた音楽がよみがえってくる。きっとレコードだ。基地のあるこの区域は電波状況が決してよくなく、飛行隊が使用するアンテナは目立たないぎりぎりまで高さを稼いでいた。個人所有のラジオの受信状態など推して知るべしで、もっとも近い放送用中継アンテナは、宿舎の部屋から目を細めて眺める山地の手前、戦闘機で飛べば三十分ほどだが、自動車やモーターサイクルで走れば半日かかるような場所にある。レーダーサイトもすぐそばにあるから、北方への偵察飛行の際はそこを必ず通った。この区域で、初雪の便りがもっとも早く届くあの山を越えると、海峡に出る。基地からその山地を越える北方監視の偵察飛行に出ることはあまりなかった。海峡の向こう側は味方の実効支配の効かない領域だったが、あちらに大規模な戦闘機基地があるとも聞かない。ときおり偵察機が識別圏すれすれまで飛ぶことはあるようで、そのときは緊急発進が行なわれるが、年に何回もなかった。こちらの戦闘機が最大巡航速度で識

別圏に到達したころには、もうあちらの偵察機は姿形もなかった。
目を閉じたが眠くはならなかった。アラート待機が明ければ非番になるが、その前にまた十分待機のローテーションがめぐってくる。眠っておいた方がいいのはわかっていた。けれど眠くならなかった。ハスミの寝息が気になった。そして、中立地域で墜ちたタグサリを想った。なぜ、中立地域にたった二機で哨戒に上げられたのか。解せなかった。ハスミとの会話で、イライはあのときの自分たちをエサだと自嘲したが、それはそのとおりだと感じたからだ。様子を見たのだ。上は。そして、イライとタグサリという生餌は、まんまと獲物をおびき出すことに成功したわけだ。イライは何の警告もなく、相手の一機を撃墜した。あれはツイていた。相手が初心者だったに違いない。あれほどイライが接近したにもかかわらず、回避するわけでもなく、逆に襲い掛かってくることもなかった。思い出してもあれはイライ側の完全な奇襲だった。よほどの初心者が新型に乗っていたのか。あるいはイライ側の奇襲が運良く成功しただけか。
虎の子とも呼ばれる新型の戦闘機に、初心者を乗せるだろうか。友軍もガスタービン機を開発しているとは聞く。ハスミに言われずとも、飛べる機体が存在しているらしいことも知っている。試験機ではなく量産機が飛んでいるらしいが、実戦配備されているのかどうかは知らない。レンダやキリウは知っているかもしれないが、イライたちには教えられてもいない。だから性能や諸元もよくわからない。その点、姿形をはっきりと視認し、ついで撃墜にまで至った敵機のほうが、味方の新型よりも身近だった。
相手の新型の第一印象を簡潔に述べるなら、その速度は特筆に価する。速かった。低空での急速旋回性能ならノスリの方が上だろう。だからノスリがミサゴを撃ち墜とせたのだ。奴は旋回速度に自信がないに違いない。噂に聞いたとおりだった。そして、あの上昇力は噂以上だった。タグサリは運が悪かった。エレベーターが効かなくなったノスリを、ミサゴは狙い済まして撃ち墜としてしまった。そのあとでイライが逃げ切れたのもまた、運がよかっただけかもしれ

ない。ガスタービンエンジンの弱点として、その高回転ゆえの加速性の悪さが挙げられているが、巡航速度で勝ち目はないだろう。わざと逃がしたのか、それとも互いに僚機を失い、戦闘を避ける気になったのか。イライはただ逃げただけだった。まともにやりあえる相手ではないと判断したからだ。出撃報告書にもそう書いた。タグサリが墜とされる要因となったあの一手、敵機の急上昇を見たとき、もうすでにこちら側は王手まで数手というところまで追い詰められていたのだ。イライはだから逃げた。

眠れない。目を閉じたまま、ユサの講釈に聞き耳を立てていた。彼は後輩思いで、飛行隊の誰からも嫌われていなかった。幹部学校出の奴らはみんなそうだ。人格者で誰からも好かれる。そういう遺伝子があるのだ。そして、自分は幹部学校出の奴らには疎まれている。扱いづらいのだ、おそらく。イライもまた、自ら彼らが操縦しにくいように振舞ってきたからだ。嫌う理由はどこにもなかったが、あの純粋培養面を見ると、素直に仲良く、という気分にはなれなかった。彼らは辺境のこの基地に配属されても嫌な顔ひとつせず、基地の仲間や町に住む人々を守ろうと真剣に思っていた。きっと、幼いころから愛情をたっぷり与えられて育ったのだ。だから、他人に分け与えるほどの愛情も持ち合わせている。自分にはない。他人に与えるほどの愛情など、ない。

ハスミはどうだろう。スローロールを打ったきり、ハスミは動かなかった。イライはハスミから、一度だけ聞いたことがあった。

（俺はね、イライさん）

まだ、ハスミはあのころ、自分を「さん」付けで呼んでいた。

（パイロットになりたかったわけじゃないんだ）

いつかわした会話なのか、まったく記憶になかった。元来イライは必要以上のことを記憶できない頭脳を持っていた。要点だけ覚え、他はすっぱり忘れ去ってしまう。おそらく端から覚える気がないからだ。物事や事象を、選択して記憶する。見たものすべてを記憶していたのでは、脳の容量がいくらあっても足りない。イライはそう

思うから、あのときのハスミの背景を思い出せない。季節すら。
（俺は、イライさん）
ハスミがどんな服装だったかもわからない。一緒に飛んだあとだったのか、それとも食事を終えたときだったのかも。
（絵描きになりたかったんだ）
表情はよく覚えている。敵機がいつどんなタイミングでエルロンを切り、エレベーターを使ったか、ラダーはどちらに向けていたか、それらをすべて記憶しているように。
（でもね、俺にはセンスがなかったんだ）
イライは絵を描く能力がまったく欠如していた。文章は書けても、絵は描けなかった。あれは特殊技能だ。おそらく天賦の。
（美術学校に行くつもりで、ずいぶん絵を描いたんだ。風景画ばかりだけどね）
ハスミの目はよく澄んでいた。パイロットに共通する目だった。
（だから目だけはよくなったよ。遠くばかり見てたから。俺の故郷は、ここによく似ているんだ。冬は寒くてね。誇れるのは景色だけだった）
ハスミの出身地も聞いたような気がするが、地名は思い出せなかった。イライが記憶できる地名は、爆撃目標や偵察対象地域くらいのものだった。
（でも、俺のセンスじゃ美術学校には合格できないって、宣告された）
イライの幼い日の夢はなんだったろうか。気づいたらパイロットになっていた。そう、空が好きだった。いつでも空を見上げていた。棚田の上空をパスして行った三機編隊の戦闘機は、おそらく既視感だ。未来の自分を、あの時、道端の道祖神に誓ったのだ。だから、幼い日の夢は、宣言するまでもなく「空を飛ぶこと」だった。
（俺の学力じゃ、大学には行けなかった。金もなかった。そしたら気づいたのさ。三食が保証されて、しかも他人よりは優れた視力を持っていて、ついでに給料までもらえる職業があるってね。飛行学

校の試験を受けたんだよ。だから）
　絵描きのセンスは、もしかするとパイロットにも共通するかもしれないな。イライはハスミとかわした会話で、そう答えたような気がする。うまくは説明できないが、ハスミの飛び方を見ると、空に軌跡を描くその飛び方を見ると、彼が絵描きを志望していた片鱗がうかがえる気がした。考えて飛んでいない。空全体にある自分の位置を、常に把握しているように見えた。空を画用紙かキャンバスに見立てて、ハスミの戦闘機はそのキャンバスの上に走る絵筆か何かなのだ。自分の飛び方とは違う。イライは考えて飛んだ。
（でも、今にして思えばね、パイロットになったのは正解だったかもしれない）
　どうしてだ、そう問うた記憶。
（下から見上げていた風景を、上から見下ろすのはいい刺激だよ。おかげでスケッチブックが前より埋まるようになった。飛んでる間は楽しい。敵機に出会わなければね）
　イライは違った。敵機に出会おうがそうでなくても、飛ぶことそのものが楽しかった。自分の飛行を邪魔する者は、排除する。排除できない存在があれば、逃げる。敵機だろうが、積乱雲だろうが、同じだ。それが自分のスタイルだった。
（イライさん、こんな話をしたのはあんたが初めてだ。悪かった）
　あのときハスミはそう言ったが、言葉の意味とは正反対の顔をしていた。笑っていた。
（身の上話をするつもりじゃなかった。ただ、なんとなく、あんたには話しておいた方がいいと思ったんだ。ありがとう）
　礼を言われる所以はなかった。が、イライはハスミにうなずいた。
　眠れない。夜は更けていた。ハスミは眠っていた。ユサはまだ講釈を続けていた。アイズがときどき相槌を打っていた。
　緊急発進を告げる電話は、沈黙したままだった。

5

待機所を出たときは、決まっていつも顔の脂っぽさにうんざりする。結局一度もコクピットに座ることも、自分の戦闘機に触れることもなく、イライとハスミは待機所を出た。雨だった。しとどと濡れるアスファルトには落ち葉がびっしりと張り付き、吐く息は白かった。ハスミはそのままイライを食堂に誘ったが、イライはやんわりと断った。飛ばなかった日は腹も減らない。若いころからそれは変わらない。おそらくハスミはイライよりも若い分、食欲もあるのだろう。色づいたナナカマドを見上げて、深紅に染まった実についた雫を数えて、ハスミの背を見送った。ハスミは飛行服のポケットに両手を突っ込み、小柄な背中をさらに丸めて、落ち葉をにじりながら歩いて行った。寒い朝だった。

もしかすると、そんなに長い時間ではなかったのかもしれない。イライはしかし、自分では記憶が停止するほどの時間を、待機所を出た先の通用路に立っていた。細かな雨が糸のように降り注いでいる。防水を考慮していない飛行服はもう雨に染まりはじめていた。寒かった。冬を予感させる冷たさだった。イライもまた、両手を飛行服のポケットに突っ込んだ。自分の体温が、そこだけまだアラート待機のままだった。待機所に戻ろうかと思うほどに、寒かった。もし、一度でも飛んでいれば、高揚する精神状態が、このように低い体温のままイライを許すことはなかっただろう。こんな雨でも、上がれば雲海を見下ろし、空にはまぶしいばかりの秋の日があるはずだ。

雲低高度はどれくらいだろう。顔を上げた途端、瞳に飛び込んできたのは秋雨の雫だった。瞬きをすると、それは瞳から零れ落ち、飛行服にまたひとつ、染みを作った。飛行隊の誰にも見られたくないと思った。まるで、涙を流しているみたいじゃないか。たとえば未帰還者の家族の涙を見ても、自分の涙はもうはるか記憶の彼方に

沈んでいた。涙を流す機能があることすら、もしかすると自分の身体は忘れているのかもしれないと思った。愛情？　一撃で撃墜してやるのが、俺流の愛情だ。誰にも言ったことはなかった。けれど、それが本音だった。

雨は降りやむ気配もみせず、もしかするとこのまま雪になるのではないかと思うほど、気温は低い。イライは宿舎へは向かわず、通用道路をＰＸへ向かった。喉が渇いていた。煙草も切らしてしまった。この時間ならもう、営業しているだろう。

ＰＸに入ると、暖房が心地よかった。救われた気がした。飛んでいる間は寒さなど感じても苦痛に思うことは少ないのに、地上にいると寒さがしみる。町のスーパーマーケットとまでは行かず、場末の雑貨店のような趣のＰＸの隅で、石油ストーブが赤く燃えていた。なじみのレジ係は今朝もあくびをかみ殺そうともせず、イライを見ると涙を浮かべて笑った。

「煙草？」

「喉が渇いたんだよ」

「アラート明け？」

「機密だ」

レジ係は二十代前半と思しき、少女然とした女だったが、イライたちパイロットに対してまったく気後れもせず、堂々とした態度はみなから好感を持たれていた。毎年何人かは彼女を口説こうとするが、至近距離から発砲する曳光弾を敵機がひらりとかわすように、彼女は応じたことがなかった。

「今日は何個？」

「一個でいい」

「どうせすぐ切らすんでしょ」

「一個でいいんだ。俺は」

仲のいい父と娘はこんなやり取りをするんだろうか。さりげなく、互いの領域を守りつつも、胸襟をある程度開けるような。

「他には」

「喉が渇いたよ」
イライはそう言って、冷蔵庫からコーラを一缶取り出し、サッカー台に置いた。よく冷えていた。だからイライは言った。
「こんなに冷えてるのはめずらしいな」
「いま入れたばっかりだからよ」
レジ係はそう言ってからりと笑った。ようするに、ついさっきまでこのコーラは、バックルームに眠っていたということだ。それだけ今朝が冷え込んでいると彼女は言いたいのだ。
「冷えてるのは歓迎するよ」
「こんなに寒いのに」
「関係ないさ」
イライは煙草とコーラ一缶と、チョコレートを一枚買った。飛んだあとなど、コクピットで飴をかじったりすることがあるが、糖分は大切だ。耐G性にも強く関わってくるそうだ。もっとも、今日は飛んでいないから、チョコレートはあくまでイライの嗜好だった。
「イライさん」
コインを手渡し、お釣りを受け取り、レジから離れようとしたイライに、彼女が呼んだ。
「タグサリさん、見つからないの？」
イライは、空戦中なら命取りになるくらいの時間だけ、普段の生活ならほんの一瞬分、彼女から視線をはずした。
「見つからないみたいだな」
イライはそれだけ言うと、ＰＸを出た。雨はまだ降っており、庇の下でコーラのプルトップを開けた。よく冷えていた。缶をあおった。炭酸が大暴れして喉を下っていく。心地よかった。そして、レジ係の彼女の名前を、自分は知らないことを思い出す。ネームをつけていたような気がするが、彼女の印象は、あの声音だけだった。名前に興味がなかった。
もっと言えば、イライは、墜ちたタグサリに対する感情、ようするに同僚のパイロットたちへの希薄ともいえる感情と同レベルのも

のしか、他人には持ち合わせていない。
いつか、俺もみんなもいなくなんだ。
余計な情は、悲しみを増すだけだ。
コーラをあおった。四口ほどでなくなってしまった。喉が渇いているというのは嘘ではなかった。コーラたった一缶では、その渇きが癒せるはずもない。
雨脚は強まることも弱まることもせず、相変わらず糸のように、そして冷たく、落ち葉が張りついたアスファルトに降り注いでいた。
これくらいの量の水を飲んでも、俺は満たされないだろう。
何に対して満たされないと思うのか、そこまで思考をつなぐことはせず、イライは煙草に火をつけ、そして雨の通用路に出た。

チナミが朝食の席でハンバーグがまずいとひとしきり文句を垂れたあと、イライのテーブルにそっと近寄り、妙な目配せをした。
「なんだ」
イライはスライスされたトマトをかじっていた最中だった。チナミが文句をいうほどに、ハンバーグはまずいと思わなかった。
「Ｋ７８１がアツマの西で残骸を見つけたそうだ」
それが何を意味するのか、イライはトマトをかじるのをやめた。
「間違いないのか」
「キリウが言っていた。間違いないだろう」
チナミはまずいまずいと文句を言ったわりに、すべてを平らげた朝食のトレイを持ったまま、平淡につぶやいた。
「ＧＣ－８に間違いなかったのか」
「六翅プロペラが牧草地に転がっていたそうだ。機体は黒焦げだったらしい」
「写真偵察を敢行したのか」
Ｋ７８１は友軍が保有する双発、俊足の偵察機で、最高速度に達すれば、ノスリでも追いつけない。ただ、その分高高度を飛行する。光学レンズで目標を確認、撮影し、機銃は積んでいない。偵察機に

とって武装はデッドウェイトだからだ。その分軽く、速い。そして、六翅プロペラを採用している戦闘機は、ＧＣ－８「ノスリ」だけだった。
「写真まで撮ったかどうかは知らん。撮ったのかもしれん。キリウは見たかもしれないが、俺は見ていない。ただ、残骸は確認されたそうだ」
　チナミはトレイをイライの向かいに置き、そして自分も腰掛けた。
「場所は間違いないんだろう？」
「機密だ」
「味方相手にか」
「キリウに言われた」
「純粋培養組の肩を持つとは、大尉らしくもない」
　チナミは笑いもせず、胸ポケットから煙草を一本抜き、イライに断りもせず火をつけた。
「肩を持っているわけじゃない。規律の話をしているだけだ」
「ますます可笑しな話だ」
　チナミの喫う煙草は煙が濃い。積乱雲のようだ。あのアラート勤務以来、空は重く鈍く、雲底は低いままだった。
「パラシュートでも見つかったのか」
　イライはふたたびトマトをかじった。基地のあるこの区域では、もはやとうの昔に旬を過ぎた野菜だった。コヤチダ本線経由で、南の海峡を越えて運ばれて来たか。
「さあ。そこまでは俺も訊けなかったし、キリウも何も言わなかったよ」
　チナミにはことさらじっくり時間をかけて煙草を喫っていた。イライはトマトを食べつくし、キャベツの千切りを目いっぱい口に放り込む。右手でミルクがたっぷり注がれたグラスを手繰り、一気に半分ほど飲んだ。
「救難機は入海を越えられない」
　イライはキリウとの会話を思いだす。

「救難機ではなく、偵察機を飛ばすとはな。どこから飛んだんだ」
「大方、チップの偵察航空隊あたりからだろう。中立地域まで飛べる偵察機は、あそこにしかいない」
チナミはずっと表情を変えない。真夏の油照りの空のような瞳を、じっとイライに向けたまま、煙草を喫った。
「訊いていいか」
煙草を喫うチナミに、ミルクのグラスを空けてから、イライが言う。
「なんだ」
「なぜキリウと話をした」
こんな朝っぱらから。それは言わなかった。
「セムラと俺が飛ぶからだ」
「飛行割りには載ってなかった気がするが」
「急遽決まった。一時間後、飛ぶ」
「セムラと、お前とでか」
「そうだ。二機だ」
「どこへ。まさか中立地域ではないだろう」
セムラが足かせになるもんな。お前が首をたてに振るはずもない。思ったが言わなかった。
「帰って来たら教えてやるよ」
チナミは煙草を根元まで灰にすると立ち上がり、隣のテーブルから灰皿を取り上げて、そこにもみ消した。灰皿はくすぶる吸殻を載せたまま、イライの前に置かれた。チナミ流の気遣いかもしれない。だが食後すぐにイライは煙草を喫わない。同僚の癖を、ここでもやはりお互いに知らないのだ。
イライはチナミが去ったあともなお、彼が残した積乱雲の切れ端が食堂の空気に漂うのを眺めていた。その向こうから敵機が飛んでくるような気がした。もはや、病気だ。
食堂にハスミの姿をなんとなく首をめぐらせて探してみたが、すでに食事を終えたか、さもなければ非番と決め込んで部屋で寝てい

るか、どちらかだ。彼の姿はなかった。
　イライはトレイを返却口に戻すと、待機所に入った。煙の層がいつもより薄かった。パイロットの数が少ない。今日は何曜日だったか。壁のカレンダーを見やったが、そもそも今日が何月の何日なのか、イライはすぐに思い出せなかった。当日の気象条件ならそらで言える。けれど、カレンダーがわからない。これも病気だ。
　気象隊の予報では、北の海峡から張り出している低気圧の影響がまだ消えず、ここ数日続いている空模様は変化の兆しがないという。うんざりだ。飛行割りを見たが、向こう三日は自分のローテーションが回ってこない。タグサリ機が撃墜されて以降、中立地域へ戦闘機が飛び立つことはなくなっていた。おそらく、ハスミが「ミサゴ」と呼んだあの敵機の存在があるからだ。飛行隊全部の戦闘機が相手になれば、いい勝負かもしれない。が、中立地域上空でそんな派手な行動には意味がない。幕僚監部も了解しないに違いない。そうでなくても、三ヶ月前に四機の戦闘機を無謀とも言える中立地域への飛行で失っているのだ。タグサリ機に続いてたとえばチナミやセムラが撃墜されでもしたら、キリウはおろか、飛行隊長のレンダまで、北海の孤島のレーダーサイト勤務か、さもなければ、前線基地と前線基地を結ぶ連絡便パイロットにでも転属になるだろう。彼らは勇敢だったが、愚かではなかったはずだ。
　イライは待機所の指定席につき、だまって羽音を聞いていた。チナミとセムラのＧＣ－８、ノスリがランナップ中だった。エンジンはもう暖気を終え、パイロットを待っていた。もてる限りの技術を投入して設計された排気タービン搭載の大出力エンジンが、いまはおとなしくアイドリングをしていた。六枚の可変ピッチプロペラが穏やかに回転していた。そしてイライは彼らの戦闘機の主翼に視線を移す。左右の主翼にそれぞれ一本ずつ、増槽タンクを下げている。あの日と同じだ。あの小春日和、タグサリと自分は、主翼に増槽を下げ、針路を南へ取ったのだ。
　まさか。

イライはいぶかしむ。ここの幹部連中がおろかではないといっても、限度を越えているのかもしれない。よもや、ふたたび中立地域への哨戒飛行でもするつもりか。装備はまったく同じに見えた。加えて酸素ボトルの数でもわかれば、彼らの任務が何であるか、イライでなくとも想像はつくだろう。

いや。

イライは待機所の入り口のラックから引っ張り出してきた雑誌を広げる。釣りの本だった。イライは釣りなどやったことがない。幼い日、仲間たちと川で遊んだことはあっても、この雑誌に載っているような、きらびやかなアクセサリーのような仕掛けを施した釣竿など持ったこともなかった。雑誌に落としていた視線を上げる。パイロット二人が機体に乗り込もうとしていた。セムラもチナミも、いつもどおり落ち付いていた。死地に赴くような雰囲気ではない。やはり違う。中立地域への哨戒飛行などではない。イライは判断した。だが、次に続かない。では彼らは一体どこへ向かうのか。

やがて、二機のノスリは羽音を高め、エプロンから出て行く。吹流しは東へ向かって流れていた。だから、彼らは西へ向かって離陸する。陽射しを背に受け、離陸する。轟音をとどろかせて、チナミとセムラは見事なフォーメーション・テイクオフだった。セムラも上達したものだ。アイズならああは行かないだろう。

イライは思う。

一度、自分の飛んでいる姿を、地上から見上げてみたい、と。

6

午後、森の中は薄暗かった。また降りはじめた雨はほとんど霧雨に近く、基地周辺はぼんやりとした霞に包まれていた。革のジャンパーを着込み、イライは森の中にいた。このあたりはまだ標高が低い分、緯度のわりに広葉樹が多い。が、広葉樹は秋になれば色づき、その次にはみな散ってしまう。霧雨が頬や髪やジャンパーにまとわり付く。顔を上げると、葉を落とした枝先の向こうに鉛色の雲が見えた。吐く息は白い。日に日に気温が下がっていくようだ。初氷はいつか。憂鬱になる。滑走路が凍ると余計な気を使う。やがて来る雪の季節になれば、猛吹雪で飛行場そのものが閉鎖されることもある。イライはポケットから煙草を取り出したが、一本抜き出そうとしてとどめた。落ち葉は折り重なってたっぷり水分を含んでいたから、たとえ灰を落としても燃えるようなことはないだろう。が、煙草を喫う気分にはならなかった。

ここは、墓地だった。

正式な墓標はない。が、ここは墓地だった。未帰還者たちの墓地だ。レンダやキリウたち飛行隊幹部は認めないだろうが、基地に勤務する者はみなここの存在を知っている。基地を飛び立ち、そして戻れなかった者は、ここへ眠ることになる。正式な墓標もなく、もちろん遺骨もなく、遺品もない。いわば、心だけがここに埋められる。残された者の、逝ってしまった者たちへの想いが、ここに眠っている。

卒塔婆を思わせる板が、十数本並ぶ。そして、そこには木が植えられている。未帰還者たちの数だけ、苗木がここで根を張る。冬季間に撃墜、あるいは未帰還になった者は、翌春に苗木が植えられた。見渡すと、朽ち果てた板が何本も見える。そして、イライの背丈ほどに成長した広葉樹が同じ数。一体何人のパイロットがここに眠っているのか、イライは正直な数を知らない。調べようとも思わない。

前にいた基地には、このような習慣はなかった。未帰還となったパイロットたちは、故郷でひっそりと眠った。もちろん、ここの基地の未帰還者たちも、正式な墓はその故郷に作られ、そこで眠ることになるのは変わりない。ただ、誰が始めたのか、森の中に、もうひとつの墓地が作られた。

基地のパイロットたちが進んでここを訪れることはない。まして、複数が連れだってここを訪れることは絶対にない。みな、ときどき、思いだしたようにここに来る。未帰還者たちを思いだすために。

他の同僚たちは、どうなのだろう。

イライはポケットに両手を突っ込む。そして考える。苗木とともに眠るパイロットたちを、イライは全員まで知らない。が、数人は知っている。三ヶ月前、一度に四機が撃墜され未帰還となったパイロットたちも、眼前に並んで眠っている。顔はわかる。名前もわかる。けれど、彼らの正式な墓が、どこにあるのかを知らない。彼らの故郷を知らない。彼らの家族を知らない。彼らの声や、趣味や、苦悩を知らない。知ろうとしなかったからだ。

イライはタグサリを思いだす。

結局、イライはタグサリが喫っていた煙草の銘柄も知らない。待機所のどこが彼の指定席だったかも知らない。宿舎のどこにタグサリの部屋があったかも、よく思いだせない。知ろうとしなかったからだ。

空では頼りになる男だった。だから、タグサリの飛び方は知っている。僚機の癖を知らなければ、自分の命に関わるからだ。その代わり、タグサリの地上での癖は知らない。

タグサリはまだこの森に戻って来てはいなかった。いまだ行方不明扱いだった。が、チナミの言葉が正しく、偵察機が見つけた戦闘機の残骸がタグサリ機なのだとしたら、そして墜ちていく姿を見る限り、タグサリが生きて基地へ戻ってくる見込みはゼロだった。早晩、ここにタグサリの名を刻んだ板が立てられ、誰かが苗木を植えるだろう。初雪には間に合わないかもしれない。ならば、来年の春、

タグサリの木がここに植えられる。
屈辱は感じていた。僚機が撃墜されるという、屈辱だ。が、怒りや悲しみではなかった。悲しむほどに、イライはタグサリを知らない。基地の同僚の中で、趣味や癖まで知っているのはハスミを入れて数名だけだ。が、たとえばハスミが撃墜されたとして、自分は悲しむだろうか。
いまここでその答えを出そうとは思わなかった。イライは逃げた。感情や感傷は、判断を狂わせる。いっそ機械のように、入力に対して無表情かつ正確であれば、生き残ることができる。より楽に。それを逃げているのだと言われれば、イライは否定するつもりもなかった。生き延びるための方策だからだ。
イライは嘆息した。吐く息は白い。髪は雨を受けて雫がこぼれた。そろそろ戻ろう。ホガリに機体の状態でも確かめに行こう。
隠された墓地に背を向け踵を返したとき、イライの耳に、聞き慣れない音が届いた。かすかだったが、それは雷鳴に似ていた。歩を進めようとしていたイライの足が一瞬止まる。なんだ？
低い雷鳴のような音に混じって、聞きなれた音も混じった。戦闘機のエンジン音だ。次の瞬間、イライは駆けだしていた。森の中の道を、浮き出た木の根に足を取られないよう注意しながら、イライは駆けた。
敵か。
真っ先にそれを思った。自分の機体は掩体か、それとも整備のために格納庫に引っ張り出されているか。それにしては、基地が静かだった。音が聞こえるくらいまで敵機が近づいているのなら、十分待機中の味方機が緊急発進するはずだ。が、滑走路の方角は静まり返ったままで、戦闘機が離陸する様子もないようだ。対空砲陣地も沈黙したままで、爆弾が降ってくるような予兆もない。
とにかく、イライは駆けた。
息が上がる。
年齢を、意識的に忘れることにした。

管制塔を横目にして、そのまま格納庫を過ぎ、エプロンまで走った。走りきれたじゃないか。イライは自分をほんの少し褒めてやると、霧のような雨が立ちこめる空を仰ぐ。爆音が近い。遮蔽物の少ない基地周辺は、音が反響しない。爆音が聞こえる方角を向くと、同じようにしてエプロンに駆けだしてきたパイロットや整備員たちの姿が見える。ハスミの姿を見つけ、イライは駆け寄った。呼吸を整えながら。

「よお」

イライを見、ハスミはかすかに震えた声を出した。今まで宿舎で眠っていたような目をしている。ジャケットを羽織っているが、下は平服だった。髪は乱れている。

「見物か」

ハスミはのんびりとした口調だった。敵襲ではないようだ。やはり。

イライは返事をせず、近づく爆音に耳を澄ます。

やがて、飛行機と思しき黒い点が雲底を割ってあわられる。四つ。二つはわかる。ノスリだ。前翼、プッシャータイプの特長ある機体だ。大排気量のレシプロエンジンの爆音をとどろかせ、滑走路に近づいている。降着輪は下ろしていないようだ。意外に速い。そして、二機のノスリが挟み込むようにしているのが、雷鳴に似た爆音の正体だ。

「……あれが？」

イライはハスミに言う。

「新型、だな」

機体はノスリより一回りほど大きく見える。近づくにつれ、その形状が輪郭をともなってくる。前翼式ではない。が、機首にプロペラがない。左右の主翼に何かを下げている。燃料タンクにしては巨大すぎる。もしかして、エンジンか。見る間に機影が大きくなる。

四機は水平飛行、低空を維持したままで滑走路上空をパスする。

ノスリのエンジン音と、それを上回る甲高い爆音が轟く。エプロンに駆けつけたパイロットや整備員たちから歓声のようなどよめきが上がったが、かき消された。パスする瞬間、四機の横顔が見えた。二機のノスリは、チナミとセムラのようだ。垂直尾翼に機番が見えた。やや遅れて飛ぶ二機の新型は、ノスリと同じ青みがかったグレーの制空迷彩が施されていた。機首にも機尾にもプロペラがない。水平尾翼が主翼より後ろにある、いわゆるトラクタータイプにある配置で、主翼はやや後退していた。キャノピーは水滴型で、視界はよさそうだ。パイロットの姿が一瞬見えたが、酸素マスクにゴーグルをつけていて、表情など見えない。一瞬でエプロン前をパスした四機は、滑走路エンドで緩やかに左旋回に入る。

「重そうだな」

旋回する様子を見たハスミが、イライの耳もとで言った。

「エルロンが重そうだ」

イライは答えない。

二機の新型は、先行する二機のノスリから編隊を解いた。チナミとセムラのノスリはやや高度を上げた。イライはチナミとセムラがなぜ今日飛んだのか、理解した。エスコートミッションだったわけだ。または、新型の出迎えか。チナミには悪いが、まるで露払いだ。新型は轟音のピッチを変えず、ゆっくりと旋回し、エプロン正面の森の上空にさしかかる。天候が悪い。さぞかしパイロットは緊張していることだろう。確かにハスミのいうとおり、新型機はノスリのような軽快さがなかった。チナミとセムラは基地上空を旋回、新型機はふたたびイライたち出迎えの左手から、滑走路に進入してくる。ずいぶんとアプローチの速度が高いようだ。主翼上面にスポイラーを立て、降着輪はすでに降りている。降着灯を点灯させ、二機はぴったりと寄り添って降りてくる。降下率は、慎重過ぎるほどに低い。まるで練習機の着陸のようだ。が、甲高いエンジン音は低くなる気配がない。スポイラーで強引に速度を落としているように見えた。そして、タッチ・ダウン。機体そのものも重いのか、なかなか減速

しない。着陸時の速度そのままに、対地降下による水煙を上げて、二機の新型はエプロン前の滑走路を過ぎる。ようやく耳障りだったエンジン音が低くなる。その上空を、チナミとセムラの二機のノスリが高速でパス。爆音が鼓膜を震わせる。が、誰も二機のノスリを見ていなかった。エプロンに集合した基地の面々は、みな、着陸した二機の新型に目を奪われていた。機首には機銃が装備されているようだ。穿たれた銃口の大きさはよくわからないが、十二、七ミリ以下ということはなさそうだ。片側に二つずつ。二機はスポイラーを立てたまま、しばらく滑走路を減速し続け、かなりの距離を走ったあとで向きを変え、誘導路に進入した。降着灯が雨の誘導路を照らしていた。

「噂どおりだったじゃないか」

ハスミが言った。

「でも、二機か」

「パイロット付きじゃないか」

「二機でどうする。たったの二機で」

「乗りたいのか」

「お前こそ」

「重そうだな。一緒に飛んだチナミに感想を聞いてみよう」

誘導路をゆっくりと、待っているこちら側からすればいらだつほどにゆっくりと、二機の新型は進んでくる。先頭が編隊長か。随伴しているのはウィングマン。しかし、新型を与えられているのだ。腕はどうか。アイズやセムラ以下ということないだろうな。

護衛任務が終了した二機のノスリも、新型機がエプロンに到着しようかというころには着陸し、新型よりもはるかに手前で減速、誘導路に入った。

「見ろよ。レンダとキリウだ」

ハスミが指した。エプロンの最前列に、列線整備員たちと並んで、レンダとキリウの背中が見えた。今日も制服だ。傘もささず、制服の肩はすでに雨に色を変えていた。風邪を引くなよ、純粋培養。

新型機が近づく。それにしてもやかましい。旋盤工場のようなこの耳障りな高周波はどうにかならないものか。そして、主翼に下げているものがうわさのジェットエンジンであることがはっきりと確認できた。仰々しいエンジンナセル以外は、機体はスマートで、優美さすら漂っていた。本当にこれが戦闘機か。イライは、普段乗っているノスリの方がよほど獰猛に見える。それを示すかのように、チナミたちの二機のノスリがエプロンへ。プロペラはまだ勢いよく回っており、水煙を巻き上げている。

やがて、二機の新型は停止した。地上の整備員は、イライの知らない顔だった。ホガリの姿も見つけたが、彼も新型に駆け寄ろうとはしていない。もしかすると、整備員も新型なのかもしれない。いつの間に届いたんだ。そういえば、エプロン脇には見慣れない自動車が何台か並んでいた。給油車と、あの箱を背負った車はなんだ。コヤチダ本線経由でいつの間にか運ばれていたのか。飛来が極秘なら、運用に必要な物資郵送も極秘の内に行なわれたかもしれない。イライはもう、この場から離れたくなっていた。何より寒い。新型機からはストーブが燃えるような匂いがした。途端に赤くストーブが燃えるPXを思いだし、チョコレートが欲しくなった。今日はまだ飛んでいないのに。

新型機のキャノピーが開いた。おそらくは編隊長。見晴らしのよさそうなキャノピーはアクリル製だろうか。一体成型技術も進んだものだ。パイロットはハーネス類を手早くはずすと、マスクをはずし、ゴーグルを上げた。年齢、三十歳前後か。整備員が用意したボーディングラダーを降りた。レンダが駆け寄り、握手を求めた。パイロットはそれに鷹揚に応じると、笑顔を見せた。何ごとか言っているようだが、取り巻く円のさらに外周で様子をうかがっているだけのイライやハスミの耳には届かない。そして、二番機のキャノピーが上がる。同じようにしてゴーグルとマスクをはずし、ラダーを降りる。小柄だ。もし自分と並んだのなら、頭ひとつ分くらいは背が小さいだろう。まるで少女のようだ。

思い至って、イライはふと気づく。二番機のパイロットの、邪気のない笑顔だ。ゴーグルをはずすと、子供のような瞳が見える。
「まさか」
口に出してから、ハスミに聞かれてしまったことを悔いた。奇襲のはずなのに、敵機に向かって射程外からやみ雲にぶっ放した機銃のような言葉だった。案の定、ハスミがこちらを向いた。
「どうした」
「あのパイロット」
「二番機の方か」
「そうだ。知ってるか」
「エリートさんかな。新型機に乗れるくらいだ。俺たちのような退役間際のポンコツとはちがうんだろう」
「女だ」
「女？」
「ああ。女だ。あれは」
女、と聞くと目の色が変わるハスミでも、イライの声音に別の物を感じたのかもしれない。茶化したりはしなかった。
「女のパイロットなど、めずらしいか」
「違う。……あれは、違う」
「知り合いか」
イライは、歓待ムードが一気に高まりつつあるエプロンに背を向けた。
「イライ？」
「眠くなった。俺は宿舎へ戻る。飛行割が出たら教えてくれ」
「おい、イライ？」
「気分が悪いんだ。……今朝食ったハンバーグのせいだ」
「イライ」
言ったが、ハスミは追ってはこなかった。
あの女。
イライはやや早足にして、エプロンから出た。霧雨は上がってい

たが、基地を包みこむ霧のような水滴はまだ漂ったままだ。
このまま吹雪になって、新型機もろとも滑走路が雪にうずもれればいい。
イライはまっすぐ飛行場区画を出た。格納庫の横を通るときには、駆け足になっていた。
よりにもよって、どうしてこんなところに。
イライは喉の渇きをかんじた。
ＰＸでコーラを買おう。チョコレートもだ。
そのまま宿舎へ戻り、呼集がかかるまで、俺はベッドの中だ。
冗談じゃない。
イライはいらだった。いらだちの原因がはっきりしているだけに、余計に腹が立った。

7.

飛来したのは二機。唐突とも思える展開だったが、たった二機で何をしようとしているのか、基地に勤務する者の中で真意を知っている人間はいなかった。もっとも、整備員やパイロットたちが知らなかっただけで、レンダやキリウたち飛行隊幹部は知っていた。イライが想像したとおり、二機の新型を整備する人間や機材は、前夜には、すでに基地へ到着していた。知らされなかっただけで、事実はそこにあった。

イライは閑散としたＰＸでコーラとチョコレートを買った。思い出したようにオイルライターのフリントと芯も買った。ライターフルードはまだ備蓄があったから買わなかった。そして、宿舎に戻ってから、煙草の残りが心許ないことに気づく。空中戦を終え、帰路につく際、機銃弾は残っているのに、残存燃料がいよいよ心細いことに気づいたときのように、心底がっかりした。

新型機のことなどどうでもよかった。そいつがＧＤ－Ｂなる開発名を持ち、「ハチクマ」なる愛称が付けられていることは、翌日になってからハスミに聞いた。どうでもよかった。問題は、ハチクマが軸流圧式ターボジェットエンジンを搭載していることより、ハチクマに乗っているパイロットだった。リーダー機に乗っていた方ではない。あの女だ。イライは目を疑った。そして、自分の目が彼女を捉えて以来、焦点を定めることができず、ＰＸでレジ係に体調を心配されたほどに動揺していることにも気づかなかった。偶然か。だとしたらひどい偶然もあったものだ。よもや彼女が同業者になっているとは、青天の霹靂だった。いや、寝耳に水か。

宿舎が禁煙であることなど、パイロットたちはみな無視していた。イライは残り少ない煙草に火をつけた。窓を開ける。ボイラーにまだ火が入らないこの季節、スチームのない部屋は、窓を開けるとさらに冷えた。雨音のしない雨がまだ降っていた。基地は静かだった。

飛行機が飛ばなければ、このあたりは静かだった。森がすべての音を、息づかいを吸収してしまうのだ。飛行機で五分もかからない場所に町があったが、自動車で向かえばその四倍は時間がかかる。だから町の息づかいも、間に入った森に吸われてここには届かない。居心地のいい場所だった。そう、すでに過去形だ。

自分はもしかすると体のいい理由を、そう、「戦闘機に乗り、敵を撃墜する」というただの題目をでっちあげて、あまつさえ「空への憧憬」などという口当たりのいい言葉に酔い、現実から逃げていただけなのかもしれない。唐突に舞い降りてきた、忘れようとしていた現実が、イライをかりそめの日常から引き戻そうとしていた。あのパイロットの顔を、イライはよく知っていた。酒でも飲みたいところだが、あいにくイライは酒が飲めなかった。それに、昼間から酒を飲んだとして、自分はパイロットであり、今日は休日ではなかった。すっかり規律のたががゆるんだここもまた、前線基地の一つであり、命令一つで自分は新型機の登場で「旧型」となりさがったあのノスリに乗り、飛ばなければならない。アルコールはいらない。

イライは窓辺に立ったまま、滑走路の方を向いていた。木立に隠れて滑走路もエプロンも見えないが、背の高い管制塔やアンテナ、整備用の格納庫は見える。それぞれの戦闘機を格納した掩体は森の中に散らばりカモフラージュされていてよくわからない。イライはいてもたってもいられなくなっていた。いっそ出撃命令が出てくれた方がいい。いつ、彼女がここを訪れるかもしれない。不安だった。

そうだ。不安だ。イライが感じているのは不安だった。それ以外の感情は、今はなかった。

イライはＰＸで購入したコーラをあおった。あまり冷えてはいなかった。ＰＸの冷蔵庫のせいなのか、宿舎について自分が思う以上の時間が流れていたからかはわからない。それでもコーラを空にした。チョコレートはデスクの上に載せて、口を付ける気にはならなかった。

こんなに動揺したことはなかった。まるで、ああ、彼女が生まれたときと同じくらいだ。

ハスミはもうあの新型機のパイロットの名を聞き出しているかもしれない。が、イライはパイロットの名をすでに知っていた。リーダーと思われるパイロットではない。随伴してきたあの女の名だ。

彼女はカンナリといった。カンナリ、ユウ。忘れることもできない名前だ。なぜなら、彼女はイライの遺伝子をおそらく半分、引き継いでいるからだ。彼女はイライの娘だった。最後に会ったのはいつだったろうか。思い出すことができるのは、ユウが中等科の制服を着ている姿までだった。彼女とともに暮らしたのは、それよりさらに以前、ユウが初等科に入学するかしないか、それくらいの歳までだった。イライは彼女とともに生涯を過ごす気はなかった。彼女はどうなのかは知らないし、訊いたこともなかった。そして、彼女の母親と最後に会ったのも、同じ頃だ。もう何年も昔の話だ。一昔以上前。ユウの母親はまだ存命中なのか。

やはり俺はここに逃げてきたのだ。けれど、彼女は追ってきたではないか。しかも、ノスリより遙かに速度の稼げる新型のジェット機で。

イライは戦慄する。

俺を撃墜する気か。

敵機ならわかる。敵機は自分を撃墜するために空にあって、もちろん自分は彼ら、彼女らを撃墜するために空に上がる。理屈などない。敵機は叩き墜とすか叩き墜とされるか、そのどちらかの理由で存在する。けれど、ユウは、友軍の戦闘機に乗って現れた。敵ではなく、味方機として。フレンドリーだ。イライが望んでも、彼女を、彼女のハチクマを撃墜することなどできない。

逆も同じじゃないか。イライは再び煙草に火をつける。

逆も同じだ。彼女もまた、イライを撃墜することなどできないはずだ。

イライは煙草を持つ自分の指がかすかに震えていることに気づく。

おそれているのか、俺は、彼女を。
断絶した血縁関係にあって、イライはそれを努めて忘れようと試みた。ユウがこの世に生まれたことは、この世に彼女を誕生させてしまったことは、不幸だった。いろいろな意味で不幸だった。イライにとっても、ユウにとっても、ユウの母親にとっても。この世界は生きるのにはつらすぎるのだ。生きている人間の数は少なければ少ないほどいい。なのに自分は、ユウという人間をこの世に誕生させてしまった。止めるべきだった。しかし、あのころの自分は若かった。ユウの母親にたいして生じた衝動や、口に出すことすらはばかられる、いわゆる愛情と呼ばれるいくつかの感情によって、自分は暴走し、その結果ユウが生まれてしまった。その責任の重さに自分は耐えられず、結果、前線基地ばかりを渡り歩く戦闘機乗りになった。ユウが生まれた頃、すでにイライはパイロットだったが、一人前ではなかった。前線基地への異動希望を、当時の上司たちはとまどいと喜びとがない交ぜになった表情を見せ、それでも希望は叶えられた。
イライは前線基地ばかりを渡り歩いた。結果的に、それがイライのパイロットとしての技量を磨くことになった。空に上がるたび、イライはユウの母親のことを忘れた。忘れていった。そして望んだ。自分と同じように、彼女もまた、イライを忘れてくれることを。
感情的には忘れてくれたかもしれない。しかし、忘れ得ぬ存在が確かにあった。それがユウだった。生まれ落ちてしまったユウは、育つ。母親譲りの邪気のない表情は、今でもイライの記憶の片隅にしっかりとピンで留められたようにして残っている。忘れることができなかった。努力しなければ、よみがえる。そして、今日。新型戦闘機から降り立ったユウは、最後に会ったときと同じような、そう、彼女の母親によく似た笑顔を見せていた。自分やハスミやチナミ、要するに「前世代組」と呼ばれるパイロットたちが真似しようとしても真似のできない表情を、ユウは持っていた。
記憶が確かならば、いまのユウは、イライが「愛情」というまが

まがしい感情に支配されていた頃の、ユウの母親と同じ歳のはずだ。似ていて当然だ。エプロンで新型機の開いたキャノピーから見せたユウの顔は、彼女の母親と生き写しだった。

イライは憂鬱になった。

基地に運び込まれた機材は多かった。たった二機で何をする気かは知らないが、彼女らはここに配属されたのかもしれない。幸い、この基地には空いている掩体も格納庫のスペースも、そしてパイロット用の宿舎もたっぷりとあるのだ。あのハチクマが一個飛行隊移動してきても、十分なほどに。

上層部はもしかするとそう考えているのかもしれない。

そんな考えを巡らせている内、空から爆音が響き渡り、窓辺から顔を突き出したイライの目には、大型の輸送機が編隊を組み、数機で滑走路に向かってアプローチしている姿が見えた。ハチクマは本格的にここへ展開する気だ。輸送機には六機のノスリが護衛についていた。この基地の所属機ではないだろう。今日イライの飛行隊から離陸したのは、チナミとセムラのエスコート組の二機だけだ。近々、大きな作戦でも始まるのかもしれない。大型の輸送機は、のっそりと高度を下げ始め、そして木立のあいだに沈んでいった。独特のエンジン音は、ターボプロップエンジンに違いない。もしかすると、随伴していたノスリも、あのハチクマが登場する寸前に噂に上ったターボプロップ改造型かもしれない。輸送機も随伴するノスリも、レシプロエンジンが奏でる排気音を立てていなかった。甲高い金属音、プロペラの羽ばたきがやたらと耳につく。

イライはひどい疎外感におそわれた。

居心地がいいはずだったこの基地が、とつぜんよそよそしく思えてきた。

今頃、三ヶ月前に失われた四機の補充機が来たというのか。しかも、新型のおまけ付きで。

イライはどうでもよくなってきた。

出撃命令がほしかった。

敵機がほしかった。
こちらが撃ち墜とす前に、敵機が自分を撃ち墜としてくれるかもしれない。こんな気分になったのは初めてだ。
屈辱だ。

8

あの新型を駆るリーダー機のパイロットはヨノイと名乗った。
結局呼集もかからぬまま日の暮れたその日、イライは夕食の席でヨノイと同席することになった。
大規模な基地であれば、イライたちパイロットとホガリたち整備員が同じテーブルを囲むこともないだろう。が、イライが住みかとする基地では、階級によって食堂を分離することが無駄なほどに人員が少ない。だから今日も、パイロットと整備員は同じテーブルを囲んだ。
夕食のトレイには、鶏肉を過程不明に調理したプレートと、山盛りの野菜、焼きしめたパンが並んだ。そしてテーブルには、知らない顔が何人も並んでいた。澄んだ海底のように青く沈んだ夜の風景が窓の外に広がっていた。イライは滑走路をわずかにのぞくことのできる、食堂の端の席に着き、知った顔と知らない顔がくっきりと分かれたテーブルを一度見渡して、腰を下ろした。ハスミの顔が食堂の対角線上に見えたが、彼はチナミとともにもうトレイの半分以上を平らげていた。昼間に漏らした言葉の通り、新型機の印象を聞いているのかもしれない。イライは新型にさしたる興味もなかった。新型とともにやってきたパイロットを除けば。そんな気分でいたとき、空席だった対面に、知らない顔がやってきたのだ。それがヨノイだった。ヨノイは黙ってイライの正面に座り、けれど表情は柔和だった。見たことあるな、イライは思った。キリウやレンダと同じ種類の表情だ。きっとこの男も純粋培養組だ。かけてもいい。……かける？　誰と。
「初めまして」
ヨノイはイライの目をまっすぐに見て言った。そして名乗った。
自分は名乗っておきながら、イライの名を訊ねようとはしなかった。
「ここの食事はうまそうだ。いや、前にいた基地はね、魚はうまか

ったんだけど、肉がね」
おしゃべりな男だ。第一印象はそれで決まった。
「あなたは、ずっとここに？」
ヨノイが訊く。訊かなくてもわかりそうなことだ。
「長そうに見えるかい」
「飛行時間は」
「前は、放浪の旅をしていてね。ギターが下手なんで、パイロットにされた」
言ってから、つまらない冗談だったとイライは後悔した。自分にはやはり、冗談も本音も似合わない。
「ずっとノスリに？」
おおかたのパイロットと同じく、ヨノイもまた仕事の話以外はできないのかもしれない。それでもいいと思った。自分も似たようなものだ。イライはよく焼けた鶏の肉をかじる。皮はパリパリだ。予想外にうまかった。
「ここしばらくは、？型以外乗ったことはない」
イライが答えると、返事だというように、ヨノイもまた鶏肉をかじった。そして、本当にうれしそうな顔をした。鶏肉がうまかったのか、イライの返事がうれしかったのか。イライには前者に思えた。
「僕は？型には乗ったことがない。けど、？型には四十時間ほど乗ったことがあるよ」
？型か。今日、新型と飛来したノスリのことだろう。
「ターボプロップ？」
ヨノイはうなずく。
「反応が鈍くてね。その前に乗った？型の方が僕は好きだった」
「よりどりみどりだな」
「そういう職業なんだ」
「そういう職業にしては、ずいぶん舌が回るんだな」
挑発的すぎたかもしれない。イライは思ったが、ヨノイは意に介さずといったところだ。すでに一個目の鶏肉を平らげ、二個目に入

る前にキャベツを噛み砕いていた。
「プロペラ並みには。ターボジェットほどじゃない」
冗談のつもりだったのだろうか。イライは可笑しくなった。ヨノイの冗談にではなく、そのぎこちない態度にだ。この男はいくつくらいだろう。イライの半分ということはないだろう。もう少し上……基地でいうなら、半分くらいの場所か。
「あまりフレアを掛けないんだな」
イライは話題を振ってみた。着陸のときの話をしてみる。
「速度はね、スポイラーで殺した方が飛びやすいんだ。エンジンの反応が鈍い分、変なピッチを取ると、ストールする」
「ストールしたことがあるのか」
「まさか。着陸中だったら、僕は今頃ここにはいない」
「俺はある」
「着陸中に？」
ヨノイは大きな目をしていた。よく澄んでいた。作り物のようだ。世代が違うのだ。イライは悟る。
「上空で。場所は機密だ」
「敵機は」
「いたら今頃ここにはいない」
「なるほど」
「あんたの飛行機は速いのか」
「速いって、最大速度の話をしているの？」
「別に着陸速度でも、離陸速度でもかまわないが」
「全部、速いね。ノスリとはずいぶん違う。僕が乗った？型よりもずっと」
「重そうだったな」
ハスミの感想を、代弁してみた。
「そう……」
ヨノイはフォークを放るようにプレートに置くと、右手をひらりとトレイの上に舞わせた。

「ロールレートは、ノスリの相手にならないよ。確かに重い」
そう言って、ヨノイは離陸させた右手を、そっとバンクさせた。左に。まるで今日の再現のように。
「もっとバンクしたらどうなる」
「速度を失う。旋回時ならね。そうだな、空回りするような感じだ。エンジンが」
「よくわからないな」
「格闘戦になったら、？型にだったら、簡単に墜とされてしまうよ。作りが違うから」
左旋回に入ったヨノイの右手は、唐突に失速し、再びフォークを握った。
「機銃は同じか」
「メルクア・ポラリスの二十ミリ。電気式だよ。二重装填の心配がない。……？型と同じだね。ベースは同じ。でも、バレルが長いんだ。撃ちやすいよ」
「どれくらい」
「そう……」
イライが訊くと、ヨノイはエンピツ持ちをしていたフォークを、フォアハンドにした。人差し指を軽く浮かせる。操縦桿のつもりらしい。
「気持ち、ほんの少し遠くても、当たる」
イライは答えるかわりに、二個目の鶏肉を口に入れた。
「でも、飛行機の速度が違うからね。たいして変わらないよ」
「そんなに違うか」
「違わなければ、新型じゃないでしょ」
「そうだな」
今日の夕食は、それ単体で見たならば、週に一度あるかないかの上出来だった。料理長の機嫌がよかったのだ。きっと。けれど、堪能できない。目の前の男のせいだ。いや、目の前の男が連れてきたもう一人のパイロットのせいだ。

「たった二機でどうするつもりなんだ」
訊いてみた。遠回しに、もう一人のパイロットのことを匂わせたつもりだった。
「あまり大きな声では言えないんだけど」
「なんだ」
ヨノイは軽く身を乗り出し、そしてうれしそうに、散歩前の子犬のような顔をして言った。
「この基地、掩体にはかなり空きがあるでしょ」
「空から見たか」
「ここに来る前に聞かされた」
「ではその通りだ」
「全部とは言わないけれど、ほとんどを埋めるつもりなんだ」
ヨノイは二個目の鶏肉にかじりついた。
「埋葬するのか。旧型ごと」
自分には向いていないと思っていながら、イライはまたやってしまった。冗談と本音の半々をこぼしてみた。すると、ヨノイには受けたらしい。一瞬目を丸くした後、けらけらと笑った。子供のようだった。こいつ、いくつなんだ。
「要するに、新型に置き換えるわけだな」
ヨノイはうなずいた。
「話してもいいことなのか」
ヨノイはうなずいた。
「俺が敵に通じてたらどうするんだ」
言うと、ヨノイはグラスからオレンジジュースを一口飲んで、そして笑った。
「もし、あなたが敵に通じてたら。そうだね、僕が明日あなたと一緒に飛んで、帰ってくるのは僕だけさ」
冗談半分、本音半分。きっとそんなところだろう。イライのグラスにはミルクだった。残りを全部飲み干した。悪い食事ではなかった。同席した人間を除けば。

「じゃあ、明日一緒に飛んでみよう」
イライはポケットから煙草を取り出した。喫っていいか、とは訊かなかった。
「飛行割りに、俺の名前があった。俺は飛ぶ。あんたは、ヨノイさんか。あんたは飛ばないのか。『旧型』以外の名前はなかったが」
イライは「旧型」のところに力を込めてみた。
「さっきの話とは別にして、僕はあなたと飛んでみたい」
煙草に火をつけた。ヨノイは表情を変えなかった。こいつは煙草も喫わないんだろうな。イライは思った。
「一機で飛ぶわけじゃないだろう」
イライはまた食堂を見渡した。ヨノイのウィングマンの姿は、見えなかった。

9

「もう一人に、よろしく言ってくれ。明日を楽しみにしてる」
低く言った。
ヨノイはまだうれしそうな顔をしていて、鶏肉と格闘していた。
もう少し料理の話をすればよかった。煙草を喫いながらイライは思ったが、もう会話は終わらせたつもりだった。もう話すことはない。今日はここまでだ。俺も、仕事の話以外は得意じゃないからな。もう一人のパイロットのことを訊けばよかったか？　そんなことは、席を立ってから気づいた。
ハスミの笑い声が聞こえた。そのとき気づいた。食堂はいつもよりも談笑する声が少なかった。
みんな、戸惑っているのかもしれない。
自分の場所に、別な登場人物が現れたことに。

晴れた。
プリブリーフィングで、気象隊のユヒが無表情に、前線が去ったと話した。夕食の後しばらく、激しい雨が基地を襲った。風はなかったが、強い雨だった。大粒で、宿舎の屋根がにぎやかだった。タグサリが帰ってこなかった日に聞いたあの曲が、また宿舎の廊下に流れていた。雨音とは周波数が違うのだろう。イライの耳にもよく届いた。誰の部屋からこぼれて、誰が聞いているのか、昨夜もわからなかった。
そして、晴れた。
飛行服を着ると落ち着いた。飛行割りには、ノスリが四機、自分、ユサ、アイズ、ハスミの名があった。どういう割り振りなのかよくわからなかった。それはいつものことだ。ハスミと飛ぶことが多い気がするのは、タグサリが帰ってこなかったからだ。タグサリが墜ちる前までは、ハスミと飛ぶことは三回に一度ほどだった。ほぼ毎

回、タグサリと飛んでいた。もしかすると、キリウは俺たち前世代をまとめて始末したいのかもしれないな。朝から二本目になる煙草を待機所で喫ってから、掩体まで歩いた。指示された離陸時間まではもう少し時間がある。ゆっくり掩体まで歩くと、ヌノベが待っていた。ホガリの同期と聞いている。ホガリよりもさらに背が低く、分厚いメガネをかけていた。メガネがなければ、パイロット向きの身体だろう。ヌノベの身体は、メガネの印象よりずっと引き締まっていた。前職は整備員ではないのかもしれない。トルクレンチのかわりに拳銃を、ジャッキのかわりに重機関銃を担がせれば似合うに違いない。本人に言ったことはないが、それがイライの感想だった。

「おはようございます」

ヌノベは無愛想だった。パイロットに必要以上気を使わない。逆にありがたい。べったりされるよりはずっと。ホガリよりずっと無愛想だ。行き過ぎる嫌いはあるが、イライはホガリに対する信頼と同じく、ヌノベを嫌いではなかった。タグサリがどうだったかは知らないが。

「ホガリは」

戦闘機には機付きの整備員が割り振られている。イライの機体はホガリが機付長で、ヌノベはその補佐扱いだった。基地ではパイロットの数も少なかったが、整備員の数はまだ少ない。異常なことだと何度も思ったが、質が量を凌駕しているのだろう、問題が起きたことはなかった。そう、機体が原因でパイロットが未帰還になったことはほとんどない。だいたいが敵機のせいか、パイロットがヘタクソだったか、どちらかだ。整備員は優秀だ。

「ハチクマについてます」

「配置換えか」

「研修だって言ってましたよ」

ヌノベはそう言って暖機運転を始めた。コンタクト。そうか、研修か。ヨノイの話は本当なんだな。新型がまだ来るのか。けれど、俺が乗り換えるわけではないだろう。俺はこいつ以外に乗せられる

ことはないだろう。今後、きっと。
噂ばかりだった？型と、華やかに登場した新型に、かつての最新鋭機がかすんで見える。ＧＣ－８－？型、イライたちのノスリが。しかし、レシプロエンジンの戦闘機としては、いまだに最新鋭のはずだ。？型がターボプロップを積んでしまったからだ。いいエンジンだ。例えるなら、絹のような感触だ。ホガリとヌノベが調律したこのエンジンは、セッティングが難しいとされる排気タービン機にありがちな気むずかしさがさして感じられなかった。ずっと以前に乗っていた？型のスーパーチャージャーより、イライは好きだった。何より高く飛べる。
エンジンに火が入ると、もうハンドサイン以外、ヌノベと会話などできない。コクピットに潜り込み、プリフライトチェックを黙々とこなす。気温も上々、暖かい。空には雲がない。澄んでいる。風の様子は雲がないのでよくは見えないが、積乱雲が太鼓を鳴らして走ってくるよりはずっといい。もっとも、空に上がってから身を隠すための遮蔽物もまた存在しないということだが。
ヌノベがハンドサインをよこす。イライが返す。チョーク、はずせ。機体は掩体をゆっくりと出る。誘導路を歩き出す。そうだ、まだ走らない。このままタキシングすれば、指定時間にほぼぴったりには滑走路に出る。キャノピーを閉じた。
誘導路の両脇に茂る木々にはもう、葉が残っていなかった。いつの間に散ったんだ。まもなく雪が枝を飾る。本格的な冬になれば、誘導路も狭くなる。除雪隊が活躍するときは、パイロットも暇になることがある。空模様と雪が離陸を許してくれない日も出てくる。そうすれば生き延びるチャンスも増えると喜ぶパイロットもいた。飛ばない、ということは、死ぬ確率がそれだけ劇的に下がる。歓迎すべきことか？　死ぬよりはいいだろう。交通事故や病気や、あるいは階段から転げ落ちて死ぬよりは、ここで、コクピットで死にたい。死ぬのなら。イライは誘導路を進む。巧みに配置された掩体が木々の間に見える。大半は空き家だ。これもある意味欺瞞か。爆撃

機や偵察機が上空を飛んでも、どの掩体に戦闘機が入っているのか、わからないだろう。誘導路を子細に観察すればわかるかもしれないが、一万フィートからそれを見分けることができるだろうか。雨あられと爆弾を降らせれば関係ないかもしれないが、こんな北方まで敵の爆撃機の大編隊が来るはずがないし、こんな僻地の前線基地が絨毯爆撃を受けるようになったらもう負けだ。爆撃で死にたくはない。爆撃で殺された人間は惨めだ。撃墜されるより屈辱だ。飛行機に殺されるときは、空にいるときだけだ。イライはそう決めている。

誘導路がゆるやかにカーブする。左へゆるやかなR。見慣れた風景だ。まもなく滑走路に出る。羽ばたき音が聞こえる。別のノスリだ。誰だろう。カーブを曲がると、特徴ある六翅プロペラが目に入る。真後ろからだったので、機番もマーキングもわからない。だから誰かはわからない。ハスミではないだろう。やや機体がよたついていた。アイズか。イライはゴーグルをおろす。マスクを確かめる。酸素ボトルは三本。よほど遠くまで飛ばされるのか。今日も増槽を二本、主翼に吊っていた。機体内タンクも満タン。今日も重い。ハチクマが上がってくるなら、不利だ。ただでさえ速度で負けているのに、機動性まで落されたら、墜とされるしかない。ましてタグサリを墜としたあいつがまた現れたら。増槽二本ではどこまで飛ばされるかわからない。指示では中立地域へ今日は飛行しないことになっている。レーダーサイトの向こう、海峡を目指して飛ぶ。攻撃目標があるわけでもなく、電探情報で敵機が現れたわけでもない。ほぼ訓練だった。模擬戦闘という言葉はなかったが、プリブリーフィングでのキリウは、言外にそれを匂わせた。

（研修だって言ってましたよ）

俺も研修か。いや、研修の相手か。いまさらノスリで研修はないだろう。

突然視界が開ける。滑走路だ。すでにノスリが二機、位置に着いていた。機番が読めた。やはり前にいるのはアイズで、自分は集合の最後だったようだ。ハスミの隣に並ぶ。前にユサとアイズ。ハス

ミの機体を向くと、彼もこちらを向いていた。ゴーグルにマスクで、表情は全くわからない。だからハスミは頭を二度振って見せた。意味があるサインではない。あいさつだ。おはよう。イライは操縦桿から右手を離して、軽く敬礼してみせた。おはよう。ハスミも右手で軽く敬礼を返し、そのまま人差し指を九時方向の空に向けた。イライはハスミの指した空を見る。爆音。

ハチクマだ。もう離陸していた。滑走路上をローパスしていく。速い。主翼端からヴェイパートレイルを引いている。それが合図だったかのように、ユサとアイズが滑走を開始した。プロペラ後流がキャノピーにぶち当たる。二機のノスリがまず離陸。続いて自分とハスミだ。スロットル全開、プロペラピッチ最大、エンジンは一瞬で吹け上がる。ターボジェットには真似ができないに違いない。機体は増槽二本分だけ加速をスポイルされているが、順調に速度は上がる。速度が増していく。操縦桿が粘っこくなる。翼が空気をつかみ始めるときの感覚だ。ラダーペダルも粘っこくなる。ハスミとそろってのフォーメーション・テイクオフ。ずっと先に二機のノスリ、さらに先に二機のハチクマが見える。イライもハスミも速度を稼ぐ。真ん丸い沼を一瞬で飛び越える。鏡のように空を映して青かった。波もなかった。だから風もなかった。いや、風がないから波がないんだ。世の中には順序がある。きっと撃墜されるのにも順序がある。

イライは思う。

ユウ。俺を墜とす気か。

ヨノイは昨夜のテーブルでイライを墜とすと笑っていたが、その役目は、ユウ、お前が担っているのではないのか。違うのか。

コヤチダ本線の鉄橋を瞬きする間もなく通過する。市街地が見える前にゆっくりと左へ旋回した。視界の右手にのっぺりとした平面が見えた。ソラノ川だ。ニジマスが釣れるらしいとは、誰から聞いたのだろう。今年は、よく釣れる。いつ聞いたのだろう。三ヶ月前か。だったら、六機上がって四機墜とされた、その四機のパイロットの誰かだったかもしれない。だったら覚えていなくて当然だ。彼

らの記憶はすでにない。きっとタグサリもまた、忘れられていく。忘れようとして忘れていく。人はそうして年を重ねていく。生きていくには、すべてを覚えていく必要はない。生きていくには覚えることが多すぎる。必要最小限のことだけを覚えていればいい。人も戦闘機も身軽な方がいい。けれど、人は戦闘機のように、余分なタンクをすっきり切り離したり、残存燃料を投棄したりはできない。人が余分なものを捨てるには、手続きが煩雑なのだ。忘れようと努力するのは結構だが、努力しすぎるとかえって忘れられなくなる。そういうときは、何も考えなければいい。それが一番難しいのだけれど。

ハスミはがっちりと編隊を組んでくる。今日の隊形は、ユサがフライトリーダー、アイズがそのウィングマン、こちら側はハスミがエレメントリーダー、自分がウィングマンだ。やや先行するハスミの翼端で、空気が歪んで見えた。速度は十分だ。ハチクマはどこだ。新型は。その性能を、確かめてやる。タグサリを墜としたあいつらよりヘタクソだったら、そうだ、俺が二機ともまとめて撃墜してやるからな。

先行して離陸していた二機のハチクマに四機のノスリが追いついたとき、眼下はうっそうとした森林地帯だった。といっても、高度一万フィートを超えたいま、果てしなく続く森林は、すっかりくたびれた玄関マットのように見えた。さもなければ、毛足の短い絨毯だ。三時下方に鉄塔が並んでいる。海峡沿岸の発電所から電力を供給する超高圧線だ。イライは時々思う。中立地帯にもああした送電塔が並んでいる。低空を飛ぶとき、あの鉄塔と送電線は何よりも脅威だ。低空で進入する戦闘機や攻撃機を防ぐために敷設したのかと思うほど、送電線はやっかいな存在だった。発電所や変電所の近隣は飛びたくない。たとえば夜間、発電所への爆撃を命令されたらと思うとぞっとする。航空標識灯を消灯した鉄塔は闇に紛れ、送電線は獲物を待ちかまえるクモの巣のようにパイロットたちを罠にかけるだろう。意図せずとも、あれは脅威だ。

四機のノスリは二機ずつ別れ、わずかな距離と高度を隔てて飛ぶ。先行するのは離陸したときと変わらずユサ、続いてアイズ、ハスミ、そしてイライ。二機のハチクマは、菱形に近い隊形で飛行するノスリの右側に占位していた。編隊間を詰めてくる。戦闘隊形ではなかった。ハチクマを間近で見るのは、これが初めてだった。長い機首、ノスリよりも太い胴体、後退翼に背の高い垂直尾翼、よく見ると水平尾翼は全体が作動するタイプだった。そして、ハチクマも機体中央に増槽タンクを下げていた。主翼に搭載された二基のターボジェット・エンジンの燃費はどうなのだろう。ノスリにとってもまだこの高度はやや低め。ではハチクマには低すぎるほどだろう。キャノピーが日を浴びていた。中のパイロットはよく見えない。先行しているのが昨夜のヨノイだろう。大尉だとは後で知った。食堂に現れた彼は、制服を着ていなかったからだ。飛行服にも階級を示す徽章はなかった。が、新鋭機を任されたパイロットの階級が低いはずはないだろうとイライは思っていた。そして彼が純粋培養組ならば、あの背格好でイライより階級が下とは思えなかった。食堂でのヨノイは頼りなげだった。まるで子供のようだった。純粋培養組によく見られる性質で、それは特筆すべき事柄ではなかった。上手に飛んでくれればそれでいいのだ。実際、並んで飛ぶ彼のハチクマは安定していた。エンジンの排気がゆらゆらと陽炎のようで、それにしてもやはり機体は大きい。その彼のハチクマの後ろが、件のパイロットの機体だ。

見間違いかもしれない。他人の空似という言葉もある。イライは昨日、二機のハチクマが飛来したときに自分がみせてしまった動揺を、いまでは後悔していた。本当にユウか。そんな気持ちが強く湧き出てきたからだ。エプロンでキャノピーを開き、そこで遠く見えたパイロットの顔が見えただけだ。それに、飛来してきたパイロットたちは自己紹介を積極的にしなかったし、キリウやレンダも彼らを紹介しようとはしなかった。

ユウか。

無線のスイッチは切ったままだった。いつもの飛行なら、無線封鎖の指示がない場合、パイロットたちは会話する。機体の様子、空気の様子、目標の様子、その他様々。が、今日は離陸する前から誰も必要以上の言葉を発しなかった。なぜだろう。だから自分も無線のスイッチに指はいつでも届く状態にしていたが、スイッチを入れることはなかった。

ユウか。

スイッチを入れ、呼びかければいい。ともに飛ぶパイロットの名を呼ぶことは、規律違反でも何でもない。けれど、できなかった。ヨノイの機体を子細に観察することはできても、後続する「彼女」の機体を観察することができなかった。

後ろめたさがあった。

かすかな屈辱もなぜか感じていた。

なぜ、そんな疑問もあった。

逡巡する自分が信じられなかった。地上ではいくら思い悩んでもよかった。しかし、離陸してからの逡巡は、命に関わる。戦闘機もパイロットも、可能な限り身軽な方がいい。が、今日のイライは、気が重かった。ずっと旋回しているような気がする。そう、旋回時の加速度がずっと全身にのしかかっているような気がするのだ。空間識失調に陥りかねないな、そんなことも思った。旋回しているはずもないのに、旋回していると思いこむ。想像力は凶悪だ。身体が反応してしまう。

「ヒムロ・イチから各機。要石を通過」

ユサの声にはっとする。

「ヒムロ・ニ、了解」

アイズの声だ。

「サン」

ハスミ。

「……ヨン」

ヒムロは飛行隊に割り振られたコールサイン。イライは見たこと

がないが、ヒノキの仲間の常緑樹だとハスミが以前話してくれた。首都の近くの公園に行けば生えているよ、と。

いましがたの交信は、編隊が海峡の手前の山岳地帯に設置されているレーダーサイトを通過したことを告げるものだ。

「上がるぞ」

ユサの声。山地を越えるため、高度をさらに上げるというわけだ。わけてもこのあたりは気流が荒い。海からの空気と、森林地帯から吹きつける風が山地で複雑に絡み合い、山肌に沿って飛ぶときは、飛行機酔いをしそうになるほどだ。イライは操縦桿をわずかに引き、機首を上げた。対気速度計の針はそのままで、昇降計の針が動き出す。まだエンジンには十分すぎるほどの余裕がある。そして、基地を離陸したときと変わらず、雲は全くなかった。何となく不安になる。逃げ場がない。適度に雲があった方が安心できる。いやな習性だった。敵に襲われたときのことを常に考える癖がもうすっかり染みついていた。空気はよく澄んでいる。ようするに「相手」からこちら側もよく見えるということ。逆にこちらも「相手」をかなり遠くから見つけることができる気象条件といえるが、澄みすぎる空気は、イライはどちらかといえばあまり好きではない。というより、安心できない。

「二万まで上がる。遅れるな」

「了解」

横を見ると、二機のハチクマはぴったりと離れない。機体もわずかなピッチングをしているだけで、それは気流を感じている心地よい揺らぎといった程度に違いない。

眼下に山岳地帯が広がり出す。白い。雪だ。砂糖を散らした菓子のようだ。やはりもう季節は巡っていた。基地から巡航速度でわずか三十分。ここはもう冬の匂いがする。

上昇が続く。この程度の上昇角度なら加速することもまだできる。しかし各機は速度を維持したまま編隊を維持する。燃費を考えていた。燃料系はまだ三分の一ほどを消費するかしないかという程度だ。

増槽から燃料を消費しているから、機体内燃料はたっぷりと残っている。フィードタンクをうまく使えば、そして増槽を捨てれば、ノスリは風車のようにロールすることができる。そうなれば、もはやノスリはハチクマの敵ではない。もっとも、あちらがスロットルを全開にし、最大速度へ向けて加速を始めたら、こちらは追跡をあきらめて逃げるしかないだろう。もともと性格の違う戦闘機を戦わせてどうしようというのか。今日の飛行に、イライは苛立ちをも感じていた。本音がこみ上げてくる。黙って飲み込んだ。

山地のサミットは越えた。高度計の針がぴたり二万フィートを指す頃、キャノピーの真正面に水平線が見えてくる。海峡だ。浴すんだ空気が、くっきりとした水平線を見せていた。船影も、今のところは見えなかった。速度、三〇〇ノット。ブレードの音が心地よい。そろそろか。そんなことを思って横を向くと、二機のハチクマがゆっくりとイライたちの編隊から離れ始めていた。

いよいよか。

イライは計器類をチェック、スロットルを握る左手と、操縦桿を握る右手、そしてラダーペダルに載せた両足が、しっかりと機体とリンクしているかどうかを確かめる。

大丈夫だ。

イライは深呼吸をする。

そして思う。

何が、大丈夫なんだ？

ノスリはハチクマの上昇力にまったくついて行くことができなかった。

海岸線を越え、ベタ凪の海峡の上空はやはり雲が全くなかった。青い色ガラスのような空は遠近感を狂わせる。散開した二機のハチクマをユサとアイズの二機が追いすがったが、瞬発力で勝る自慢のターボエンジンも、高度二万フィートからの上昇ではハチクマの相手にならないようだ。イライはコクピットで対気速度計を確認する。

四〇〇ノット近い。全速力だ。十分に速度を稼いで操縦桿を引く。ハスミとイライの二機もハチクマを追う。ただし、ユサとアイズの二機とは方向を変える。変針せずに上昇に転じたハチクマを、ノスリの四機は二つのエレメントに分かれ、挟撃する作戦に出る。

加速度計が三から四の間で揺れ動く。これ以上のGをかけると速度を失う。イライは操縦桿をやや戻す。身体がやや浮かぶような錯覚に陥る。長く水中で遊び、陸に上がったときのような、自分の身体が自分のものではないような感覚。首を巡らせて澄んだ空にハチクマを探す。

いた。

一時の方角に、二機の機影がはっきりと見える。距離は、四マイル、あるだろうか。まだ離される。水平飛行に戻したノスリのエンジンは全開、プロペラピッチも最大角度、それでもハチクマには全く追いつけなかった。なんだあれは。タグサリが帰らなくなったあの日の光景がよみがえる。俺を置いていくのか。高度計は二五〇〇〇フィートを指している。相手との高度差はもう三〇〇〇フィート以上あるかもしれない。ユサとアイズはまだ上昇を続けていた。イライは増槽を切り離したい衝動を何とかこらえていた。ハチクマもまだ増槽を切り離してはいない。

すでにかなり沖合まで飛行していた。

「イライ、雲を曳いてる」

一瞬計器類に目を落したとき、ハスミの声が耳を打った。顔を上げる。上空に二筋のコントレイル。ハチクマが曳いているのだ。美しい。瞬間でも思った自分を悔いる。違う、あれを墜とすのだ。高度計が三万フィートを越えた。ヒーターが備えられているとはいえ、コクピットはいよいよ真冬の夜のような気温になっているはずだ。が、イライは寒さを感じない。感じるのは、……屈辱ではなかった。寂寥だった。

「イライ、見えてるか」

「見えてる」

応えながらハスミ機を向く。キャノピーの中でハスミがイライを一瞥した。そして、ハスミ機の向こう、ユサとアイズの二機が緩やかなバンクをとって右に旋回していた。先行しているのはユサだ。アイズはややローリングが大きい。速度を奪われるぞ、そんなことを思っているうち、二機のハチクマが視界から消えた。

「ヒムロ・イチ。サン、ヨン、聞こえるか」

ユサの息が荒い。

「ヒムロ・サン。イチ、何だ」

「ハリエンジュが急降下した。方位二七〇」

ハリエンジュは二機のハチクマのコールサイン。コントレイルを曳くのを嫌ったか、ハチクマの編隊は速度と高度を利用して、一気に降下を始めていた。似ている。タグサリがやられたあのときと。

「ヒムロ・イチ。ハスミ、イライ、カバー。アイズ、来い」

ユサとアイズは緩やかな右旋回から左へ急反転、そしてそのまま機首を下げ、海面へ向かってパワーダイブを開始した。ほとんど最大速度に近い状態だ。増槽を下げているとはいえ、ノスリのロールは鋭い。しかし、この速度で急ロールを打つには、腕力と度胸がいる。ついでに体力も。だからイライは、身体がわずかに躊躇したのをさらに悔いた。わずかな時間の躊躇のあとで、イライとハスミの二機は背面に入れる。操縦桿が重い。それでも引く。頭上に海面、足下に太陽、襲いかかってくるGにうめきながら、頭上から重石を載せられたような首に力を込め、先行する二機のノスリと、そのさらに先のハチクマを目で追う。キャノピーを猛烈な風切り音が包んでいた。五〇〇ノット近い。海面が日を受けててらてらと光っていた。そこにハチクマのシルエットが浮かぶ。二機はまだしっかりと編隊を組んでいる。背後につこうとユサとアイズが追いすがる。その様子がよく見えた。見えているうちはまだ負けではない。イライのノスリは機首をほぼ垂直に、海面へ向けて落ち込んでいた。引き起こせ。操縦桿が石になったように重い。左前方のハスミ機の翼端から真っ白いヴェイパーが発生している。ハスミはイライよりいく

らか若い分、思い切りもいいのかもしれない。旋回半径が小さかった。高度が速度へぐんぐん変換されているいま、急激な旋回でエネルギーを失う心配はあまりない。三万フィートから一気に一五〇〇〇まで落下した四機と、悠々と先行する二機の新型は、再び水平飛行に移りつつあった。四機のノスリはわずかだが高度の分がある。

「ユサ、行け」

ハスミの声。それにユサが無線機のオン・オフ二回で応えた。ユサの位置は、スナップ・ショットでハチクマのウィングマンを墜とせる。ジャイロ式照準機の中に、あの特徴ある機体の一部でも入っているだろうか。イライはゴーグルの内側がわずかにくもりかけているのに気づく。汗だ。

ユサ機がハチクマに接近する。ユサはやや右にバンクを取りながら襲いかかる。相手を急旋回に誘おうとしている。ハチクマが不得手としているらしい、旋回戦に。もらった、きっとユサは思ったに違いない。が、次の瞬間、ハチクマのウィングマンは左へ急激に機体を滑らせ、主翼を海面にたいして垂直に立てたあと、上昇を開始した。息を飲むほどに急激な動きだった。ヨノイの言葉が耳に戻る。ロールが不得手だって？　かもしれない。が、旋回開始と同時に上昇を開始するとは、自殺行為だ。四〇〇ノットを超えるかという速度は、高度を得るのに引き替えて一気に失われるだろう。それはハチクマだろうがノスリだろうが同じだ。

「ヒムロ・ニ、アイズ、アイズ、追え。ハリエンジュ2が逃げた」

ユサの甲高い声。アイズが応え、鋭く機体を左へロールさせ、ハチクマを追う。二機のハチクマは二手に分かれた。

「ヒムロ・イチからサン、ヨン。サンはハリエンジュ2、ヨンはハリエンジュ1を追え」

「了解」

ハスミは応えるが早く、急上昇してくるハチクマを追い上げる。それを視界の端に見ながら、イライは右へ旋回、キャノピーの中央にユサ機を捉え、その先に見えるハチクマのリーダー機、ヨノイを

追った。ヨノイ機はまだまっすぐに飛んでいた。それぞれに二対一だ。
「イライ、奴に速度を稼がせるな」
「わかってる」
ユサの声がますます甲高い。
イライは粘っこい操縦桿をゆっくりと手前に引きつける。人差し指は機銃の引き金から浮かせたまま。実弾は装備しているが、よもや味方機を撃墜するわけにはいかない。安全装置は解除されていない。それが、やや物足りない。曳光弾を撃ち込むのとそうでないのでは、相手に与えるプレッシャーが違う。
「イライ」
「右だ、右」
ヨノイ機が二機のノスリを引き離しにかかった。水平飛行のまま、旋回も降下もせず、増速している。性能の差を見せつける気だ。この状態でこちらが旋回をすれば、その分距離と速度を失ってしまう。イライはそっと、ヨノイに気づかれるか気づかれないような動作で、少しずつ高度を上げる。速度を失わない程度の上昇率で、上がる。ユサは高度と方位を維持したままでヨノイ機を追う。じりじりと離される。
「……勝負にならないじゃないか」
ユサがつぶやくのが聞こえた。無線のスイッチをオンにしたままだ。わざとか。どことなく昨夜のヨノイの口調に似ていた。お前、ハチクマに乗りたいんだな。イライは苦笑しながら、まだゆっくりと上昇を続ける。ヨノイは気づいているか。追いかけ続けているユサ機に気を取られ続けていてくれれば、多少は目がある。視線を走らせてハスミとアイズを探したが、見える範囲にはいなかった。
ユサ機がイライの視界から消える。イライ機の機首の陰に入った。ユサ機の高度と、その先三マイルほどで増速しているヨノイ機が同レベルにいるなら、自分と彼らの高度差は五〇〇フィートほどか。もう少し欲しい。まだ欲しい。上昇を続ける。ヨノイはまだ加速し

ている。ユサがじりじりとさらに離される。上昇している分、イライはさらに離される。なんとなく間延びした空中戦だ。緊張感がない。そう思った。そう思えるくらいの時間をかけて上昇した高度を、イライは一気に捨てた。順面のまま機首を下げる。胃の内側がせり上がるようなマイナスGに身体が浮かぶ。操縦桿をそっと、しかし大きく突く。行け、ノスリ。スロットルを最大に。エンジンは素早く加速する。

「ユサ」

イライは呼びかける。瞬間、ユサ機が急横転、翼端からヴェイパーを引きながら、左へ。ヨノイは驚いたのか、反対側の右へ機体を振った。かかった。イライはまっすぐ、マイナスGを感じたまま、ハチクマにつっこむ。いま、ノスリの主翼の抵抗はゼロに近い。主翼上面と下面を流れる空気の速度が一致しているとき、機体はもっとも負荷をなくしている。気づいても無駄だ、チェック・メイトだ。イライは胸の内側をゾクゾクとさせるマイナスGに耐えた。リフトで自由落下しているようなこの感覚は、いつまでたっても慣れることはない。嫌いだった。が、これで行けるはずだ。ヨノイさん、ご愁傷様。照準機のど真ん中にヨノイ機の機体が入った。これで引き金を引けば、二〇ミリが彼の機体をバラバラにしてくれる。ユサもまた左にバンクしていた機体を素早く右へロールさせ、ヨノイを追った。

「イライ」

ユサの声。

ヨノイさん、さっきの右旋回が失敗だったね。イライはマスクの中で大きく息を吸う。決まりだ。

「ハリエンジュ2からヒムロ・ヨン。撃墜した」

リコーダーのような声が、頭の中に直接響いたような気がした。イライは大声を上げていた。

「なんだ？」

「ハリエンジュ2から、ヒムロ・ヨン。……イライ大尉、あなたを

撃墜した。攻撃を中止せよ」
　振り返る。イライ機のすぐ後ろに、もう一機のハチクマがいた。なんてこった！
「ハスミ？」
「ハスミ中尉、アイズ少尉はサンルまで後退した」
　リコーダーがまた聞こえた。サンルは、「撃墜」された場合に待機する目標となっている港街の名だ。
「バカな、二機ともやられたのか」
　ユサが叫んだ。
「三機です。ユサ大尉」
　イライはプロペラピッチを巡航位置まで戻した。スロットルも同様に。するするとハリエンジュ２、二機目のハチクマが並んでくる。
「三機目のイライ大尉も先ほど撃墜しました。イライ大尉、サンルまで後退してください」
　イライはボイスで返す代わりに、機体を背面に入れる。天地が逆転する。空だか海だかよくわからない、今日の空気の色。前方のユサ機、ヨノイ機、水平線、そして隣に並んだハチクマがくるりと回る。背面から引き起こし、スプリットＳ機動。太陽が背中にまわった。
「カンナリ、お疲れ」
　ヨノイの声。ああ、確かにやはりユサの口調に似ている。純粋培養組に共通する、無垢な響きだ。
「ヨノイ大尉、作戦終了です」
「燃料残量は」
「三〇〇ノットで四十分飛べます」
「十分だ。ジョイン・アップする」
「ハリエンジュ２、了解」
　イライも燃料計を確認する。増槽は空っぽだ。ただの抵抗でしかない。が、実戦ではない今日は投棄できない。機内燃料はまだ十分。ただし、こちらの巡航速度は二五〇ノットだ。それで五十分程度飛

べる。
「ヒムロ・イチ。ヨン、聞こえるか」
「聞こえてる」
「帰投する。編隊を組み直す。ニ、サンと合流」
「ヨン、了解」
最大速力までスロットルを叩き込んでやりたかった。気づかなかった。背後ぴったりにハチクマが食らいついてきていることに。見晴らしのいい水滴型キャノピーのノスリは、死角らしい死角がない。垂直尾翼、主翼、そして胴体は死角だが、上半身が機体から突き出るような形を取るコクピットを用意されていながら、背後を取られた。どこから来たんだ。下か。ならユサが気づいているはずだ。では、上から来たというのか。
イライはわからなかった。
正面に、二機の機影。ハスミとアイズだろう。無線で呼びかけては来なかった。代わりにトランスポンダの質問電波が来た。イライは黙ってそれに応えてやった。
屈辱だ、と思った。が、それ以上にわき起こってくる感情があった。
それは、やはり、寂寥、寂しさだった。

10

管制塔との通信、必要最小限度の会話、それ以外、帰路には何もなかった。二機のハチクマが先行して着陸、続いて二機ずつ、ユサ組、ハスミ組と着陸した。昼前の基地はまだ朝の余韻を残していて、滑走路は日をてらてらと浴びて暖かく、キャノピーを開けても冷気は漂っていなかった。小春日和だ。

機体を降りても、誰も口を利かなかった。格納庫脇でユサが何かを蹴ったようだったが、イライは自機を見上げていたので、音しか聞こえなかった。ヌノベが寄ってきた。

「首尾は」

「生きてたよ」

短く答え、イライは牽引車に引かれていく自分の戦闘機をエプロンで見送った。

「ユサさん、荒れてるみたいだ」

「全滅したからだよ」

「全滅？」

「あとは、あちらさんに聞いてくれ」

イライは少し離れて駐機した二機のハチクマを指し、ヌノベがそちらを向いて振り返らぬうちにエプロンを立ち去った。

待機所に入ると、全員の目がこちらを向く。ユサの姿はもうなかった。純粋培養の彼があれほど感情を露呈するのも珍しい。初めてイライはユサに好感を持った。撃ち墜とされて平然としていられるパイロットなどいるはずがない。それが模擬戦でならなおさらだ。なぜなら、殺されていながら生きているからだ。死人として生きるのだ。まして今日は四対二だった。？型のノスリが、？型の配備のおかげで名ばかりの「最新鋭機」とはいえ、前線基地で敵と対峙してきた自分たちが、たった二機の新型に撃墜された。これで屈辱を感じなければ、嘘だ。

イライはいつもの窓際の席に座り、煙草を一本だけ喫った。わずかな休憩ならば許されるはずだ。このあと、自分たちを待っているのは、さらなる恥の上塗りだ。デブリーフィングの時間は知らされていた。
「イライ」
声をかけてきたのはウエズだった。一緒に飛んだことはほとんどないパイロットで、以前は偵察機に乗っていたこともあるというおかしな経歴の男だった。
「全滅したそうじゃないか」
イライは無視した。
「気の毒に」
煙草はまずかった。うまいはずがない。
「女に墜とされた感想はどうだ」
「ウエズ、その辺にしておけ」
鋭い声が飛ぶ。イライは声の方角を向かなかった。声を荒げたのはチナミだった。
「お前も飛んでみればよかったんだ」
チナミはマグカップを片手にしていた。湯気を立てるマグカップの中身は、きっとミルクだ。チナミは待機所でコーヒーを飲まず、いつもホットミルクを好んでいた。
「きのうハスミには話したが」
チナミが歩み寄る。
「あのスピードにはついて行けない。ノスリでは」
「イライ、ついて行けなかったのか」
「だから墜とされたんだ」
イライは灰を叩き落とし、答えた。
「高度は」
チナミが訊く。
「二万と少し。いや、もう少し低かったか」
「どうやってやられた」

「これからデブリーフィングだ」
「教えてくれてもよさそうなものだ」
ウエズが割って入る。胸ポケットから煙草を抜いて、火をつけながら。
「教えてどうする」
イライ。
「知りたいんだ。悪いかな」
「ハチクマは味方機だ。知ってどうになる」
「俺も知りたいが」
チナミはマグカップを両手で包み込むように持つ。暖かそうだ。今日は空が澄んでいる分、空気が冷たい気がする。
「一緒に飛んだときはどうだったんだ。きのう」
イライはチナミを向く。
「格闘戦になれば負けないような気がした。だが、徒競走ではだめだ。ついて行けないというのは本当だろう。こっちとあっちでは巡航速度が違いすぎる」
「お前、どこまで迎えに行った」
煙草が短くなっていく。フィルターまで煙になったら、デブリーフィングに赴くとしよう。
「きのうの話をしているのか」
「そうだ」
「ウエズ、聞きたいか」
「イライが話してくれないんじゃ、あんたに聞くしかないかもしれない」
ウエズは鼻を鳴らす。
「俺は空中戦をやったわけじゃないが」
チナミがイライの隣に腰を下ろした。ソファが沈む。
「あのヨノイって奴より、ウィングマンの方が軽快そうだった。迷いがなかった。飛び方に」
ユウ？

「考えて飛ぶタイプじゃない、そう思った。俺は。俺とセムラが奴らを見つけて、まずすれ違った」
チナミはマグカップをサイドテーブルに置き、右手を離陸させた。同時に左手も上昇。
「こうやって、向かい合うような感じだな」
チナミの左手がややバンクを取りながら、右手に近づく。どうやら左手がハチクマのようだ。
「ロールは鈍く見えた。そのかわり、スピードが違う。一瞬で、」
チナミは両手を胸の前で素早く交差させる。
「すれ違った」
「速度差は」
ウエズが聞く。彼の煙草も灰が長い。
「さあ。こっちは三〇〇ちょい、あっちは四〇〇は出ていただろうから、直交したわけでもないが速かった。目がついて行かなかったよ」
「それで」
「こっちは一気に、」
右手が急ロールする。ノスリが得意とする急反転だ。
「こうやってロールして、ちょっとだけ高度を捨てて、追いかけた」
イライは煙草をもみ消した。ウエズが気づいて、自分の煙草の灰をトレイに落す。
「追いつくのに五分以上かかった。それも向こうが速度を落して」
「迎えに行ったんだろう、お前らは」
イライは腰を浮かす。もう時間だ。
「まあ、俺の印象としては」
チナミも立ち上がる。
「軽さだけだな。こっちの武器は。ほかはだめだと感じたよ。……イライ、その通りだったか」
イライは返事をせず、後ろ手に手を振り、出口に向かった。
「後ろから撃たれたんじゃないだろうな」

チナミの声が、言葉どおり、イライの背を撃つ。
「イライ」
ウエズの声も追ってくる。
「ユサに訊け」
イライはそういうと、煙草臭い待機所を出た。
廊下は、窓がないぶん、さらに寒く感じた。
怒鳴りたい衝動をこらえるのが、いまのイライの精一杯の自制だった。

11

それから一週間、一度も飛ばなかった。
飛行隊のパイロットたちは、次々と新型機に、ハチクマに挑んでいったが、みんな撃墜されて帰ってきた。唯一、イライとは別の飛行隊のパイロットが、リーダーであるヨノイ機を撃墜したという話を聞いたが、同時にヨノイのウィングマンに撃墜され、結局彼らに勝った者は誰もいなかった。彼らはこの基地にいる限り、無敵だった。天敵のいない猛禽だった。
イライは彼らが離陸し、そして二時間ほどで帰ってくるまで、ときには宿舎の窓から、あるいはランウェイエンドの草地から、または報告書を作成する合間の休憩室の窓辺から、眺めていた。ヨノイと口を利いたのは、イライが撃墜される前夜の夕食の席から一度もなく、まして彼のウィングマンと顔を合わせたのは、あのデブリーフィング以来一度もなかった。イライが避けていたというのは間違いなかった。とたんに居心地の悪い基地になった。
居心地が悪くなったのは、同僚のパイロットたちも同じだった。たった二機の新型に一太刀すら浴びせることもできず、次々と撃墜され、ハチクマと同時に進駐してきた？型のノスリにすら喰われる日々だった。
「取り残されていたってことかな」
「何が？」
「俺たちが」
「今に始まったことじゃないでしょ、イライさん」
ＰＸのストーブが日増しにありがたく感じる日々だった。イライは煙草とコーラをレジに並べ、なんとなくひとりごちた。それにレジ係の彼女が答えた。ネームプレートを見た。サトミ・ケイ、そう記されていた。
「私語する余裕があるんだから、君もいい身分だな」

財布を抜いて、コインを彼女の手のひらに転がした。彼女の手がかすかに荒れているのに気づく。
「爆撃機が飛んできたら、イライさんたちが撃ち墜としてくれるでしょ。だから安心していられるの」
声音は邪気のないものだった。けれど、視線に色がなかった。ユサやキリウより、ケイの目はくすんでいた。だから、イライはつい言ってしまった。
「本当に、安心していられるのか」
コインを受け取り、レジスターを操作する指は、いつも通り。ケイはそして、イライに視線を向けてこない。そういえば、いままで一度も彼女と視線を合わせたことがない。
「そのために飛んでいるんでしょ」
やや間があって、ケイが答えた。
「さあ」
紙袋に煙草を二箱、コーラを一缶つっこみ、イライ。
「じゃあ、どうして飛ぶの」
「飛びたいから、ではダメか」
「いい身分じゃない」
「確かにそうだ。いい身分かもしれない。……けど、俺は撃墜された」
イライはレジを離れようとした。ふと見ると、レジスターに指を載せたまま、ケイがこちらを向いてじっとしていた。
「でも、生きてる」
ケイが言う。PXの中はストーブが燃える音しか聞こえない。静かだった。ほかのパイロットも整備員も誰もいなかった。誰もいない時間を見計らってイライはここを訪れる。
「だから屈辱なんだ」
「生きてることが？」
「撃墜されたのに生きていることが、だ」
「撃墜されたの？」

「ほかの連中がさんざん話をしてるんじゃないか？　君の耳にも届いているんだろう？」
「初日に、四対二で負けた話？」
「知ってるんじゃないか」
「で、次の日は六対二で負けて、次の日も四対二で負けて、三〇三のパイロットも四人撃墜されたんでしょ」
　三〇三はイライの所属する飛行隊の姉妹スコードロンだ。同じ滑走路と空港施設を使用しているが、あまり交流がなかった。この基地には二つの飛行隊が配備されていて、双方同じ？型のノスリを使用している。
「三〇三の話まで知っているのか。結局君らの方が詳しいんだな」
「だから辞められないのよ。うかつに辞めたら、一生つきまとわれるから」
「誰にだ」
「言わなくてもわかるでしょ。いろんな意味で」
　窓を閉め切っているＰＸにいても、離陸あるいは着陸する戦闘機のエンジン音はよく聞こえる。ここから滑走路まで、駆け足でも五分以上かかる。戦闘機なら一〇秒もかからないだろうが、ＰＸから滑走路は見えない。それでも音はよく聞こえる。耳になじんだノスリのレシプロエンジンの咆哮だ。
「二〇三のイライさん」
　ケイは「にひゃくさん」と発音する。二〇三飛行隊は依頼の所属する飛行隊。同じく三〇三飛行隊を「さんびゃくさん」と彼女は呼称する。パイロットたちと同じ言い方だった。門前の小僧？　ちょっと違う気がする。
「何だ」
「新型に、負けてられないよ」
　そうしてケイは決して笑わない目をイライに向けた。ほんのわずかな時間、イライとケイの視線が交差する。けれど、直交しなかった。イライが目をそらしたからだ。

「負けたんだ。もう」
イライは自分よりはるかに年下の彼女へ、ただ愚痴をこぼしていることに愕然とする。
「負けたんだ」
愕然としながら、もう一度口にする。
「イライさん」
「何だ」
「イライさん、生きてるじゃない。生きてるってことは、負けてないってことじゃないのかな」
もうケイはイライを向いておらず、手元の帳簿になにやら書きつけていた。彼女は左手でペンを持っていた。左利きだったのか、君は。知らなかった。
「生きてる。確かに。……今日のコーラは、ちょっとぬるいな」
「冷蔵庫の調子が、今日は悪いの。飛行機にはお金をかけるのに、冷蔵庫やレジの機械には、お金をかけてくれないのね」
「そういうもんだ」
「簡単に片づけてくれるのね」
「また来る。今度は、コーラをもっと冷やしておいてくれ」
「外に出しておくね。さもなきゃね、イライさん、あなたが新しい冷蔵庫を買ってよね。パイロットなんだから、それくらいのお金、持ってるんでしょ」
「外に出しておいてくれ」
イライがＰＸを出るまで、ケイはもうこちらを向こうとしなかった。手元の帳簿にずっとペンを走らせ、まったくイライを向こうとはしなかった。

12

とうとう初雪の便りが、届いた。基地から北へ三十分ほどの飛行で到達できる測候施設からだ。レーダーサイトの設置されたあの山岳地帯は、とうに雪化粧に染まり、朝晩は基地の通用路の水たまりが凍り付き、その中にガラス細工のような紅葉が閉じこめられていた。イライは氷を踏みしめる。薄ガラスを割るときのような音が、なぜか郷愁を誘った。幼い頃、霜柱を割ったときの音を、ふと思い出す。昔のことばかりを思い出すのは、もしかすると危険な兆候なのかもしれなかった。なぜなら、人間は過去に生きる生き物ではないからだ。

哨戒任務で飛んだ。いつもの増槽タンクを主翼に下げ、機銃弾を満載し、ハスミと二機で飛んだ。墜とされたタグサリの補充はいつまで待っても来なかった。飛来した二機のハチクマと、随伴する形で展開している八機の？型のノスリが補充といえば補充なのかもしれなかったが、？型ノスリはまだしも、二機のハチクマは味方を相手に日々戦い続けるだけで、積極的に作戦へ参加することはなかった。いつしか彼らは基地の中ですっかり疎まれる存在になっていた。それは、古参のパイロットたちが次々と彼らに撃墜されたからかもしれない。

イライは考えた。ヨノイや彼のウィングマンが、実戦を知っているのだろうか、と。二機の新型は実験航空隊の所属で、戦闘飛行隊に配備されたものではない。経歴を見ても明らかで、装備された機銃は、指定された射撃目標以外に対して火を吹いたことはなさそうだった。だからなおのこと、彼らは基地では疎まれた。

哨戒任務の日、基地は朝からひどく冷え込んでいた。冷蔵庫を買わなかった報復を、ＰＸのケイがやったのかと思った。そういえばあれから、ケイがおもしろいことを言っていた。二機の新型とパイロットは基地で疎まれていたが、その憎悪にも似た感情を一手に引

き受けているのは、二機の戦闘機そのものと、リーダーであるヨノイだけだということ。カンナリという名のウィングマンは、とりわけ基地の若手のパイロットでは、逆に人気がある、ケイはそういって笑わない目で笑った。イライはそのとき、チョコレートを買った。そして努めて無関心を装った。それがうまくいったのかどうかはわからない。ケイはいつもと同じ無表情なタイプでレジスターを操作し、イライに釣りのコインを手渡した。

もう、人違いだとは思わなくなっていた。

ヨノイとともにハチクマに乗って現れたパイロットは、カンナリ・ユウといった。イライが忘れるはずもない名前だった。パイロット本人に間近で遭遇したことはなかったが、デブリーフィングで彼女が見せた表情と、なによりも漂う雰囲気、そう、匂いのようなものにイライは覚えがあった。俺を追って、ここまで来たのか。デブリーフィングで出かかった言葉は、かなりの自制を必要として飲み込んだ。

「……」

イライは夢から覚めたように我に返る。ここは空だ。

「なんだ」

「イライ、聞こえなかったのか」

ハスミの声が耳を打つ。すでに二機は海に出ていた。今回は南、つまりは中立地域への哨戒飛行だった。

「すまん。……無線の調子が悪いらしい」

「考えごとか」

「いや」

空は晴れていた。いや、二万フィートも上昇すれば、いつだってそこは快晴だ。コクピットはヒーターが効いているが、やや寒い。寒いと感じる意識を大事にしようと思った。

「中立地域まで、五十マイル。機関砲の試射をするか」

「いや、いい。大丈夫だ」

「なにが大丈夫なんだ。イライ、具合でも悪いのか」

併走して飛ぶハスミ機のコクピットから、彼がイライを向いていた。酸素マスクにゴーグル、そして飛行服。アクリル製のキャノピーはよく磨かれていた。
「俺も機体も、どこも具合なんて悪くない。大丈夫だ」
イライが答えると、こちらを向いていたハスミが前方に直った。
大丈夫だ。
ここから先の空域には、現れるとしても敵機しかいない。後ろから味方に撃たれる心配などない。エンジンは快調、低空ではややもたつくが、いつもどおりの振動が、背中から伝わってくる。
「こんな任務こそ、奴らを駆り出せばいい」
ハスミが平淡に言った。
「なにが」
「旧型を飛ばすくらいなら、新型を出せばいい、俺はそう思うんだ」
「虎の子なんだろう。墜としたくないのさ」
「ノスリが束になっても敵わなかったんだ。俺たちが飛ぶよりずいぶんマシだとは思わないか」
「そうかもしれない」
「あんたは違うかもな。ミサゴを一機撃墜してる」
「僥倖だ、あれは」
「そう思うのか。墜とそうと思ったから墜としたんだろう」
「ハチクマは墜とせなかった」
「性能差があると思うか。ハチクマとミサゴでは」
「さあ……。誰がつけたんだ、あれにミサゴなんて名前」
「正式じゃない。……暗号名って奴さ」
「ＤＦ－２００って型式名までわかっているなら、なぜそれで呼ばない」
「純粋培養さんたちは、暗号名で気取るのが好きなのさ」
「気取った名前には思えないが」
それは今イライが駆るノスリにしても、新型のハチクマにしても同じだと思った。センスのかけらもないネーミングだと思う。そも

そもノスリの原型機は攻撃機だった。低空を素早く、軽やかに飛ぶ飛行機だった。それが？型だ。イライは乗ったことはなかったが、まだパイロットになりたてのころ、何度も飛行場で見かけた。もはや？型とは似ても似つかない形状をしていた。野を擦るように飛ぶ、「ノスリ」の名がふさわしい飛行機だったと記憶している。もともとが高空を大馬力で飛行する戦闘機ではなかった。

「今日は、さっさと帰るよ」

ハスミが鼻歌を口ずさむように言った。彼はいつでもそうだ。気負わずに飛ぶ。イライとは違う。自分とは。自分はいつも気負って飛んできた。だから今まで生きてこられた。が、ハスミは気負わずに飛び、そして同じように生きてきた。スタイルが違っても、飛び方が違っても、生きている現在は同じということだ。

「帰ろう。同感だ。さっさと帰ろう」

「ミサゴに出会わないことを祈る」

「気弱だな」

「あんたは一機墜としているから、そう思うのさ。俺たちの中で、ミサゴをまともに見ているのは、あんただけだ。タグサリを除けば」

「間もなくアツマだ」

「タグサリの機体は回収されなかったそうだな」

「できるんだったら、哨戒任務が実施されるはずもない」

「もっともだ」

「奴は本当に、……死んだのか」

「帰ってこない。……生きてるかもしれないが、姿が見えないのは生きていないのと同じだよ」

イライは言った。操縦桿がわずかに粘る。風が出ている。気流が荒れてきた。眼下は雲海だった。手が届きそうなくらい近い。

「荒れてきたな」

ハスミの機体がわずかにぶれ始めていた。イライ機も同じだ。

「この程度、荒れたうちに入らないさ。今日は積乱雲もない」

「隠れ場所もないってことか。俺は下を見張る」

「了解だ」
　五十マイルなど、巡航速度では十分程度の距離にすぎない。が、眼下は雲海のままで、海岸線は見えなかった。航法が正しければ、もう中立地域に上陸しているはずだ。
「警戒」
　ハスミの声が緊張していた。
「何か見えたか」
「まだだ。でも、いやな雰囲気だ」
「いやじゃない雰囲気があるのか」
「ＰＸのレジだな」
「なんだって？」
「あんた、レジの子と仲がいいそうじゃないか。名前、なんていったっけ」
「知ってるんだろう」
「学生さんに手を出すなよ」
「そんな歳じゃない」
「歳なんて関係ない」
「喉が渇いたな」
「帰ったらたらふくコーラを飲んでくれよ。警戒。方位一七〇。あの雲、いやな感じがする」
「電探情報は」
「俺の勘だよ、イライさん」
「信じるよ」
　スロットルをやや開ける。イライ機が増速、ハスミがついてくる。チェック・シックス。二機はコントレイルは曳いていない。そして、後ろに敵機もいない。やや気流が荒れてきたことを除けば、雲海上空二万フィートは、天国の風景のようだった。そう、有り体にいえば天国だ。それ以外にどんな言葉でここを表現すればいいのだろう。青と、白。基調になる色はその二系統。けれど、雲の峰の端々や二機を包み込むような青の天蓋には、様々な色が散っていた。数える

気になればどれくらいの時間がいるだろう。ハスミなら上手に絵の具をパレットに溶き、この空を再現するかもしれない。

それからしばらく、二人とも無言で飛んだ。燃料残量からすると、そろそろ折り返し地点だった。操縦桿に添えた右手の人差し指は引き金から浮かせたままだ。来るならいつでも来てみろ。雲海に遮られ、地上からの高射砲攻撃の心配はあまりない。もしかすると地上は雨かもしれない。天候が悪ければ、敵の新型も上がってこられないはずだ。それくらいに天気が悪ければ。

イライは操縦桿をやや左に傾ける。ラダーは入れず、機体がそのまま滑るのに任せた。ハスミもついてくる。左にバンクを切ったまま、高度が落ちる。ゆっくりとダイブする。心持ち、機体後部が重い。それはこの機体の特徴だった。ノスリの悪癖に、機体の重心から来る失速特性の悪さが挙げられた。一度失速すると、重量物であるエンジンが機体後部に設置されている分、回復不能になることがある。機首上げ状態から回復できないのだ。イライも何度か背筋を冷やした経験があった。旋回時は余計な操作をしてはいけない。それがこの機体の特性だ。一言多い人間が嫌われるように、余計な操作を、この飛行機は特に嫌う。が、この高度と速度があれば、失速を気にする必要はない。イライは左バンクを維持し、高度が落ちるのに任す。高度が落ちる分、速度が増す。三〇〇ノットに達する。キャノピーを風が切る。そこでようやく、ゆっくりとエレベーターを引いた。機体は左旋回を開始する。ハスミとの距離は緩やかに開く。戦闘隊形だ。向かって左手、十時の方角に、先ほどハスミが「いやな感じだ」と漏らした雲が形を変えていた。成長している。やはり地上は雨だ。雲の中で稲妻が閃いた。

二機は湧き上がる雲を回り込むようにして旋回する。高度は徐々に落ちている。気流が荒く、機体がもまれる。コクピットがびりびりと震えていた。操縦桿は粘っこい。今はイライもいやな感じがしていた。大きく息をついてみる。首を巡らせる。あれが出てくるなら、この碧空に黒煙を曳くはずだ。見逃すはずもない。もしコント

レイルでも曳いてくれれば、真っ先に迎えに行ってやる。
「イライ」
ハスミの声。無意識に振り返る。
「どうした」
「いやな予感が的中した」
ハスミの声がいやに冷たい。はじかれたようにイライは周囲を警戒、スロットルを握る手に力が入る。プロペラピッチにはまだ余裕があった。スロットルも全開ではない。
「どこだ」
イライは問う。
「違う」
ハスミは声を震わせていた。寒いわけでも緊張でもない、エンジンの振動がそのまま音声になったような、そういう音だった。
「スロットルが開かない。回転が上がらない」
「なに」
「エンジンだ。……過給圧もおかしい。ブーストがかからない」
「本当か」
「計器の故障じゃなければな。まずい。……早く帰ろう」
「高度を下げるか」
「まだ大丈夫だ。けれど、これ以上は上がれない」
致命的だ。なにが最新鋭だ。聞いてあきれる。イライは口の中で激しくののしった。が、声には出さなかった。
「イライ」
「なんだ」
「俺からは見えない。煙を吹いちゃいないだろうな」
応える代わり、イライはハスミを向く。
碧空。青。そして雲の白、灰色、まだら模様の雲海。
「煙は見えない。大丈夫だ」
「大丈夫じゃなさそうだ。本式にエンジンがぐずってきた。オイルを吹いたりしてないか？」

ハスミの声はひどく震えていた。先ほどよりもひどい。
「見えない。今のところ、煙もオイルも大丈夫だ」
「くそ、回転が上がらない。吹けない、ダメだ」
「ハスミ、増槽を捨てろ」
「帰れなくなる」
「燃料残量はまだ余裕があるはずだ。ハスミ、帰投しよう」
「すまない」
「エンジントラブルで墜落なんて、敵に墜とされるより屈辱じゃないか。ダメだ、そんなのは俺が許さない。帰ろう」
二機は旋回をやめた。方位を帰投方向へ、機首を基地へ向ける。ハスミ機はまだ煙を吹き出すような兆候はなかったが、飛び方に余裕がなかった。姿勢の修正が激しい。エンジンだけの不調ならいいが。
「雲に入るか」
イライは提案する。
「気流で落ちるか、敵機に墜とされるか、どっちか選べって？」
「気流で落ちるほど荒れていないようだ」
「わからないよ」
「了解、高度を維持しよう。大丈夫か」
「たぶんね」
ハスミに合わせて、イライはスロットルを絞る。それにしても、……いま襲われたらひとたまりもない。どれくらい中立地域に侵入していただろう。三十マイルでは効かないに違いない。自分だけでも一度雲海を降り、正確な位置をつかむか。それも危険だ。降りている最中にハスミが襲われるかもしれない。航法を信じるしかない。
「海まで出よう」
「いや、迂回することになる。早く帰りたい。くそ、このポンコツ」
「急がば回れ、だよ。海まで出よう。その方が安全だ。燃料ならまだ大丈夫だ」
「わかった。海まで出よう」

ハスミまで失いたくなかった。イライはグラブの中がじっとりと汗ばんでいるのに気づく。俺は、とんだ臆病者だ。いつもびくびくしながら飛んでいたのか？　最近はそういうことが多いだけだ。気にするな。

じりじりと背中が焦げ付くような、いやな気分だった。ハスミに起きているトラブルが、自分の戦闘機にも起きるのではないかと、そういう妄想は捨てることにした。

「いやな感じどころじゃなかったな」

ハスミが笑っていた。自嘲するような、いや、もっと簡単に、ひとり笑いのような。それがイライにとってもっといやな気分にさせた。

「余計なことは考えるな。帰るぞ」

「わかってる。考えたくはないが、でも考えちまうのさ」

「俺はさっさと帰ってコーラを飲みたい気分だ」

「いいだけ飲んでくれ。先に帰れとは言わないぞ」

「その調子だ。帰ったら、この空の色を俺に描いて見せてくれ」

「いくらでも描いてやるよ。帰れたら」

その調子で、エンジンもなだめすかしてくれ。二人で帰るぞ。

「雲海ぎりぎりまで降りるぞ、ハスミ。ただし雲には入るなよ」

「言われるまでもない。こんな状態で雲には入りたくない」

「機体の状態より、バーティゴが心配だ」

「ついてない」

「変針する。ヘディング二六〇へ」

「了解」

二機はゆるやかに高度を下げる。ハスミの機体がばたついている。大丈夫だ。まだ煙も何も見えない。イライは大気速度計を確認する。二〇〇ノットと少しだった。ノスリ？型の巡航速度は二五〇ノット。ここが中立地域上空でなければ、新人パイロットの訓練飛行初日の一時間目といったところの速度だった。が、これ以上速度を落したくはなかった。これ以上の速力の低下は、同時に高度も失っていく。

眼下の雲海は当初よりもはるかに密度を増していた。まるで弾力性のある固体のような、そんな手で触れられそうなほどの密度だ。
「後方、警戒」
震えるハスミの声がヘッドセットの中に響く。
「どうした」
「方位一七〇、レベル、何かが見えた」
イライは瞬間シートから身体を浮かすようにし、振り向いた。
「一七〇か？」
「レベルだ。確かに、何か見えた」
「キャノピーのゴミじゃないだろうな」
「こんなときにそんな冗談は言えない。確かだ。見えた」
イライはエレベータを引き、やや高度を取った。ハスミをカバーするように。そして、ハスミが言った方位を向く。北へ向かって飛ぶ二機にとって、ハスミの示した方角は真後ろに当たる。ミサゴか？　こんなところで出会いたくはない。
「ハスミ、現在位置はわかるか」
「もう海に出ているはずだ。さっき変針してから十分以上飛んでる」
「ハスミ、増槽を捨てる準備をしておけ。もう燃料の心配はないはずだ」
「何をする気だ」
「決まってるじゃないか、迎え撃つんだよ。敵なら」
言うなり、イライはスロットルを全開に、プロペラピッチも最大にした。はじかれたようにイライのノスリは加速する。いい反応だ。過給圧が最大値を示す。最大出力だ。二〇〇〇馬力を上回るエンジンが咆哮を上げた。背中にひどく心地よい振動がびりびりと伝わってくる。操縦桿が粘っこさを通り越し、固くなる。気流が悪い。風は、……ハスミ、俺たちはまだついてる。追い風だ。
「ハスミ、雲海の上ぎりぎりを飛んでろ。俺は上に行く」
イライは言うが早いか増槽を切り離した。抵抗を減らした機体は一気に身軽になる。そして操縦桿を引きつけた。速度は三〇〇ノッ

ト弱まで加速していた。急上昇に入る。ほぼ垂直に機首を立て、その状態のコクピットからイライは真上を向く。角度としては先ほどハスミが示した方位を仰ぐ形だ。

見えた。

黒煙が二筋だ。

認めたくなかったが、間違いない。ＤＦ－２００、ミサゴだ。しかし、遠い。普段であれば、スロットルを全開にし、そのまま十分に逃げ切れる距離だ。が、今日は違う。雲海ぎりぎりにハスミが見えた。エンジンに致命傷を負ったハスミが。彼をおいて逃げるわけにはいかない。逃げることができないなら、相手を撃ち墜とすしかない。イライはすでに急上昇をすることで、相手に姿をさらしていた。もう気づかれているに違いない。スロットルはまだ全開のままだ。ループに入れた機体は頂点からすでに下りに入っている。背面飛行から順面にロールを打つ。真上に見えていた真っ白な雲海が空と入れ替わる。速度は二五〇ノットまで落ちていたが、高度は二万フィートに迫っていた。画用紙に鉛筆をそっとすりつけたように、はるか遠くに黒煙が点として見えていた。こちらへ向かっているのか。が、またもイライは自分のつきを再認した。相手よりも高度で勝っているのだ。奴ら、上昇してこなかった。こちらに気づいていないのか。それにしても風が強い。見ると、眼下左手の雲海から、雲がするすると湧き上がってきていた。日を浴びてててらてらと輝いていた。濃淡がほとんどなく、立体感が感じられなかった。イライは機をバンクさせ、相手の気を引くように心がけながら、その雲に回り込んだ。

いやな予感？

それは今頃相手がそう思っているのさ。

イライは強くそう思いこむことにした。

操縦桿が重い。対気速度は三〇〇ノット強、やや下降気味に積雲を回り込む。すでに黒い筋はとてつもない量感をたたえたあの雲の

向こうだ。ノスリはＤＦ－２００に比べて一回りほど機体が小さい。小柄だということは、ようするに相手から見えにくいということだ。それは空中戦においてかなりの有利なポイントになる。まして奇襲を狙うならさらに。イライは人差し指をガントリガーから浮かせ、そしていつでも発砲できるよう、全神経の七割方を視力に預け、残りを全身に殺気としてみなぎらせる。いつもと同じだ。巡航速度に勝る相手を撃ち墜とすには、ようするに相手の速度を殺せばいいのだ。操縦桿を左にやや倒し気味で保持し、右のラダーを入れる。機体をゆっくりと、うねるように襲ってくるアドバース・ヨーを両足でコントロールする。もうすぐだ。俺の勘がただしければ、もう間もなくだ。ジャイロ式の照準器をにらむ。照準環に敵機を捉えたとき、それは彼らの最後の風景を意味するはずだ。左にバンクしたコクピットからは、ほぼイライの頭上を猛烈な速度で雲の峰峰が吹き飛んでいく。思考の片隅で、しかしはっきりと、僚機の安否を思う。ハスミ、じっと飛んでいてくれ。

やがて、雲が切れる。イライはスロットルを最大に、プロペラピッチも最大角度で、背後から心地よいターボエンジンの咆哮を聞く。見えた。思った以上に近く、すぐそこに黄色みがかったグレイの塗装を施した敵機が二機、並んで飛んでいた。気づいていない。そう信じるしかない。イライは機首を心持ち強くさらに左側へ振らせる。照準線が敵機の進行方向からわずかに先を指す。そして、トリガーを引く。四門の二〇ミリ対空機関砲が火を吹く。機関砲だけはこっぴどくしてやられたハチクマと同じ、メルクア・ポラリス製だ。銃身が長く、初速が高い。そして信頼性も高い。曳光弾が二機並んで飛ぶ敵機のウィングマンに吸い込まれていく。これは僥倖ではない、狙ったんだ。イライは弾道を確かめることなく、ノスリを急な右ロールへ持ち込む。撃たれたことに気づいた敵機は、雲を避けて右へ旋回するはずだ。あるいは雲に飛び込むかもしれないが、これだけの規模の積雲は、もはや積乱雲と等しい。そんななかへ飛び込むパイロットを、イライは知らない。だから右へ機体を振った。次の瞬

間、視界のほぼ中央で茜色の炎が散る。命中だ。敵の編隊のウィングマンに、イライの二十ミリが命中した。喝采を上げたくなるほどに気持ちのいい射撃だった。敵機の左主翼が吹き飛んでいた。黒煙を盛大にまき散らし、被弾した敵機は左主翼を失い、一気に墜ちていく。次は、リーダー機だ。予想通り、僚機の被弾を見、リーダーは右へロールした。こちらを見ていなかったのか。すでにイライの照準器のなかに、彼、あるいは彼女はいた。イライはロールしていくリーダー機のミサゴを、意外にスレンダーな機体だと思った。エンジンに主翼と水平尾翼をくっつけたらこうなるだろう、そんな形状で無駄がなかった。ハチクマよりも美しいかもしれない。が、俺はこいつを叩き墜とさなければならない。トリガーを引いた。弾丸はきれいに集束していく。ハーモニゼーションが完璧だ。ゆるやかな弧を描いて、曳光弾がヴェイパートレイルとともにリーダー機へと飛翔する。空が青い。なんて青いんだ。キャノピー越しに、雲がまばゆい。ゴーグルをかけていてもまぶしい。そんな空だ。なんてきれいなんだ。イライが放った二十ミリは、そのままリーダー機の右主翼に次々と命中した。ミサゴのエルロンが飛んだ。フラップも飛んだ。右の水平尾翼に大穴が空いた。が、火が出ない。イライはマスクのなかで舌打ちをした。

が、敵はすでに手負いだった。止めを指してやろうか。それよりもイライはハスミが気になった。これ以上ミサゴを追い掛け回しても、今度はこちらの燃料が心配になる。洋上に出たとはいえ、いまだここは中立地域なのだ。海岸線まで逃げ込まれたら、帰れなくなる。イライは戦闘機乗りであり、戦闘機乗りは何が何でも敵に弾を撃ち込んで、そして基地へ帰還するのが使命だった。敵を撃ち墜としても自分が墜ちては意味がない。イライはトリガーから指を浮かせた。敵機の、ミサゴのエンジン排気管から、いつかみた青白い炎が吹き出していた。そういえば、ハチクマとの模擬戦闘のあとのデブリーフィングでヨノイから聞いた。ミサゴもハチクマも、ジェットエンジンの決定的な弱点である瞬発力のなさを補うため、オーギ

ュメンタと呼ばれる推力増強装置を搭載していると。タグサリが撃墜されたあの日、形勢を逆転された大きな要因は、それだった。ミサゴが排気管から炎を吹きだし、イライとタグサリのノスリはその上昇力に追随を許されなかった。あれがオーギュメンタか。突発的な加速力はないとヨノイは言っていたが、それでも手負いのミサゴはすでに、徐々にノスリを引き離しはじめていた。深追いは禁物か。イライは機体を水平に戻し、そして後方に遠ざかったあの積乱雲に機首を向けようとした。何気なくぐるりと首を巡らせ、キャノピー越しに背後をうかがった。予感だったのかもしれない。次に、イライが見たものは、二筋の曳光弾の軌跡だった。

撃たれた！

イライは考えるより早く操縦桿を左いっぱいに倒し、機体を背面に入れ、さらに操縦桿を股間にめいっぱい引きつける。天地が逆転する直前、イライは背後に黒煙を二筋見た。襲いかかる加速度に、イライはマスクのなかで絶叫する。様々な思いをはき出す。前の二機は奇襲だった。が、奴らが二機編隊だとなぜ自分は決めつけたのか。違う。奴らは四機編隊だった。最初に見た二筋の黒煙は、先行する二機だったのか、後続の二機だったのか、もはやわからない。が、二機ずつのエレメントで、合計四機、ミサゴは空にいた。背面に入れ、パワーダイブに入ったノスリのコクピットから、手負いのミサゴが猛烈な速度で反転していくのが見えていた。主翼端から真っ白なヴェイパートレイルを引いていた。右フラップとエルロンを失った彼、あるいは彼女は、もう戦闘に参加することはないだろう。逃げているのだ。そして、失った僚機を屠った相手を撃墜すべく、後続の二機がいままさに襲いかかってきている。ほぼ逆落としになったノスリは、操縦桿が石になっていた。びくともしない。速度は四〇〇ノット。さらに対気速度計の針が回る。高度計の針が凄まじい勢いで逆回転していた。雲に飛び込むか。雲海の下に抜ければ、捲けるかもしれない。が、ではハスミはどうする。そう思ったイライの眼に、敵の二機が散開し、一機がノスリではあり得ないほどの

速度で北へ向かっていくのが見えた。奴、ハスミに気づいている。
イライは無線のスイッチを入れる。
「ハスミ、聞こえるか。まだ飛んでいるか」
雑音。かなり距離が開いてしまっている。あのままハスミが二〇〇ノットに達しない程度の速度で基地へ向かっていたとしても、こちらは最大速度で空中戦をやらかした。下手をすれば五十マイル程度の距離はあるかもしれない。
「ハスミ、ヒムロ・ニ、聞こえるか」
「……まだ飛んでるよ」
「様子は」
「よくない。危なくてスロットルに触れない。いつエンジンが止まるか冷や冷やしてる」
ハスミの声は雑音の向こうで、それでも穏やかだった。よもやあきらめているわけではないだろうな。
「ハスミ、悪い知らせだ。ミサゴが一羽、そっちに向かった。雲の下へ降りろ」
「撃ち漏らしたか」
「四機だった。うかつだった。俺のせいだ。奴ら、お前に気づいてる。ぎりぎりまで速度を上げろ、こっちもまずい」
イライの呼びかけに、ハスミは無線スイッチのオンオフ二回で応えた。
イライのノスリは、ほぼ限界速度まで達していた。ラダーペダルから計器盤に足をずらし、力の限りで操縦桿を引いた。引いている途中で雲に飛び込んだ。シーリングはどれくらいか。水平儀で姿勢を確認しながら、イライは渾身の力で操縦桿を引いた。五〇〇ノット。降下速度の限界だ。これ以上になると、機体がバラバラになるかもしれない。振り返る気にならなかった。乳白色の雲のなかを、曳光弾が追いかけてくる。逃がしてくれる気はないようだ。全身の血が座席に向かって下がっていくようだ。五G、六G。四〇〇ノット。一気に雲を抜けた。鉛色の海面が飛び込んでくる。近い。背後

から曳光弾。当たらない。ヘタクソ。放たれた曳光弾が海面にはねた。そんなに近いか。ようやく操縦桿を戻し、左へ急ロール。反転トルクの関係で、ノスリは左旋回が得意だった。増槽タンクを捨てたイライのノスリは、さらにロールレートが異常なほどに敏感だ。くるりと音がするように機体は反応する。振り向いた先に、ミサゴがいた。一機だった。こいつら、素人か。散開してくれたのは、イライにしてみれば、チェック・メイト一手前から解放されたようなものだった。多勢で無勢を袋だたきにするのが戦争だ。こいつら、よほどの平和主義者か。イライは口に出さずにマスクのなかで毒づいてやる。ならば、相手になるだけだ。機速は三〇〇ノットまで落ちている。それでも速い。燃料計は……まだ一試合できそうだ。が、延長戦にもつれれば、空中給油機のお世話になるしかない。空中給油機が展開できる空域まで飛べればだ。

曳光弾がしつこく追ってくる。イライは機体を今度は右にバンクさせる。ノスリの左主翼のすぐ上を曳光弾がかすめた。そのまま右へ抜けていく。引っかかったか。イライは機体を右にバンクさせたまま、右旋回せず直進していた。両足のコントロールが肝だ。首を巡らすと、案の定、イライの動きを読み過ぎたミサゴが踊っていた。ワンテンポ遅らせて、イライは右旋回、それもかなり急激な。旋回性能でははるかにノスリに分があった。速度は二五〇ノット。この速度域なら、ハンディはない。むしろ、ノスリが有利だ。イライをオーバーシュートした形になったミサゴは、腹をこちらに向けたまま、得意のオーギュメンタに火を入れていた。そのときイライはすでにスロットルを全開にしていた。ぐっと背中に心地よい加速を感じる。二機の航跡が交差する。が、まだイライの照準器にミサゴは入ってこない。それでもイライは撃った。普段より長めにトリガーを引いた。きれいな弧を描き、弾幕を張る。そのまま逃げていけ。イライは右旋回をやめ、スロットル最大で北へ向かう。こいつにかまっている余裕はない。できれば撃ち墜としておきたかったが、ハスミが心配だ。

「ハスミ、飛んでるか」
「まだ生きてる」
「ミサゴは」
「まだ見えない」
「現在位置は」
「海岸線はまだ見えない。カイバ島を三分ほど前に通過した」
中立線は越えたようだ。が、まだ味方の防空識別圏まで到達していない。
「メーデーは打電してる。友軍機が上がってくるはずだ」
カイバ島から十分ほどで防空識別圏に飛び込める。ホントの通信所が中継してくれれば、基地から迎撃機が上がってくるはずだ。もう中立線は越えているのだ。が、その前に二機のノスリが撃墜される可能性が高い。イライは最大速度で北を目指す。イライの弾幕につかの間逃げていたミサゴも、体制を立て直し、すでに追撃態勢にあった。追いかけてくればいい。ノスリの速度は再び増速、三〇〇ノットを超えていた。水平飛行時の最高速度記録でも作るか。増槽もなく、残存燃料も心細くなっている今、機体は軽い。やがて、照準器に黒い機影が見え始めた。黒煙を曳いていない。ハスミだ。もう一機のミサゴはどこで何をやっているのか、姿が見えなかった。イライは高度を上げる。眼下に漁船。航跡が白い。そして、波頭も白い。追い風だ。南からの風。おそらく間もなく、北からの風がぶつかる場所に着く。そこは前線だ。温暖前線。すでにキャノピーを雨滴が叩いていた。視界が悪くなる。イライは左垂直尾翼の向こう側を、次に右の垂直尾翼の向こう側を警戒する。プロペラはまだ勢いよく回る。こちらのエンジンは快調なのに、ハスミのエンジンはまだくずっているらしい。それでも飛んでいるだけ優秀だ。
「ハスミ、オイルは吹いていないか」
「油圧が落ちてる。吹いているかどうかはわからないが、これ以上の速度は無理だ」
「いまどれくらいだ」

「二〇〇出せない。一八〇くらいがやっとだ」
「十分我慢しろ。防空識別圏を越える」
「イライ、どこだ」
「後ろだ。五マイルくらいか」
「……敵は」
「視界が悪い。どこにいるのかわからない。警戒だ。警戒」
「くそったれ」
「喉が渇いたよ」
「帰れたらコーラをおごってやるよ」
「約束だ」
ジッパーコマンドが返ってくる。ハスミも自分も、まだ生きている。ゴールまで、あとわずか。あとわずかだが、まだゴールではなかった。
緩やかに高度を稼いでいた。雨脚が強くなっていく。コクピットのなかも冷えてきた。前線を越えたら、もしかすると雪になるかもしれない。けれど南風が強い今、それは錯誤に違いなかった。雪でも降ってくれれば、より視界が悪くなる。着陸は面倒だが、ミサゴから逃げ切るには好機になる。奴ら、帰ったのか。
「イライ、警戒、十二時、ブレイク、ブレイク！」
「なに？」
首を巡らせたとたん、左主翼の、ちょうど左垂直尾翼のつけ根あたりの外板がはじけた。激しい衝撃と目の前を過ぎる曳光弾。そのときに黒々とした機影。雲に紛れていやがった。振り向いたまま、イライは操縦桿を左へ倒す。フラップは無事だ。かすめただけだった。ヘタクソが。イライは反転させた機体をひねる。上昇するような愚は犯さない。速度が落ちていた。曳光弾がよぎる。
「ハスミ、上昇できるか。雲に入れ」
「くそ、ポンコツ！」
ハスミは怒鳴りながらもゆったりと上昇を開始した。そのハスミにも曳光弾が襲いかかっていた。振り向くと、イライの背後にいた

ミサゴが離れ、もう一機と編隊間を詰めていた。ハスミが手負いであることに気づいたのだ。イライは左ロールからそのまま一回転し、順面に戻したあと、燃料残量を忘れた。スロットルを再び最大に。残弾はどのくらいか。撃ち尽くすほどは撃っていない。それよりも二機のミサゴだ。盛大に撃ってくれるじゃないか。そろそろ弾切れを期待したいところだ。二二〇ノット、操縦桿は軽い。空気が重い。高度が低いのだ。この高度では、ＥＪ２０型エンジンは最大出力が出ない。イライは照準することなく、ミサゴがいるあたりめがけてトリガーを引く。短く撃った。先行している一機が身を翻す。もう一機はまだハスミをねらえる位置にいる。

「ハスミ、雲だ、雲」

「わかってる。でも、ダメだ、エンジンがついてこない」

ハスミの声がうわずっていた。悲痛だった。イライは膝元の非常無線のスイッチを連打する。ハスミの背後につけたミサゴが撃った。近い。当たる。ハスミのノスリが被弾する。白煙がエンジンから上がった。エンジンナセルが吹き飛んだ。

「ハスミ！」

呼びかけにハスミはそれでも無線スイッチのオンオフで応えた。どんな意味か。生きてるよ、そう言いたいのだ。が、ハスミの機体は、ゆっくりと右に傾きだした。目に見えて速度が落ち始めた。高度も。白煙は止まらないが、黒煙にはならない。致命傷ではないようだ。プロペラもまだ回っている。イライは一気に操縦桿を引き、高度を上げるとロールし、背面飛行でミサゴに接近する。照準器のなかの照準環が揺れていた。見切りをつけたところで掃射する。もとより当てるつもりもなく、殺虫剤をぶちまけるような気分だった。一機のミサゴが反応したが、もう一機はイライが照準していないことを悟っているかのように動かない。ハスミにとどめを刺すべく、追いつめていく。

「イライ、雲には入れない。シリンダーが何本か完全に死んだ」

「もうこちらの防空識別圏に入ってる。針路を維持してくれ。俺が

何とかする」
「期待してるよ」
　イライはハスミを真似、ジッパーコマンドで返す。イライはノスリを左へ急ロールさせ、先行するミサゴに交差するように機銃を撃つ。左右五発ずつ、計十発。当たらない。照準していないからだ。もう一機はやや離れたところから、まっすぐにイライを向いて迫っていた。見るともう一機の機首から白煙が上がる。撃った。曳光弾がイライの左垂直尾翼上部を貫通した。衝撃に機体が震える。方向舵はまだ無事だが、左垂直尾翼の先端がなくなった。それだけで機体は砂利道を走るモーターサイクルのように安定を失った。イライは一気に操縦桿を引きつけ、失速ぎりぎりまで機体を立てた。もう一機を引きつけて、ハスミを逃がすしかない。ノスリは機体の構造上、牽引式の戦闘機がアクロバットで見せるような失速を利用した急旋回ができない。そのまま尻から落ちる。イライはまだ翼が空気をつかんでいるうちに、スロットルを開けて右へ機体を倒す。その先にはハスミと先行するミサゴがいる。イライは祈りながら撃つ。ハスミに当たってくれるなと。その動きが意外だったのか、イライを狙うミサゴが離れた。あるいはそのイライの動きと、ノスリの機首から上がった発砲煙を被弾か故障かと勘違いしたのかもしれない。イライは息が上がっていた。視界が悪い。ゴーグルを上げた。そして、自分を狙っていたミサゴが離れた理由を知った。雨雲から機影が見る間に近づいてくる。北からだ。機銃弾がイライとミサゴの間を閃く。
「ハスミ、味方だ、味方だ！」
　気づいたときには叫んでいた。
　機影はやがて灰白色の迷彩とともにあらわになり、それがハチクマであることに気づく時間は、ほとんどかからなかった。苦々しい思いだったが、二機のハチクマは青白い炎を主翼に下げたエンジンポッドから吹き出させて、二機のノスリを追いすがるミサゴに機関砲を撃ちまくった。

「ヒムロ・イチ、イライ大尉？」
「ヨノイ大尉か？」
「無事？」
「見ての通り」
　ヨノイは応えず、二機のハチクマは戦闘隊形を維持したまま、まずあっという間にハスミを狙っていた一機を粉々にしてしまった。爆音、炎、そして黒煙。パラシュートは出なかった。撃ったのはヨノイではなく、彼のウィングマンだった。正面からミサゴをバラバラにした。コクピットを狙ったかのような撃ち方だった。はっきり見えた。すれ違い、反転する。もう一機のミサゴは、急激に反転すると、そのまま一気に高度を捨て、逃げた。ヨノイも追わなかった。
「ハリエンジュ・ニからイチ。作戦終了」
　リコーダーのような声だった。
「カンナリ、お疲れ」
　模擬戦闘のときと同じやりとりを、イライは汗をグラブでぬぐいながら聞いた。苦々しい思いだった。
「ハスミ、生きてるか」
「九死に何とやらだな。生きてるよ。エンジンもまだ」
　ハスミのノスリはまだプロペラは健在、盛大に白煙を吹いてはいるが、燃料が漏れている様子はなかった。エンジン本体への直撃だったのだろうが、運がよかった。
「振動がひどい。シリンダーが半分くらい死んでるんじゃないか」
「帰ったら診てもらえ」
「生きた心地がしない」
「ホントを越える。もう陸地だ」
「ハリエンジュ・イチからヒムロ・イチ」
「ヨノイ大尉、なんだ」
「生きててよかった。何よりだよ」
「ありがとう、といえばいいのかな。素直に」
「そうだね」

ハスミはもう一五〇ノットも出せていなかった。それに合わせ、三機が編隊を組み直す。

陸地が見える。海岸線が見える。なじんだ風景だ。雨が強い。そして、失われた左垂直尾翼の先端が、おかしな風切り音を立てていた。

帰ったら。

コーラを飲もう。ＰＸの彼女にはなんと言えばいいだろうか。とりあえず、冷蔵庫を買ってもらえるよう、稟議書でも書くことにしよう。

四機はそれから、黙ったままでソラノ川を越えた。

13（前書き）

その者は、翼を持つ者である。
その者は、畏れを知る者である。
故に、その者は、勇気を持つ者である。

13

レシプロエンジンは調整にひどく気を使う。油圧、油音、排気音、彼が駆る機体は排気タービンを利用した過給機を搭載していたから、なおのこと低圧縮かつ高過給であり、高度一万メートルを想定した微調整は、パイロットである彼の領域ではなかった。

彼が駆る翼は、道端に散った木の実をついばむ小鳥ではなく、それらを狙う猛禽だった。彼は戦闘機乗りだ。初めて雲の峰を駆け上がってから、どれくらいの時間が経過しただろう。一人、蒼い世界に身を浸し、振り返ってもそこにはプロペラと垂直尾翼の向こうに広がる空と雲があるだけで、もはや鳥たちですら追いつくことのできない領域は、もはや人間の世界でもなかった。彼を地上に叩きつけようと狙うものは、彼と同じ戦闘機乗りと戦闘機だけだ。

エンジンに火を入れる。スロットルを開けてみる。過給圧は正常、オイルが温まってくると排気音が柔らかくシフトする。ゴーグルを通した滑走路は物憂げな青に染まり、グラブ越しに感じる操縦桿の手ごたえはことのほか心地よい。赤ん坊が空に憧れ、そしてその思いを果たそうと丘陵を風とともに駆け回れるようになる時間よりもはるかに長く、彼は戦闘機とともに空にいた。愛機は都度変わった。機種が変わるたび、性能が上がった。エンジンの出力が上がるたび、操縦性はこなれてくる。余裕が生まれるからだ。その分、あらゆる意味で限界も高くなる。最大速度であり、上昇限度であり、上昇速度であり、旋回速度であり、航続距離であり……あらゆる限界が彼の身体を痛めつけていった。だが、彼は幼いころに抱いた憧憬をいまだ翼とともに持ち続けていた。曳光弾がキャノピーを掠め、ときに主翼をえぐり、方向舵を弾き飛ばされても、彼は戦闘機とともに空にあった。

何人もの仲間が蒼い世界に飲まれていった。蒼い世界に彼らが飲まれるとき、決まって彼らの戦闘機は紅く燃え上がり、黒煙を曳い

て雲海に沈んでいくのだ。次は自分の番だと感じたことはなかったが、そうなる可能性は一度として否定したことはない。そして、失った仲間より多くの敵機を、彼は撃墜してきた。顔も知らぬ、同じ空に生きるパイロットたちに、彼は同じように曳光弾を叩きこみ、蒼い世界に生きつつ、紅い炎を吐き出させてきた。そう、彼は戦闘機乗りなのだ。機首に穿たれた対空機関砲は二十ミリ。破壊力は大きいが、銃身の長さを十分に取れず、初速が低い分敵機に接近しなくては命中しない。弾の首も太く、かつて彼が駆っていた戦闘機に搭載された十二、七ミリ機銃と比べても装弾数は少ない。一発の重さが違うのだ。彼は空にあって、いまだ一度も機銃を撃ちつくしたことがなかった。

滑走路の上を、薄い雲がたなびいていた。きっと上空は風が強いだろう。ラダーペダルに載せた両足がかすかにうずく。もう若くはない。今彼が駆る戦闘機も、もう若いとはいえない機体になりつつあった。彼は知っていた。瞬発力には優れるが高速性に弱みを持つレシプロエンジンはやがて廃れ、新開発のガスタービンエンジンが主流になるであろうことを。

黎明期にあるガスタービンエンジン……ターボジェット・エンジンは、同規模のレシプロエンジンに比べて推力には勝るが、瞬発力がまるでなく、加速力に劣っていると聞いた。まだ彼は空でジェット戦闘機に遭遇したことはなかったが、遠方の友軍機が、敵のジェット機に撃墜されたという噂は耳にしていた。速度ではるかに勝るジェット機は、高空から獲物を狙う、まさに猛禽のように、友軍の戦闘機を屠ったという。空では、最終的に速度と高度を温存できた方の勝ち、あるいは速度と高度を相手より早く稼ぎ出したほうの勝ちだ。加速力には勝っても、最終的に到達できる高度と速度に限界のあるレシプロエンジン機がジェット機を叩き墜とそうとするのなら、相手から高度と速度を奪い取るしかない。奪い取れなければ、逃げることもできず、ただ撃墜されるだけなのだ。それは考えればわかる。

彼はスロットルを開ける。敏感にエンジンは反応し、甲高い排気タービンの音が耳を打つ。プロペラ・ピッチを変え、ブレーキを離す。軽い機体は滑走路を駆け始める。いちばん気持ちが高揚する瞬間だ。いくつになっても、彼はこの瞬間が好きだった。蒼い世界の扉を開ける瞬間なのだ。

離陸する。

車輪が滑走路を離れ、機体は加速を続ける。上昇ピッチを低く押さえて速度を稼ぎ、そして引き起こす。エンジンは息継ぎもせず適正回転を維持している。バックミラーを一瞥する。二枚並んだ垂直尾翼の間でプロペラが勢いよく回っている。ブレードの先端からヴェイパーを曳いていた。湿度が上がっている。荒れるかもしれない。空の流れが変わるかもしれない。今日は迎撃でも対地攻撃でもエスコートでもなく、偵察任務だった。いわゆる威力偵察という奴だ。満載の燃料に、左右の主翼にひとつずつ、増槽タンクを下げている。普段より身体が重い気がした。ロールが鈍い。乗り込めば、戦闘機はすでに彼の身体の一部だった。

僚機がやや遅れてついてきていた。僚機操縦者は見知った男だ。ところかまわず煙草をふかし、整備員からはひどく嫌われていたが、空の上では頼りになった。彼らが駆る戦闘機、ＧＣ－８は二〇ミリ対空機関砲を収納する関係で機首が長く、前部下方視界が極端に悪い。またコクピット前部にカナード翼が配置されていた。要するに前下方から攻め上がってくる敵機に対しては極端に分が悪い。その不足する視界をカバーしてくれるのが僚機であり、今日ともに飛ぶ彼もまた、編隊の周囲を警戒する目をしっかりと持っていた。電探情報も大事だが、最後に頼れるのは、パイロットの目だ。地上での性格などどうでもよかった。空で頼りになれば、そして地上での振るまいが度を越えない程度であれば、気にする必要などなかった。

「イライ、少し雲が多くなってきた」

僚機操縦者が話しかけてきた。無線封鎖はしていない。偵察任務とはいえ気楽なものだ。

「タグサリ、調子は」
「タービンの調子がね。過給圧が今ひとつ上がらない」
「ホガリを大事にしないからだ」
「俺は奴は嫌いだ」
「そんなことは関係ないさ」
「イライ、あんたはどうなんだ」
「頼りになるさ」
それっきり、僚機操縦者、タグサリは黙り込んでしまった。イライはバックミラーを一別した。主翼にそびえる垂直尾翼とプロペラのあいだに、タグサリのＧＣ－８が見えた。タービンの調子が悪いと言いながら、編隊長から適度な距離をとって離れない。バックミラーをのぞいたのが見えたのか、タグサリは主翼をわずかに振った。戦闘空域でなら、味方を意味する合図だった。なんとなく深い意味合いを探ってみたが、イライにはわからなかった。
雲に入る。上昇はまだ続く。水平飛行で速度を稼いで上昇、そしてまた水平飛行。二一〇〇馬力以上の出力を誇っているＥＪ２０型エンジンも、さすがに寄る年並みにはかなわない。が、この機体を越える戦闘機を、まだ友軍機は持っていない。一応の最新鋭戦闘機がこれだ。愛称は「ノスリ」。幕僚監部が名づけた公式名なのだが、飛行隊の誰も、その名では呼んでいなかった。
「イライ」
雲海を見下ろす高度になってから、タグサリが聞いてきた。
「ハーモニゼーションは」
「いつの話をしている」
「弾道が安定しないとあんたぼやいていた」
「どこで聞いた」
「ＰＸだ」
「気のせいだ」
「試射しなくていいのか」
「弾がもったいない。俺はホガリを信用している」

「奴がハーモニゼーションをやっているわけじゃないだろう」
「いい加減にしておけ、中尉」
「……了解、大尉」
雲海が切れる。眼下は海だ。このまま海を越え、海岸線が見えたら高度を下げる。そして十分も飛んだ場所になだらかな丘陵地帯が見えてくるはずだ。そこを一周して帰ってくる。それが今日の任務だ。写真を撮るわけでもない。それは偵察機の仕事で、イライが乗るのは戦闘機だった。要するに、戦闘機が出向かえてくる可能性を示唆しているのだ。イライはそう理解した。
日差しが強い。酸素マスクをつける高度でありながら、エンジンはいまだ快調だ。燃料消費もいつもどおり。空中給油機を呼ぶ必要もないだろう。タグサリはイライの機体からややはなれた低空を飛ぶ。波頭が白いのがここからも見える。海は荒れている。落ちれば一分と持つまい。寒流が流れ込んでいるこのあたりの海は、夏でも泳ぐことができないくらいに冷たい。そういえば、最後に泳いだのはいつだったろうか。イライは少年時代を思いだす。近所の川原で水遊びをし、日暮らしが鳴くころに畦道を歩いたあの夕刻の時間を。自分を待つ人間がまだいた懐かしい時間を。自分の住む町を、棚田が広がる里山の上空を三機編隊で軽やかに飛び去っていた戦闘機を見上げた少年の日を。懐かしい。
「イライ」
呼ばれて我に帰る。
「なんだ」
「聞こえなかったか」
「なんだ」
「電探情報だ。機影を見たそうだ」
「どこに」
「方位二七〇」
「いくつだ」
「わからない」

「探せ」
「高度を下げる」
「了解だ。こちらはこの高度を維持する」
無線機のスイッチを二度鳴らし、タグサリ機がハーフロールを打ち、背面のままで高度を下げて行く。パワーダイブだ。タグサリ機の翼端から真っ白いヴェイパートレイルが曳いた。イライは操縦桿の安全装置を解除する。機銃はいつでも撃てる。親指の腹で空気を感ずる。殺気はない。が、情報を信じよう。敵が来る。
高度は維持、速度を上げる。エンジンにまだ余裕はある。増槽タンクはまだ切り離さない。任務は継続中だ。海岸線が見えてきた。オン・マップ。すでに味方の領域ではない。中立地域への偵察は違法でもなんでもなかったが、相手がそう思ってくれるとは限らない。人差し指はまだ操縦桿から浮かせたままで、キャノピーの向こうに目を凝らす。まずは遠くの雲に焦点を合わせ、周囲を警戒する。自分の目なら、十マイル以上離れて飛んでいる戦闘機を見つけることができる。先に見つけたほうがはるかに有利になる。ボードゲームと同じだ。先手を打った側がとりあえず優位に立てる。
「イライ」
タグサリの声が耳に届く。旋回中なのか、息が荒い。
「見えるか」
「まだ見えない。そっちはどうだ」
「波が荒い。漁船が何隻かいるだけだ」
「俺が見えるか」
「……見えてるよ」
「ついて来い」
「わかってる」
海岸線を越える。イライは操縦桿をそっと、しかしすばやく左に倒す。エルロンが敏感に反応し、地平線が垂直に立つ。ラダーを入れ、そのまま旋回。高度が落ちる。スロットルはそのままだ。
「会敵したら」

タグサリの声。
「墜とすだけだ」
「了解だ」
高度が下がる。速度は上がる。整備指示書や諸元表に記された限界速度まではまだまだ余裕がある。機体年齢以上にこの戦闘機はまだ若い。
（俺の身体以上に）
のしかかってくる重力加速度にひるんだら負けだ。すべてにおいて負けだ。イライはそれを意識しないようにする。考えただけでも負けだ。
海岸沿いの道路は、地図が正しければ、そして自分の記憶が確かならば国道のはずだ。走る車の姿は見えなかった。さらに高度を下げる。まっ平らに見えていた地表に起伏がよみがえる。民家の屋根瓦が見えるくらいに高度が下がる。速度は二五〇ノット。さすがに速い。タービンの音が背後から聞こえる。タグサリはさらに低空を飛ぶ。今はイライが上方監視、タグサリが下方監視だ。このあたりに対空機関砲が設置されているという情報はない。が、こちらの情報がすべてのはずがない。人間は、味方は神様ではない。どこに何があるのかわからない。もちろん敵も神様ではない。だからこそ、雑木林の影や丘の向こうが気になる。海から向かってくる戦闘機を撃墜するのに、どこへ対空機関砲を配置すればいいか。こちら側が嫌だと思う場所こそが怪しい。イライはそうした場所から逃げず、飛ぶ。タグサリもそれをわかっているから、ついてくる。
「タグサリ」
呼びかけにタグサリは無線機のスイッチで応じる。新人パイロットならば、帰還してまず一発お見舞いするところだが、タグサリはそういう人間だ。イライはわかっているからいちいちそんなことに腹を立てはしなかった。
「何か見えるか」
「何を」

「何かだ」
「じいさんが柿の実を軒先でかじってるよ」
「電線に気をつけろよ」
「冗談だろう」
イライは操縦桿を右に倒す。方位を変換、牧場のサイロが右の主翼の先を掠めるようにすっ飛んで行くが、高度はまだまだ余裕があった。静かだった。丘陵地帯は小春日和の陽射しに照らされ、干草ロールがごろごろと転がっている。敵がいるなら、こちらのエンジン音を聞きつけて、いい加減ぶっ放してくるころだ。情報は正しいのだ。このあたりに対空機関砲の陣地はない。
先に見つけたのはイライではなくタグサリだった。
「イライ、方位〇四〇、上空、見えるか！」
応えるより早く示された方角を視線の端で見る。
蒼空にかすかな黒いシミが見えた。薄めた墨汁を、ほんの一滴だけ垂らしたようなあとが二つ。
「見える。見えてる」
「電探で言ってた奴か」
「知るか」
「どうする、編隊長」
「高度、方位とも維持。任務続行だ」
「墜とさなくていいのか」
「待て」
イライもタグサリも水平飛行。地形を追随するように低空を行く。タグサリはイライ機の右後方同レベルに占位した。彼に対しては余分な命令はいらなかった。
恐ろしいほどに静かだった。ＥＪ２０型エンジンは快調で、高高度でも低空でも俊敏な反応を見せてくれる。まだ最大速力まで達しない。しかしあの黒いシミが電探情報のとおりだとするなら、こちらの高度は低すぎる。位置エネルギーで負けている。
バックミラーを一瞥する。タグサリと目があった。同じことを考

えたらしい。
「上がるぞ」
「了解」
スロットルを叩きこむ。プロペラピッチを最大に。はじかれたように、とは行かないが、イライ機は加速する。タグサリ機も加速する。息切れするなよ、ポンコツ。口の中でイライはつぶやく。
「イライ、あれは」
黒いシミはシミ以上の大きさになった。あちらは進路も高度も見つけたときからかわらない。こちらに気づいていないのか、気づいていない振りをしているのか。
「噂を確かめるまでだ」
黒いシミに見えるのは、排気煙だ。間違いない。あれは戦闘機だ。操縦桿を腹にひきつける。エネルギーを過度に失わない程度に引き起こし、機体はいい角度で上昇を開始する。昇降計が回りだす。噂の敵の新型は、上昇時に昇降計の針が振りきれると聞くが、そんな機体が存在するものか。確かめてやる。そして、叩き墜としてやる。いい天気じゃないか。ゆっくりこの草原で眠ってくれ。
一気に上昇した二機は、ほぼあの黒いシミと同レベルに達した。向こうはこちらに気づいてるのか。
「イライ、どうだ」
「任務は続行だ」
「きつい任務になりそうだ」
「お前が弱音を吐くとはな。帰ったらホガリに話しておこう」
「ふざけるなよ、大尉」
「上官侮辱罪と抗命罪で上に報告してやるから楽しみにしていろ」
「帰れたらな」
「必ず帰るさ。いつもどおりだ」
イライは猛然とダッシュする。あの黒いシミめがけて。黒いシミが米粒くらいまで見えてくる。間違いない、プロペラがない。新型だ。ここでお目にかかれるとは。イライはそっと人差し指を引き金

にかける。そう、銃でいうならこれは引き金なのだ。頼むぞ、ホガリ。三日前のハーモニゼーションではまるで弾が集束せず、不安だった。直してくれたんだろうな。

イライとタグサリは相手よりわずかながら高度に分があるようだ。上昇したのが功を奏したか。それにしても、この距離で気づかないか？　試すまでだ。合図もなく、イライは操縦桿を倒し、いきなり相手に襲い掛かった。増槽を捨てる。敵からみれば背後よりやや左後方上空。首を捻るまでもないだろう。殺してやる。引き金を絞る。機首の二〇ミリが火を吹いた。曳光弾が草原の緑に映えるじゃないか。そのまま死ね。イライの腹が冷たくなる。いつも感じる衝動だ。曳光弾は二筋、敵機の左主翼付け根に吸い込まれていく。いい加減見えているはずだ。さすがに少し遠かったか。しかし当たるはずだ。

敵機の左フラップに何発かが命中したのをイライは確認した。遠い。が、当たった。年季の差だ。ほくそ笑む。そのまま燃料を吹いてくれれば、撃墜だ。速度はそのまま、さらに敵機が近くなる。初弾を発砲してから五秒とたっていない。被弾した敵機がようやく、そう、イライからしてみればようやく右にハーフロールを打った。フェイントかと身構えたが、奴は素直に右へ旋回した。煙は出ていなかった。そして、機体の形状がくっきりと見えた。プロペラがない。やや後退ぎみの主翼に、一枚の垂直尾翼。コクピットを包むキャノピーは一体成型なのか継ぎ目がない。排気口と思しきノズルが機体の尻に穿たれていて、水平尾翼が排気口の横に一組。これで機首にプロペラがあればオーソドックスなトラクタータイプの形状だが、プロペラがあるべき場所には機銃がついているようだ。片側に三つ、六門か。口径はわからない。これまでの通例なら敵の機銃は十二、七ミリか。主翼に機銃がついているかどうかは、イライも回避行動をとったため見えなかった。

「タグサリ、来るぞ」

相手は組んでいた編隊をブレイク、被弾した機は一気に高度を下げた。速度を稼ぐ気か。しかしイライ側も加速していた。速度差は

ないに等しい。こちらと同じ速度なら、ハンディはない。イライは喰らいつく。止めをさしてやる。
「ウィングマンに気をつけておけ」
「俺がやる」
「離れるな。二対一ならこちらが有利だ」
イライ側は編隊間をつめない。そのまま進む。ふと見あげた雲が綿アメのようだ。こちら側は風が弱いのか。基地の空に流れていた雲と表情が違う。
被弾した敵機は加速中のようだが、動きは鈍い。真後ろに占位したイライ機のキャノピーに雫が散る。燃料が漏れている。やれる。あと数発で奴は火を吹く。ジェットエンジンがどれだけのものか知らないが、ここで葬ってやる。イライ機の機銃が火を吹く。短く撃つ。敵機までの距離、三〇〇メートルもない。当たる。確信する。そして、次の瞬間、草原の緑に紅蓮の炎が散る。相手機のエンジンが火災を起こしたらしい。今撃った機銃が当たったのか、それとも初弾がはなから致命傷を与えていたのかはわからない。だが、理由はどうでもいい。撃墜だ。火を吹いた敵機はロールを繰り返しながら劇的に高度を落としていく。パラシュートは出なかった。そのまま牧草地に散る。カナードが邪魔して最期を見届けられなかったが、そんな暇はなかった。当たれば、当たって火を吹けばそれで終わりだ。相手の最期を看取る必要などなかった。
「タグサリ」
「来てる。速いぞ、レベル」
「お前が行け。援護する」
タグサリ機が前に出る。武装は機銃だけ、増槽を切り離したこちら側は身軽だ。タグサリ機は抵抗を最小限にするため、必要以上のロールもピッチも打たない。そして、相手は急上昇することもせず、急下降もせず、急旋回をすることもなく、増速している。それでもやや降下気味なのか、追うタグサリ機のカナードが上がっている。
「速い！」

タグサリが叫んだ。
イライはタグサリ機の右後方にいたが、タグサリが叫ぶより早く、息を呑んでいた。敵機が突如急上昇を始めたのだ。ありえない。エネルギーを一気に失うはずだ。が、奴はやった。
「なんだあれは」
タグサリが短く叫んだ。急上昇した相手に追随せず、わずかに機首を上げた状態だ。
「イライ！」
相手機の排気ノズルから激しく炎が吹き出していた。タグサリは一発も撃っていない。エンジン火災に似ていたが、違う。相手機のノズルからは青とオレンジを混ぜたような炎が、激しく吹きだしていた。
「まずい、ついていくな、速度を失う」
「わかってる。しかし、ありゃなんだ」
「考えるな。ダメだ、逃げるぞ」
「大尉」
タグサリ機はハーフロール、そのまま背面に入れて反転、スプリットS機動に入る。
「速度を失うな」
「……俺を、……誰だと、……思ってる、大尉……。くそ、重い」
速度が出ている状態でのこの機体の悪癖が出ている。タグサリの機体は暴れていた。ある速度を越えた段階で、動翼がひどく重くなるのだ。分けてもエレベーターが極度に重くなる。従順だった戦闘機が、いきなり駄々っ子になってしまう。増槽タンクを捨てたＧＣ－８はロールには敏感になっている。が、それは急激過ぎる変化で、慣れないパイロットはモーメントの変化に戸惑い、その間隙を突かれて撃墜されることもある。タグサリはＧＣ－８に乗ってから確か二年と言っていた。癖は知り尽くしているはずだが、一度高速域で旋回操作に入れた機体の反応は、ロールには敏感に、ピッチ方向に鈍感になる。タグサリはその状態に陥っていた。まずい、イライは

ゴーグルの下で目をしかめた。タグサリ機を追う。一瞬見上げた空に、敵機のシルエットが見えた。敵機はループの頂点から急降下に移行していた。逆落としだ、来る。
「タグサリ、ブレイク、ブレイク。右だ、逃げろ」
無線スイッチを操作する余裕もないのか、耳にはタグサリの激しい息遣いが届く。敵機が狙っているのは間違いない、タグサリだ。イライは急旋回、速度を失うのも承知でタグサリ機の援護に入る。緩降下で高度を速度に変換する。
「イライ！」
タグサリが叫んだ。同時に曳光弾の軌跡が空から降ってくる。冬の初めの霰か、さもなければ舞い落ちる打ち上げ花火だ。次に見えたのは、紅蓮の炎だった。イライは背筋を一適、汗が流れたのを感じた。やられた。
「タグサリ！」
応答がない。イライは機体を傾ける。黒煙、そして炎。タグサリ機の左主翼の半分以上が失われていた。左垂直尾翼もない。敵機の砲弾はタグサリ機のちょうど左肩あたりから入り、右脇腹へ抜けた格好だった。派手に火を吹いているがプロペラは回っている。エンジンはまだ生きている。しかし、あれではエンジン本体への被弾は間違いなかった。
「大尉、イライ、ダメだ、機体がいうことを聞かない」
雑音がひどい。無線装置かアンテナも損傷したようだ。が、タグサリもまだ生きている。
「あきらめろ、まだ来る。ベイルアウトだ、タグサリ」
「脱出する、ダメだ！」
敵機がタグサリ機の黒煙を撒き散らすように通過する。速い。猛烈な速度だ。急旋回をしないまま、飛び去る。敵の戦闘機は塗装を省いているのか、シルバーの地肌に青空を映していた。それがイライの目に映えた。イライは奴の航跡を追うようにして機銃を撃つ。短く、一度、二度。曳光弾が敵機を追うが、当たらない。もちろん、

イライも当たると思って撃ったわけではなかった。イライはメーデーを打電した。

「タグサリ」

見ると、タグサリは緊急脱出ハンドルを引いたようだった。キャノピーレールから白煙が上がった。が、プロペラが飛ばない。機体後部にプロペラが配置されているＧＣ－８は、機体を捨てて脱出しても、回転するプロペラで乗員が殺される。緊急脱出ハンドルを引くとまずキャノピーロックが爆破解除され、次に、プロペラが爆散される。そして火薬の仕込まれた座席が機体を離れる。火薬の量は多くないが、手作業でキャノピーを開けて脱出するよりは、乗員の生存率は高くなる。ほんの数メートルでも座席ごと機体から離れられればだ。イライはタグサリ機のキャノピーが飛ぶのまでは見えた。が、座席が飛んだかどうかはわからなかった。敵機が旋回を始め、イライ機に向かってきたからだ。

（クソ）

胸の中で毒づく。口に出すほどの余裕はなかった。敵機は速度を保ったままゆるやかに旋回を続けていたからだ。急旋回をしないというのも情報どおりだな、そんなことも思った。敵機の旋回が終わる前にイライはスロットルを全開、エンジンが焼け付けと言わんばかりに速力を上げた。過給圧計の針が最大値のあたりで震えている。オーバーシュートを考慮しても余裕を持たせた過給圧だが、エンジンの圧縮比はそのために低い。整備員の精緻なメンテナンスを信じ、最大出力を維持する。対気速度は理論上の最高速まで届かない。最新鋭の名が鳴く。十八気筒の大出力エンジンは最大過給圧で悲鳴を上げる。最高速を出すには空気が濃すぎる。高度が低いのだ。じりじりとする胸中は焦りか。墜とされるのが恐いわけではない。きっと墜とされても屈辱を感じるだけだ。それが耐えられない。地平線が水平線にワイプする。海岸線が見えてくる。海に出てしまえばいい。僚機被弾、敵機一機撃墜の情報はすでに打電した。メーデーを受信した基地から友軍機が上がってくるはずだ。海に出てしまえば、

そう、海まで行けば奴らも追ってはこないだろう。全速力だ。がんばれ、ポンコツの最新鋭機。

逃げる？

そう、逃げるのさ。生き残ったほうの勝ちだ。相手を低空に引きずり下ろし、ドッグファイトに持ち込めば撃墜できるかもしれないが、最初の一機を墜とせたのは天佑か、あるいは相手が間抜けだったからだ。イライは謙虚だった。だから生き残ってこられたんだ。奇襲は一度しか通用しない。あの敵機の急上昇を見たあとで、イライの戦意は喪失していた。同じことをこの戦闘機でやれば上昇途中で失速する。自転車でモーターサイクルに勝負を挑むか？　挑まないだろう。

捨てるだけの高度は持っていた。主翼が抵抗にならない程度に機首を下げ、加速する。全身が座席からすっと浮くような、主翼の負荷が最低レベルまで落ちた姿勢を意識する。瞬発力ではこちらが上だ。そう信じる。増槽を捨てた機体は抵抗を減らしており、操縦桿は重い。対気速度計を見なくても、機体がほぼ出せる限りの最高速に到達したことを知る。この高度ではこの速度が限界だ。高度を捨てたのは失敗だったかもしれないと悔やんでみたが、もう下手な機動は自殺行為だった。往路に見たサイロが猛烈な速度で過ぎていく。国道を越える。振り向くな。バックミラーに敵機は見えなかった。グラブの中が汗でいっぱいだ。全身が緊張している。恐怖はなかった。屈辱を感じるだけだ。

海に出た。眼下に波頭と漁船。初めて振り向いた。敵の姿はなかった。ただ、タグサリが墜ちた黒煙が、ずっと遠くに見えていた。

涙など出るはずもない。

14

エプロンをカエデの葉が一枚、肩をすくませるほどに冷たい風に乗って、カラカラと転がっていった。紅葉を通りこし、葉はすっかり枯れ色で、季節がすでに移ろいで、あとは化粧を、そう、雪化粧を待つだけになっていることを悟らせた。

「初めまして、じゃなかったな」

もう少しましな言葉があったはずだ。そう思ったときには、すでに言葉は相手に命中しているものだ。イライは自分の顔が笑っているのか、怒っているのか、無表情なのかわからなかった。つとめて無表情を装ったつもりだった。けれどここには鏡がなかった。

「ここにいるって、知っていた」

ユウは目を伏せ、言った。新鋭機のウィングマンが無線を通じてこちらに聞かせた声音とは違っていた。

「いつからだ」

「ずっと前」

イライはその場にとどまっていた。動けなかった。影だけが伸びていく。

「誰から聞いた」

「聞いたんじゃなくて、知っていたんだ」

少年のような声音。イライの記憶にある彼女の声は、もっと幼い。

「調べたのか。俺の居場所を」

イライは落日に目を細めた。空気が濃いに違いない。ユウが歩み寄り、イライに並んだ。

「調べなくても、耳には入ったよ」

「俺のことがか」

ユウを向かず、イライは言う。ほとんど呟きだった。

「ここに来て、わかったことがある」

ユウが言う。

「何だ」
「海峡を越えて、こっちに来たら、空気が違った」
「寒いか」
イライの言葉に、ユウは小さく笑ってみせた。その笑みが驚くほどに子供のようで、イライは胸の内のどこかを、彫刻刀かなにかでえぐられたような痛みを感ずる。
「確かに寒いけど」
「もうすぐ冬だ」
「もう冬だよ」
イライの右手が煙草を探っていた。けれど、飛行場地区は禁煙だ。手持ち無沙汰になった右手がポケットに居場所を見つける。
「季節の話じゃない。ここに来て、確かに戦争をやってるんだって実感が湧いた」
ユウは平淡に言うと、その場にうずくまるようにしてしゃがんだ。彼女は飛行服をまとっていた。階級章は少尉だった。イライはとりたてて驚かない。パイロットはみな士官だったし、最新鋭戦闘機のパイロットが少尉以下のはずがなかったからだ。けれど、と思う。彼女が自分の階級を追い越す日がきっと来る、と。生きていれば。
「お前がパイロットになっているとは、俺は知らなかった」
だんだん息が詰まってくる。高度二万フィート上空で、酸素ビンがすっからかんになったかのようだ。頭の回転も鈍る。
「あなたが、パイロットだから、そういうのは答えにならないかな」
「ならないね」
「そう」
ユウはうずくまったまま、ふと見ればカエデの葉をもてあそんでいた。飛行服を脱ぎ、そしてここが基地のエプロンでなかったら、彼女を誰が戦闘機のパイロットだと思うだろう。
「俺を探していたのか」
「言ってるじゃないか。探す必要なんかなかった」
「ではなぜここへ来た」

「ＧＤＢのパイロットだから」
「偶然、と言いたいのか」
「偶然でなければ、必然かも」
「お前がそんな言い回しをするようになるなんてな」
「あなたの頭の中で、きっと私はまだ十三歳なんだね」
言うとユウはイライを見上げる。目が恐ろしいほどに澄んでいる。それはパイロットたち共通の目だ。どこまでも澄んでいる。昼に星を数えるというのも、あながち嘘ではない。パイロットを生かすのも殺すのも、最終的には目だからだ。
「止められなかったのか」
「母に？」
「健在なのか」
「活版所でまだがんばってる」
「そうか」
「止められなんかしなかったよ。……パイロットは丘陵がいいから」
「そうか」
ユウが育った町は、海峡を越え、さらに夜行特急で半日以上かけた先にある。イライにとっての故郷でもある町だ。田園とあぜ道、道祖神に丘陵、錆びた鉄橋に湿地帯、ちびた家内制手工業の工場が立ち並ぶ小都市。自分が敵爆撃機のパイロットだとしても、爆弾をもったいないと思うほどにありふれ、何の価値もない町だ。ユウの母は、まだあの活版所で活字を拾っているのか。少し意外な気がした。時間が、海峡の向こうとこちら側では流れが違うのかもしれない。そんなはずもないが。
「ここは、最前線なんだね」
しゃがみこんだまま、ユウ。
「そう感じるのか」
「ミサゴを見たのは初めてだった」
「俺は二度目だ」
「緩衝地帯に近いから？」

「緩衝地帯じゃない。あれは中立地域だ」
「どう違う？」
「あそこに住んでるやつらは、どっちつかずなのさ」
「高射砲や敵の基地があっても？」
「そうだ。大人の事情だ」
「わからないよ」
「わからなくていい。ただ、敵の戦闘機が飛んでいれば、それを撃ち墜とせばいい。それが俺の仕事だ」
「空を飛ぶのが仕事じゃなくて？」
「両方だ」
いつまで会話を続ける気なのか。イライはやや疲れていた。何年振りかの会話だった。もはや共通の話題など、活版所のあのインクが染み付いた床のことくらいしかないのかもしれない。ユウもあそこでアルバイトをしていた時期があった。小さな手で活字を拾い、並べ、そして帰り道にサイダーを一本買って飲むのが、彼女に許されたささやかな褒美だった。あれはいつのことか。考えてみれば、目の前にいるユウが、いまいったいいくつなのかをイライは知らない。
「お前はなぜパイロットになった。俺は知らなかった。お前がパイロットになっているなんて」
「飛びたかったから」
間髪をいれず、ユウは答えた。あまりにも真っ当で、そして抽象的な返答だった。
「なぜ戦闘機なんだ」
「一人で飛べるから」
「あのヨノイとかいう男と飛んでいるじゃないか」
「それでも、飛んでいる間は一人でいられる」
イライはそれを聞いて、声を漏らさないよう努めつつ笑った。面白い答えだ。
「怖くはないのか」

「なにが？」
「敵。……あるいは飛ぶこと」
「敵は……、怖い……というより、邪魔、かな」
しゃがんだままのユウに、イライは視線を向ける。こいつは驚いた。
「邪魔？」
「一人で飛べなくなるから」
「道理かな」
「さあ」
ユウはいまだ、カエデの葉をいじっていた。それにしても小柄だ。Gには強いかもしれない。小柄な割りに首が太い。ユウはすっかりパイロットの身体を持っている。
「俺に何か話があるのか」
イライが言うと、ユウは意外そうに顔を上げた。
「ないのか」
「ずっとさっきから話してる」
「そうか、そうだ」
伸びきった影が、すっと消えた。日が暮れた。滑走路にはすでに誘導灯が点り、背景の森林は黒々とその量感をたたえていた。
「やっぱり寒い」
ユウはしゃがんだ格好のまま、両腕で身体を抱きしめた。
「慣れる。飛んでると思えばいい」
「コクピットにはヒーターがある」
「ハチクマのコクピットはそんなに快適なのか」
「その名前、好きじゃない」
憮然とした表情でつぶやくユウに、イライは苦笑がこみ上げる。
「誰がつけたのか。確かにセンスがない」
イライは応える。
「名前なんて、どうでもいい」
ぽつりとユウはつぶやく。驚くほどに冷たい声音で。イライは瞬

間、彼女が何を言わんとしているのか、肌で感じたような気がした。
「何かが存在している限り、きっと名前が必要なんだ」
ユウは自答するように言った。イライは何も応えなかった。
「戦闘機とか、滑走路とか、森とか、鉄橋とか」
両腕で身体を抱きしめたまま、ユウはつぶやく。およそ新鋭機のパイロットにそぐわない、頼りなく寄る辺ない姿に見えた。
「そうだな。呼び名がなければ、識別できない」
「自分とほかを、分け隔てるために？」
イライは応えなかった。
「大尉」
それが自分を呼んだのだと気づくのに、上空でなら致命傷になるほどの時間を要した。
「コールサインは誰が決める？」
「飛行班長」
「空では、お互い、名前で呼び合う？」
「無線が使えれば」
「そう」
「それがどうしたんだ」
イライの問いに、ユウは応えなかった。
しばらく、静かだった。
日はすっかり山地の向こう側へ沈んでしまい、鳥の声も聞こえない。出撃機も帰還する機もなく、滑走路を隔てた区画に、大型の輸送機が二機、羽を休めているのが見えた。擬装網をかけるなどということもせず、野ざらしだ。上層部も、よもやここまで敵の爆撃機が飛来するとは考えていないようだ。あるいはもしかすると、信じられないほどの鈍感さがそうさせるのかもしれない。中立地域での散発的空中戦が、短期間に二度あったことを、パイロットほどに重要視していないのかもしれない。もっとも、それについて、危機感をあおるような報告書をイライがしたためたわけでもない。イライたち戦闘機パイロットにとって、空中戦は日常だったからだ。何を

している？　戦争をしているんだ。
「航空学校出だそうだな」
俺と同じに、という言葉は飲み込んだ。
「大学に行く余裕はなかったから。それに、人より長く飛んでいられる。上級中学を出て、すぐ」
「飛行特性があったのか」
「知らない」
ユウは、本当に知らない、そんな風に、抱きしめていた両腕を解き、足元のカエデの葉を拾う。
「飛ぶのは好き」
「一人でか」
ユウはカエデの葉を手のひらに載せ、それをくしゃくしゃに砕いた。乾いていた。今朝までの雨はどうしたのか。
「ハチクマ以外に、何に乗ったことがある」
イライが問うと、ユウはころころと笑った。
「何がおかしい」
「ヨノイ大尉と同じことを訊いた」
「それがおかしいのか」
「書類を見れば、全部わかるのに。みんな、どうして無駄なことをするのか、私にはわからない」
ユウは鼻白んだようだった。無駄なことをする。ユウの平淡な物言いは、けれどさほど不快に感じなかった。あの馴れ馴れしい態度のヨノイのほうが、イライには合わない気がした。
「大尉」
ユウ。
「ノスリ以外に、何に乗ったことがある？」
「俺は、ノスリ以外に乗ったことがない」
「ノスリは、手ごわい」
「俺は、お前に撃墜された」
「あんなの、ただのデモンストレーションだよ。勝って当たり前だ

った。もっと限定された空域で、もう少し高度が低かったら、ノスリには勝てない。きっと。私はノスリには乗ったことはないけど、見ててわかる。ノスリは風車みたいに回る」
「戦うステージが違うか」
「離着陸時を狙われたら、ＧＤＢはおしまい」
「おしまい？」
「エンジンの反応が、きっとノスリからでは想像もできないくらいに鈍いから」
「そんなことを言ってもいいのか」
「なにが」
「それは、お前の戦闘機の弱点だろう」
「離着陸時に狙われるようになったら、この戦争は、もう負けなんでしょ」
「それは、そうだ」
「だったら、関係ないよ」
「そうか」
イライが言うと、ユウは立ち上がった。小柄なユウは、立ち上がってもやはり小柄だった。
「帰る」
一言言うと、ユウはイライの反応を待たず、くるりときびすを返し、エプロンを出て行った。
別れの言葉もなく、イライはエプロンに一人になった。
日暮れた飛行場地区は、きっと本来の気温以上に冷え込む。
静かだった。
時折、工具か何かがうなりを上げていた。ハスミの機体を修復している音かもしれない。
自分の機体はどうなったろう。
イライは両手をポケットに突っ込み、煙草を喫いたいと思った。

15

結局イライのノスリがある程度元通りになるのには、さらに十日を要した。その間イライは一度として飛ばなかった。この基地ではパイロットが乗る戦闘機は固定されている。だから、自分の乗機が故障あるいは定期点検に出ている期間、パイロットは飛べない。時に複座型の戦闘機の後席に乗り込み、若手パイロットのしなんやくに駆り出されることもあったが、まれだった。イライが所属する基地は最前線であり、まだ二機編隊長資格も取れないようなパイロットは、まず配属されてこなかった。配属されたとして、イライたちベテランが指南する前に、敵機が撃墜してしまうだろう。

その日、誘導路は溶けた雪で黒々としていた。雑木林はすべて葉を落し、残っているのは針葉樹だけだった。草地には雪がうっすらと載り、吐く息は白い。イライは宿舎から二十分かけて掩体まで歩いた。いつもの場所だ。いつも、イライの戦闘機が格納されるシェルターだ。そこにはホガリがいた。久しぶりに顔を合わせた。

「予想外に重傷だった」

ホガリが口を開く。吐く息は白い。

「どこが」

「左主翼に被弾しただろう。あれが予想外に傷が深くてね。それに、あんたは主翼にしわが寄るほどの無茶をした」

「垂直尾翼よりもか」

「垂直尾翼は交換した。それで済んだ。主翼を交換するには、ここの設備では無理だからな」

「主翼を交換するほどの傷だったのか。だったら交換してくれ。気分が悪い」

「一枚翼だからそう簡単にはいかない。共食い整備をするわけにも行かないし、大丈夫だ。そこまでは重傷ではなかった。外板がめくれて、中の桁に損傷があった。それを治すのに時間がかかったのさ」

ホガリはこざっぱりとしたツナギを着ていた。彼が油にまみれた格好をしている姿を見たことがない。もっとも、イライがホガリたち整備員の作業過程を見る機会がほとんどないから、彼らはパイロットと会うときは、よそ行きの格好をしているだけなのかもしれない。
「まあ、表向きにはそういうことだ」
「表向きってどういうことだ」
「あんたになら言ってもいいかな」
もったいをつけるような口調だが、ホガリの顔はいつもと変わらず、音楽堂の入り口においてある彫刻のような表情をしていた。つまり、彫り込んだような作り物の微笑だ。
「なんだ」
「戦闘機が補充される」
「ここにか。何機だ」
「向こう側、ほら、空いてる掩体がかなりあるだろう。あれを埋めるくらいにだ」
いつかの夕食を思い出す。ヨノイが言っていたことは本当だったか。
「一個飛行隊分、十八機。くらいかな」
「全部新型か」
「ＧＤＢも来る。大半は?型だ。レシプロ機の数を、タービン機が上回るというわけだ。そのための準備でね。整備員が交代で教育にぶち込まれている。それでこいつの修理に時間を要したのさ」
「いよいよ俺が飛ぶ機会が減りそうだな」
「聞いていないのか」
「何を」
「機種転換の話を」
ホガリの言葉に、イライは顔をしかめる。
「今更俺にか。そんな話は聞いていない」
「まあ、俺も聞いていない」

「なんだ」
「あんたは？型で敵の新型を二機撃墜だ。押しも押されぬエースじゃないか。英雄だよ」
そういうホガリの口調はまるで真剣みがなく、けれど嘲笑する向きもなかった。淡々としていた。まるであたりを漂う初冬の空気のようだ。
「相手が間抜けだったんだ」
「ハスミはしばらく飛べないぞ。あれは、機体の損傷よりもパイロットのダメージの方がでかい。もっとも、機体は新しく造った方が早いかもしれないが」
ハスミはあれから医務官の診察を受け、基地の外の病院に入院してしまった。前線基地とはいえ、ここには空軍病院並みの設備がなかったからだ。
「身体よりも、精神的にね。けれど、一緒に飛んだのがあんたでなければ、ハスミは墜とされていた」
「そうかね」
「謙遜は無意味だよ。二機のノスリでよく戦ったさ。しかもハスミの機体は戦う前から手負いだった」
「エンジンがぶっ壊れやがったからな。誰が担当だ」
「今となっては、どこが壊れていたのか、原因もわからない。機付はヤダだ。奴はここ一週間、げっそり痩せた。ハスミの機体は、あんたの機体とエンジンのロットが違う。アクチュエータの作動不良くさいが、いまとなってはわからん。それより、その状態で敵と遭遇して、帰ってこられたのが奇跡だ。あんたがいたからだ」
「敵を墜としたのは、ハチクマだ」
「最後はね。ＧＤＢは最高速に到達すれば無敵に近いが、ノスリのようには行かないのさ。瞬発力が決定的に欠けている。ハスミはあんたが助けたんだ」
「そうかね」
「そうだ」

言うだけ言うと、ホガリは「煙草を喫わないか」とイライを掩体の外に連れ出した。飛行場地区は禁煙だが、ホガリはときおり、掩体の外の猫の額ほどの空き地を見つけ、そこで煙草を喫っていた。コーラの赤い空き缶を灰皿代わりに、掩体にもたれ、火をつけた。
「GDBのパイロット、知り合いだそうじゃないか」
二口ほど無言で喫ったあと、ホガリが言う。誰のことかは言外に目が語っていた。
「どこまでの知り合いかも、あんたは知ってそうな気配だな」
イライも外套のポケットから煙草を取り出し、喫った。禁煙なのはわかっている。けれど、咎める者はいないし、ガソリンの匂いもしない。オイルの匂いもしない。ひたすら寒かった。
「血縁者だってことはもう知ってる。俺だけじゃない。みんな知ってる」
「みんなって誰だ」
「みんなだ、みんな」
「パイロットみんなか」
「基地中みんなだ」
イライは身体を折り曲げ、吹き付ける風から身体を守る。
「だからなんなんだ」
「血は争えないものなんだな」
「そういうものか」
「さあ。俺には子供はいないからわからない。……あんた、一度も家族がいるなんて話をしなかったな」
「俺だけじゃない。あんた、ハスミに家族がいるかどうかを知っているか」
「知らない」
「俺もだ。だから、なんだっていう話だ」
ホガリは小さく笑う。しかし声がない。煙草を指先に挟み、「それにしても寒いな」とつぶやく。イライも同意する。
「それに、彼女は家族じゃない」

イライが言うと、ホガリはやや目を見開き、そしてまた笑った。
「家族の定義ってあるのか」
イライが言う。
「知らない。ただ、あのパイロットはあんたの娘だそうじゃないか。娘は家族じゃないのか」
「血縁はあるが、最後に顔を見たのがいつなのか覚えていない。まともに一緒に暮らしたこともない」
その通りだった。風が吹く。冷たい。冷たさよりも疼痛を感じる。空は雲量が増えている。
「一緒に飛べたじゃないか」
ホガリは空き缶に煙草をつぶし込み、顔をイライに向けず、言った。
「そうだな。……ハスミまで助けてもらったしな」
「そう思っているのか」
「ハスミをすんでのところで助けた新型戦闘機のパイロットが、たまたま彼女だっただけの話だ。それ以上の意味なんてない。そうじゃないのか」
だんだんと、イライは会話が面倒になっていた。それにしても寒い。仕上がった機体を見に来ただけなのに、なぜ身の上話をしなければならない。煙草を空き缶に放り込み、両手を外套のポケットに突っ込んだ。
「この話は、あまり愉快そうじゃないな」
ホガリが空き缶を拾い上げ、イライに背を向けた。
「わかっているならしないでくれ。それより、飛べるんだろうな」
「ガスを入れれば飛べる。が、戦闘は無理だ」
「なぜだ」
「ハーモニゼーションが終わってない」
「機銃を降ろしたのか」
「あんたは知らなくていいことだが、こいつは一度ほぼバラバラに分解されてる。とうぜん機銃も降ろす」

「どこからどこまでの部品を交換したんだ」
「修理報告書でも必要か」
「そんなものはいらない。あんたの口から聞きたい」
「さっき話したとおりだ。エンジンも降ろしたが、交換したわけじゃない。圧縮比も混合比も過給圧もなにもかも前と同じだ。ただ、スロットルワイヤは交換した。左主翼は交換こそしていないが新品同様だ。使える部品は流用したが」
「飛んでみないとわからないか」
「違いに気付くほど違うなら、俺に言ってくれ。が、今日は飛べない。飛行許可は俺が出すわけじゃない。むしろあんたがキリウやレンダに上申するんだな。大尉殿」
ホガリはもう掩体に戻り、灰皿代わりの空き缶を工具箱を収納しているスペースにしまい込むと、移動用のトーイングカーに乗り込んでいた。
「置いていくぞ。それとも歩いて戻るのか」
「置いていくならそれでいい。ここまで歩いてきたんだ」
「飛べないパイロットは哀れだな」
「あんたがさっさと修理をしてくれなかったからだ」
ホガリはトーイングカーのエンジンを派手な黒煙とともに始動させ、再度イライを誘った。イライは断り、ホガリはまた小さく笑った。声を上げたかどうかは、トーイングカーの排気音に紛れてわからなかった。おそらく無言だったろう。
「行くぞ。残るのは勝手にするがいいが、飛ぶなよ」
ホガリが言い、イライは了解と両手を上げて伝える。ディーゼルエンジンの排気煙をもうもうと吐き、ホガリは掩体から誘導路に出、去った。
イライはひとり、ポケットに手を突っ込んだまま、自分の戦闘機を見上げた。機体は整備に伴い、きっちり洗浄されていた。機関砲付近のススもない。そっと近より、機首に手を触れる。冷たかった。エンジンをかけられず、かけられたとしても、ガスが十分ではない。

飛べたとしても、機銃も撃てない。こいつはいまは戦闘機ではない。ただの飛行機だ。いや、飛行機の形をした機械だ。

イライは短く嘆息すると、掩体を出、重い防護扉を閉めると、すっかり曇り空になった天を仰ぎ、歩き出した。

町に出ようと思った。

宿舎から基地のゲートまでは遠い。外出するのを億劫に感じるほどに遠い。他のパイロットや整備員たちはモーターサイクルや自動車を使って基地を出る。けれど、イライはそのどちらも所有していない。イライが所有している機械は、左手首の航空時計と、あとは、なんだろう。少なくとも乗り物と呼べるものは所有していないし、所有したこともなかった。昔乗っていた自転車以外は。まさかホガリからトーイングカーを奪い取ってくるわけにはいかない。あれは公道を走るようにできてはいない。

イライはゲートを抜け、空を見上げた。爆音もなく、静かだった。鳥が飛んでいた。名前もわからず、音もせず。ゲートを抜けた道路は未舗装で、湿っているが幸いだ。夏場は埃がひどいのだ。ゲートには警衛の兵士が自動小銃を抱えて突っ立っていた。弾倉を装着しているが、弾が入っているのかどうかは知らない。イライは年に数回ある訓練以外で小銃はおろか拳銃すら撃たない。イライが撃つ物は、戦闘機についた対空機関砲だけだった。小銃を抱える兵士に一礼して、イライは未舗装の道を行く。ゲートからさほど遠くない場所にバスの停留所があった。そこを目指す。道の両脇の雑木林はすべて裸で、草地は枯れていた。初雪以来、本格的な冬の到来はまだだった。だが、雪がないと、いっそう寒さを感じるような気がする。色彩を失った地面は、寒々しいのだ、きっと。

バスがいつ来るのかを、イライはよく知らない。停留所の時刻表はさびだらけだった。航空時計を見ると、午前十時を少し回っていた。緯度が極端に高いこの地域で、太陽はゆったりと物憂げに木立の少し上でぼんやり考えごとをしているように見えた。バスの時間

まで、あと十五分ほどあるようだ。もし仮に、バスが時刻表どおりに来るのであれば。

戦闘機パイロットがバスを待つ。警衛の彼はフライトジャンパ姿のイライを見て、何を考えているのだろう。声をかけるつもりもなかったが、まだ年若い彼が抱える自動小銃はよく手入れが行き届いているようだった。プレス加工を多用した量産性に優れた銃で、イライが訓練で撃つときも、その癖のなさは扱いやすく気に入っていた。その銃を、警衛の彼は大事そうに抱えていた。弾倉に実弾が装填されているかどうかは関係ない。彼はきっと、ゲートを守ることが自分の使命だと疑っていないのだ。もしかすると、彼もまた純粋培養組の一人なのかもしれない。純粋培養組がパイロットなどの幹部だけとは限らない。彼らは今の時代、どこにでもいる。むしろ自分たちが旧世代なのだ。生きることに無理矢理意味を見いださなければ、バスに乗ることもできないような旧世代だ。非効率的で、あらゆる能力で劣った人種だ。イライはそう自分たちを認識していた。

基地で、パイロットたちの間で純粋培養組ではないのは、誰と誰か。墜ちたタグサリは違う。ハスミも違う。チナミやセムラも違う。彼らは同じく航空学校出身だ。高等中学を卒業して、適性検査と簡単な学力試験ののち、即座に操縦桿を握った。イライは思う。ユウは、彼女はどうなのか。彼女もまた航空学校出だと言った。出自からいって、彼女が純粋培養のはずがない。なぜなら、直系の自分が純粋培養ではないからだ。けれど、とイライは考える。チナミが言っていたではないか。ハチクマのウィングマンには、迷いがなかった、と。イライたち旧世代は、迷う。生きることに意義を見いだそうともがくように、迷う。迷う時間は短いが、まったく迷いがないのとは根本的に違う。ユウは、迷うのだろうか。あの日、ハスミの機体がトラブルを抱え、敵の戦闘機にいいように追い立てられたあの雨の日、迎撃に飛来したユウは、ためらいなく対空機関砲で敵機を粉々に撃墜してしまった。敵の戦闘機にもまた、パイロットという人間が乗っていることなど、まったく意に介さないような、そん

な撃ち方だった。敵の戦闘機のパイロットもまた、人生を持ち、それ相応の悩みと喜びと、そして殺意と敵意を抱く一個の人間だ。それを、ユウは迷いなく、メルクア・ポラリスＭＧ－４型二〇ミリ機関砲で粉々にした。撃墜されたパイロットは、自分に何が起きたのかもわからないまま、機体ごと粉々になったに違いない。ユウは、もしかしたら後天性の新世代なのかもしれない。イライはフライトジャンパのポケットをまさぐり、指先にブリキ缶でできたシガレットケースを掘り当てた。よく冷えていた。オイルライターとともに取り出したとき、バスが来た。タイミングとは、こういうものだ。

バスは運転手以外に乗客がなかった。イライは最後部座席に座った。けたたましいディーゼルエンジンが叫ぶ。それは戦闘機のエンジンのように洗練されてはいなかったが、あふれ出るような咆哮は、戦闘機のそれよりもずっと生き物のように思えた。派手に黒煙を吐き出し、走り出す。未舗装の路面は、揺れた。

バスは基地外周を巡る道路を進み、やがてあの真ん丸い沼地の、基地から見ると対岸を行く。空から見るよりもずっと大きい。どのような地形的作用でこの沼ができたのかはわからない。それにしてはまん丸だ。空から見ても、地上から眺めても、沼は円かった。水面は澄んでおり、時折水面がはねた。魚だ。食べられるのだろうか。そういえば、しばらく魚を食べていない。基地で出るのは正体不明の肉だけだ。どういうわけか魚が出ない。

沼の横を過ぎれば、車窓の左手に赤い鉄橋が見えてくる。コヤチダ本線の鉄橋だ。トラス構造で、空から見るより、やはり大きい。もし自分が対地攻撃を命じられたら、失敗のしようがないほどに立派で大きな構造物だった。コヤチダ本線から基地へ、軍用列車の支線が伸びているはずだが、ここから分岐は見えない。航空機用の燃料や食料などの物資は鉄道で輸送される。車窓からぼんやり鉄橋を眺めていると、ディーゼル機関車に牽かれた貨物列車が今まさに鉄橋にさしかかろうとしていた。ソラノ川の鉄橋で、イライが乗るバスもまた、並行する道路橋で川を渡る。貨物列車は有蓋車で、ディ

ーゼル機関車は重連だ。編成は長い。どこから来てどこへ向かうのかはわからない。こんなとき、イライは飛びたくなる。空からあの列車がどこへ向かうのか確かめたくなる。地図では、これから向かう町からさらに北へ、さらに緯度が上がった国境の付近に大きな町があるはずだ。これといった軍事目標がないため、イライたちが飛ぶことはあまりない。もちろんだから、敵機が飛来することもあまりない。もしかしたら、あの列車はその町へ向かうのかもしれない。

やがて、バスも橋にさしかかる。河口から十マイル、二十キロ近くさかのぼった場所だが、このあたりでもソラノ川の川幅は三キロ以上ある。厳冬期でも凍結しない。水深があることと、河口に近い割には流れが速いためだと、誰かに聞いた。だから、これだけの川幅がありながら、水上輸送がほとんど発達していない。そのへんの話は、もしかするとケイあたりから聞いたのかもしれないが、覚えていない。橋にさしかかると、ソラノ川の広さがよくわかる。飛んでいるときより、ずっと。

貨物列車が鉄橋を走る轟音が、窓を閉め切ったバスの中までよく通る。赤いトラス構造の鉄橋と、濃いグレーの機関車、そしてブラウンの貨物車。いま攻撃機に襲われたらひとたまりもないな、などと考えているうち、バスは橋を渡りきってしまった。線路はまた木立の向こうに隠れてしまった。バスはそこからいくつかの停留所と集落を過ぎ、国道に合流する。国道といっても、簡易舗装が施された二車線の道路で、通る自動車も少なかった。道路脇の畑で農夫が突っ立っていた。収穫の過ぎた畑で彼は何を思っているのだろう。彼は空を見上げていた。イライも倣って、バスの中で彼が見上げる空を向いてみた。澄んだ青空に、機影が見えた。特徴のある推進式のプロペラ、前翼、ノスリだ。アプローチに入った機体ではない。ギヤが降りていない。離陸した機体だ。二機。機番は見えない。増槽を左右に一個ずつ抱いているのが見えたが、それだけだった。爆装しているわけでもなく、そもそもノスリの？型は迎撃戦闘機だから、めったに爆装をしない。誰と誰が飛んだのだろう。思ううち、

さらに二機のノスリが追って飛んでいく。都合四機、上がったようだ。今日のイライは休日だった。だから飛行割りを見てこなかった。そして、待っても離陸した四機のノスリ以外には戦闘機は飛んでこない。今日はハチクマも休日のようだ。イライは再びバスのシートに深く座った。バスの中は暖房が効いていて、暖かかった。町のそこここには雪が残っており、気象隊の予報では、今週末から本格的に雪になるだろうということだった。いよいよ冬だ。

バスはようやく、町のターミナルに到着する。市街電車が乗客を待っており、そこはコヤチダ本線の駅もある。町の名はナヨシといった。だから、イライたちが勤務する基地の正式名称は、「第七空軍第二戦闘航空団ナヨシ基地」というわけだ。そういえば、かの警衛兵士が立っていたゲートに、基地の銘が記されていたはずだが、どこにあったのか覚えていない。そんなものだ。イライがかつて所属していた第五空軍の基地にしても、もう記憶が曖昧だ。旧世代の特権だ。都合の悪いことは忘れる。

バスを降り、市街電車の線路を突っ切り、石造りの建物が目立つ街路を歩く。イライは花屋を探していた。ケイから聞いた。ナヨシの駅の近くに、立派な、でもちょっと変わった花屋さんがあるから、行ってみれば。カタバミの花がまだあるみたいだから。

道ばたや草原で咲いている黄色い花がカタバミという名を持っていることを、イライはハスミから聞いた。ついでに花言葉まで聞いた。心の輝き。それがカタバミの花言葉だそうだ。ハスミがそう言ったとき、イライは笑うこともできなかった。心が輝くのか。では俺たちは、輝くべき心をいくつ空に散らしたのだろうかと。けれどそのときは口には出さなかった。今日は、ハスミの見舞いに行くつもりだった。手ぶらでは申し訳ない。スケッチブックでも買っていこうと思ったが、あいにく、イライはナヨシの町で画材屋を知らない。そして、ハスミが収容された病院のベッドで絵を描ける状態なのかもしれない。だったらせめて輝いてくれ。そこでＰＸのケイに聞いた。町に花屋はあるのかと。それはどうやら、町に肉屋や八百

屋があるのかと聞くくらいに間抜けな質問だったらしく、無愛想にコーラを買った釣り銭をレシートにくるむようにして放り投げ、そしてイライに告げたのだ。ナヨシの駅前に花屋があるから、行ってみたらと。カタバミの花、きっとまだ置いてあるから。なぜそんなことを知っているのか、と、イライは聞いた。その花屋の在庫状況までどうして知っているのかと。するとケイは答えた。私の家だから、と。

カタバミの花が、花屋ではいくらで売買されているのか、イライは知らない。野原で咲いているくらいだから、およそ高価とは思えない。そして、負傷したパイロットへの見舞いの品にカタバミの花がふさわしいのかどうかもわからない。が、ハスミへの見舞いの品に、スケッチブック以外に思い当たるものがなかったのだから、それでいいような気がした。イライは横断歩道を渡り、その花屋を探した。

花屋は簡単に見つかった。ナヨシの駅から駅前通りを一本西側に入った角に建っていて、年季の入った煉瓦積みの建物だった。フライトジャンパ姿のまま、イライはさほど広くない間口の入り口から店内へ。イライは草花に詳しくない。いま探している花はカタバミで、他の花の名前はわからない。左肘で引っかけそうになった花弁の大きな白い花がなんという名前なのかもわからない。だから、カウンターの奥で器用にハサミで名前もわからない花の茎をカットしている女性に声をかけた。声をかけた女性は顔を上げ、イライを向く。なるほど、とイライは思った。ケイに似ているのだ。ケイがあのまま二十年ほど年を経れば、目の前の女性になる。そんな顔をしていた。

「カタバミを、探しています」

イライは女性からわずかに目線をはずした。女性はとりわけ、目がケイとよく似ていた。遺伝子とはこういうものか。

「カタバミ？」

オウム返しに女性は言った。左手に持っていたハサミをカウンタ

ーに置いて。そうか、女性は左利きか。
「黄色い、道ばたで見かける、あの花」
イライが言うと、女性はカウンターを離れて、所狭しと並ぶ花々の間を縫うように歩く。よくもまあ、陳列してある草花を引っかけて倒さないものだと思う。プロだと感じだ。意味もなく。格納庫でのホガリやヌノベの動きを思い出したからだ。一見乱雑そうに見える工具箱や、血管のように配管や配線が走り回るエンジンカウルの中も、彼らにとっては見知ったものなのだ。カウンターを離れた彼女にして、店内は彼女の仕事場だ。どこに何があるのかは把握しているのだろう。店内は彼女の他に二人の女性が作業をしていた。流行っているようだ。田舎町とはいえ、本線の駅前近くに店を構えているわけだ、それなりの実力があるということか。やがて女性は、まるで二十ミリ機関砲弾の弾帯を抱えるように、ようするに大事そうにして、黄色い花と緑の鮮やかな束を持って現れた。
「今どきね、こんな花があるなんてね。もうちょっと前なら、そのへんにいっぱい咲いてるのにね」
彼女の口調もどこか娘のケイに似ているような気がした。けれど、イライは女性に、あなたの娘さんと知り合いなんですよ、そんな言葉は発しないことにした。あるいは今日、イライがここを訪ねることを、娘のケイが伝えているのかもしれない。どちらでもいいと思った。フライトジャンパ姿の客などめずらしくないはずがない。
「花束に？」
女性が訊く。カタバミの花束。おそらくイライもそんな花束を聞いたことがない。
「見舞いでね」
「なるほどね」
女性は手際よくカタバミの花を揃え、専用のハサミで茎を切る。パチンパチンと小気味よい音がする。手入れの行き届いた道具だけが奏でる音だ。それは、整備が行き届いた戦闘機に乗ったときも聞こえる音に似ている。ラダーペダルを動かしたとき。操縦桿を左右

に倒し、エルロンが機敏に反応してくれたとき。
「パイロット？」
カタバミはまだ花束と呼べる状態ではなかった。茎の長さを揃え、まとめ上げ、花弁の位置を調節している段階だ。可憐な花だとイライは思った。だから、女性が手元を向いたまま、イライに向かって質問をしたことに気付くのに、数瞬遅れた。空中戦ならば、命取りになるくらいの時間。
「あなた、パイロットでしょ」
「ええ。見てのとおりで」
「うちの店、どこで知ったの」
「なぜですか」
「パイロットが花束を買うなんて、いままでここでずいぶん長いこと店を開いているけど、ほとんど聞いたことがない」
「そうですか。パイロットもたまには花束を買ってもいいと思いませんか」
「お見舞いと言ったかしら」
「ええ。同僚が入院しまして」
「あなた、戦闘機乗り？」
「そんなところです」
「娘はいないよ」
「は？」
「ケイに聞いたんでしょう、うちのことは」
女性はまだ顔を上げない。ぶっきらぼうな話し方もケイにそっくりだ。
「わかりますか」
「パイロットが花を買いに来るときは、うちに来るからさ」
「さっきは、パイロットが花束を買いに来たことがないと」
「例外もたまにはあるのさ」
話しているうちも、女性の手は止まらない。やがて、野花であるはずのカタバミが、立派な花束に化けた。

「いくら？」
ラッピングされた花束がカウンターにできあがった。イライはポケットから財布をまさぐる。
「カタバミに値段が付くのかね」
「でも、今はもう冬だ」
「どこから見つけてきたのか。カタバミの花束なんてね、わたしは初めて作ったよ」
「そうですか」
「まあそういうことにね、しておいて。いくら払えるんだい」
「いくらなんですか」
「娘がいつも世話になってるそうだから」
女性は言うと、傍らにディスプレイされている大輪の花束のプライスの、ほぼ三分の一ほどの価格を提示した。
「安いのか高いのかわからない。俺はこういう買い物をしたことがない」
「高い買い物だと思っておくんだね」
女性は花束をイライに手渡すと、高笑いした。気持ちのいい笑い方だった。そこだけ、娘のケイと違っていた。ケイもやがてはこんな屈託のない笑い方をするのだろうか。
店を出た。煙草を喫いたいと思ったが、舗道はよく清められていた。煙草を吸えるような雰囲気ではなかった。だから花束を抱えたまま、市街電車の停留所へ向かった。ハスミが収容された病院は、ナヨシの駅前から発着する市街電車に乗り、終点近くまで走った場所にある、とのことだった。飛行隊長のキリウから聞いた。
（負傷パイロットの見舞いか）
キリウは相変わらず何物かわからない書類と格闘していた。
（いけませんか）
（あんたにそういう趣味があるとは思わなかった）
（趣味じゃない。負傷した同僚の見舞いに行くのがいけないんですかね）

（そんなことは言ってない。前代未聞だと言いたいだけだ）
（俺が見舞いに行くことが？）
（パイロットが、同僚の見舞いに行くことがだ）
（それは知らなかった）
（負傷で済んでよかった。撃たれたら帰ってこないパイロットの方が多い）
キリウはそれだけ言うと、ハスミが収容された病院の名と場所を示してくれた。軍の関連施設ではなかった。基地以外、この近隣に軍の関連施設はない。レーダーサイトや通信所以外には。
（その格好で行くつもりか）
退室しようとしたイライを、キリウが呼び止めた。イライは飛行服にフライトジャンパを羽織っただけだった。
（いけませんか）
（正装しろとは言わない。あんたのその格好は中途半端すぎる）
（礼装に着替えますか）
（わたしの言葉を聞いていなかったのか。中途半端だと言っただけだ）
（では、考えます）
結局イライは飛行服を脱ぎ、平服にフライトジャンパを着込んで基地を出た。制服に着替えた方がよかったのかもしれない。けれど、イライは着るべき制服にしばらくアイロンすらかけていないことに思い当たる。これでいい。フライトジャンパには飛行隊を示すパッチとウィングマーク、それ以外には何もついていない。階級章も何も。もし市街戦に巻き込まれても、自分が空軍の人間だと証明するものは、ポケットの奥深くにしまってある身分証明書だけだ。それだけあれば十分だろう。町に出て階級がものを言うとは思えなかった。
電停では、市民が少なからず列を作って電車を待っていた。人々は厚い外套に身を包んでいた。すっかり装いだけは冬だった。西の空をふと向いてみる。まだ空は晴れていたが、真っ白い雲がゆった

りと流れてきていた。雪雲だ、そう思った。今夜あたり、いや、早ければ夕方にでも雪になるかもしれない。気象隊の予想はよく外れる。

イライはフライトジャンパのジッパをいちばん上までしめると、花屋の女性が丹誠込めてくれた花束を抱えて、電車を待った。

フライトジャンパに花束という組み合わせがよほど奇妙なのか、それともパイロットという人種がこの町ではめずらしいのか、電停で列に紛れたイライは、乗客の目が自分をちらちら何度も向くのを知った。ふだんほとんど町に出ないからなおさら、自分たちパイロットの位置がわからない。

電車は空いていて、イライは花束を抱えたまま席に着いた。石畳に線路を敷いた通りを、くたびれた電車は、イライにとっては異質な速度で進む。イライが知っている速度は、戦闘機の離着陸の速度か、あるいは歩いているか自転車に乗っているか、そのどれかだ。空に上がってしまうと、性能諸元どおりの速度が出ていても、それを感じない。唯一感じるのは、雲を突き抜けるときくらいだ。だから、この電車のいかんともしがたい中途半端な速度が異質だった。のべつ失速しているような気がする。

電車の中を見ると、冬の装いに身を固めた自分と同じくらいの歳とおぼしき中年夫婦、中等学生程度の幼い顔立ちの少女が二人、大学生風の若い男が一人、そして自分。大学生風の男を見て、ふと、この町に大学があったのかどうかイライは思う。あったかもしれない。わからない。そういえば、ＰＸの彼女は学生だったはずだ。では大学があるのだろう。

前任地の第五空軍の基地からこの第七空軍へ赴任してからもう何年もたつというのに、イライはその活動を基地の中に限定してきた。基地の中でだいたいの用はすべて済んでしまうからだ。衣食住のすべてが基地の中で完結してしまう。だからイライは基地の外に出る習慣がない。同僚たち、中でも若いパイロットは積極的に外へ出る。

なにかと理由をつけて、町へ出る。この基地は、ナヨシという比較的規模のある町が隣接している分、たとえばさらに辺境の前線基地と比較すれば環境はいいといえる。
前に所属した第五空軍の基地は、本土から離れた島にあった。滑走路は一面、時折海軍の艦載機が降り立つこともある、それこそ辺境の基地だった。配備されていた戦闘機は、十八機。敵と遭遇する確率はいまとたいして変わらないかもしれない。が、あの島には基地とそれに関連する施設以外に町と呼べるような場所がなかった。だからパイロットや整備員たちからは二度と赴任したくない基地だという評判を、ここに来て知った。けれどあのころもイライは基地の中ですべてを完結していた。同僚の中には、唯一市街地らしきものを作っていた港町へ、休日ごとに出かける者もいた。あいつは、なんという名前だったろう。確か、……海軍の空母の直掩に出たとき、撃墜された奴だ。悪い奴じゃなかった。港へ出かけては、魚介類をモーターサイクルの荷台いっぱいに積んで帰って来、パイロットたちに振る舞ってくれた。奴がくれたエビはうまかった。
あのころ、イライはノスリの？型に乗っていた。二段式スーパーチャージャーを装備した機体で、？型ほど高々度性能はよくなかったが、瞬発力は？型より優れていた。あの日、イライたちは十二機の戦闘機で編隊を組み、空母を護衛する任務にあった。もちろん空母からも艦載機が二十機ほど飛んできた。艦載機はサシバの愛称がついた単発推進式の戦闘機で、そして敵は南からやってきた。空気が濃かった。そして増槽が重かった。対空機関砲は、？型が積んでいるメルクア・ポラリスＭＧ－４ではなく、同じ二〇ミリだが前モデルのＭＧ－３だった。
戦端が開いたのは、先行していた海軍のサシバ四機が敵と遭遇したところからだ。海軍の戦闘機は、ノスリと比べて大柄で航続距離は長かったが、明らかに足が遅かった。イライはすでにそのとき編隊長だった。ノスリ四機を引き連れて戦端が開かれた空域へと全速力で向かった。やけに風がなく、そして雲もなく、晴れていた。た

だ、空気が重かった。
　遠くでひとつ、ふたつと黒煙が青空にたなびいているのが見えた。敵味方どちらの黒煙なのかはわからなかった。無線から、誰かの叫びが聞こえた。それでサシバがいきなり三機撃墜されたのを知った。スロットルを最大位置まで叩き込み、エンジンが高鳴った。イライの編隊は二機ずつのエレメントに分かれる。イライのウィングマンが、奴だった。二分ほどして、敵機と遭遇した。敵は双発のペトレルで、どう考えてもサシバが勝てる相手ではなかった。イライの編隊は高度を上げた。ペトレルもサシバと同じ艦上戦闘機だったが、迎撃戦闘機であるノスリと比べれば、降下速度は優れていたが、加速力で劣っている。ただ、水平速度は圧倒的にペトレルの勝ちだ。増槽を切り離し、ラダーを入れ、機体の動きをちらりと確認したイライは、他の三機を連れて一気にペトレルの編隊に襲いかかった。そのときすでに先行していた四機のサシバは全滅しており、空軍機であるイライたちの編隊がまず相手をするほかなかった。後方から海軍機が全速力で向かっているはずだが、腹が立つほどに彼らの足は遅かった。
　双発のペトレルと遭遇するのは、そのときのイライは二度目だった。一度目がいつだったのか、もう憶えていない。憶えているのは、ペトレルがやたらと直線速度が速いことと、そのかわりに旋回性能が著しくノスリに劣っていたことだ。きっと今乗っている?型でやれば、もっと楽に勝てただろう。イライたちは旋回戦に持ち込んだ。ペトレルから速度を奪えば、ノスリが優位だからだ。どこかで聞いた話だ。イライは思う。
　イライは機関砲弾の装填ボタンを押し、小気味よい音を立てて二十ミリ対空機関砲が発砲可能状態になったのを冷めた思考の端で知る。そして撃った。はずれるはずがなかった。飛び込んできたイライたちのノスリから逃げようと、二機のペトレルが左旋回から急な右旋回に入る瞬間、その一瞬を狙った。弾筋は見なかった。当たるのを確信したからだ。視界の端に鮮やかなオレンジ色の炎が上がり、

ウィングマンが撃墜を報告してきた。奴も同時に狙ったが、撃墜したのはイライだった。もう一機のペトレルは逃げた。自慢の速力を生かして、味方と合流しようとしたのだ。それを見ても、ペトレルの加速力がノスリに及んでいないのがわかった。追えば撃墜できただろうが、深追いはしなかった。さらに遠く、敵の編隊十数機が接近しているのを、後続の海軍機が知らせてきていたからだ。海の上での空中戦は、それにしても自分の感覚があてにならなくなる。計器を意識しなければ、空と海が溶けてしまうのだ。イライはそのとき、三〇〇ノット強の速度を生かしたまま、ゆっくりと右に変針した。ウィングマンもついてきた。けれど、ウィングマンは、奴は、バックミラーを見ることも、振り返ることもしなかったのだろう。イライたちの編隊の上空から、三機の敵機が逆落としになっているのを、運悪くイライもウィングマンも気付いていなかった。なぜだったのか、今でも思い出せない。太陽の中にいた？　もうわからない。憶えていない。

曳光弾がイライのノスリの右主翼端を掠めていったのを見た。そのとき初めて振り返った。反射的に操縦桿を引きつけた。ただし、緩やかに。機体は機首を上げ、スロットルを全開にした。ウィングマンを探すと、奴は黒煙を吹いていた。エンジンカウルに大穴があき、左主翼のフラップもエルロンもなくなっていた。

逆落としで襲ってきたペトレルは、イライたちの編隊からやや離れた場所で引き起こし、イライの照準環に入る間もなく猛烈な速度で左方向へ去った。イライは無線に叫んだ。そのとき味方のノスリ八機は、三カ所に分かれて戦闘中だった。被弾したウィングマンは、もはや帰還することも難しいほどのダメージを負っていた。イライは無事だったが、もうその時点で戦意のほとんどを喪失していた。なぜだったのだろう。ウィングマンは徐々に高度を下げていく。脱出しろ、そう命令した。ウィングマンは緊急脱出ハンドルを引かなかった。無線に対する呼びかけにも応答しなかった。回避行動を取りながら、イライが彼の機体を向くと、ウィングマンの機体は、キ

ャノピーが粉々になっていた。その時点で、イライはウィングマンがすでに逝ってしまったことを知った。見えるはずのパイロットの身体が見えなかったからだ。脱出したわけではない。パイロットごとコクピットを撃たれたのだ。奴の機体は緩やかに背面飛行に入り、そして急激に高度を下げた。爆発はなく、黒煙を曳いたまま、海面に激突し、派手な水しぶきを上げた。そこまでをイライは見届けてしまった。

あの日の戦闘で、イライたち空軍機は、四機を失った。海軍機は、……知らない、憶えていない。ただ、空母は無事だったはずだ。敵機は、基地に戻ったイライが聞かされたところで、七機が空軍、海軍双方により撃墜されたという。どちらが何機を墜としたのか、あるいは空母に随伴する艦が撃墜したのかは、当時の飛行隊長は教えてはくれなかった。おそらく彼も知らなかったのだろう。

そのあと十数回出撃し、何人かの同僚を失った。みな、海の上に墜ちた。そして、今の基地へ転属になった。戦闘機も?型から、新型の?型に変わった。何年前の出来事だったのだろう。今の自分と当時の自分に連続性があるのだろうか。イライは電車がブレーキをかける金切り声を聞き、膝の上のカタバミの存在に気付く。ここは第五空軍時代の離島ではない。今の自分は、当時の自分ではない。では、いったい誰だ。

気付けば、乗客の顔ぶれが変わっていた。あの大学生風の若い男は姿を消し、夫婦の姿もなかった。少女たちが嬌声をあげていた。彼女らは何が楽しいのだろう。イライのやや離れた隣席に、杖を抱えた老紳士が座っていた。灰色のあごひげをたくわえ、チャコールのコートを着ていた。やはり、フライトジャンパ姿の自分は異質だった。あの離島の基地では、こういう気分を味わったことがなかった。島の住人は、大半が空軍の兵士たちであり、多数派だった。けれど、ナヨシの町では、自分たちは少数派なのだ。乗客たちは、パイロットがどういう職業なのかを知っているのだろうか。それを質す気もしなかった。

やがて、車内放送が目的の電停に近づいたことを知らす。キリウから教わった停留所の名だ。ハスミが収容されている病院は、市内でももっとも規模の大きな病院だという。ハスミはそこまで重傷だったろうか。エプロンで泡まみれになったノスリから引きずれ出された彼の姿を見て以来、イライはハスミに会っていない。彼の負傷状況も、詳しくは知らない。聞かなかったからだ。会えばわかる。

イライはポケットから硬貨を取り出した。そしてふと、前任地の空を思い出した。あの基地の空は、にじんだような青だった。ここのような、澄んだ色ガラスのような色ではなかった。あの基地は、まだあの島にあるのだろうか。取り出した硬貨は、冷えていた。

16

停留所は、町から丘陵に上がった途中にあるようだ。通りからナヨシの街並みが見渡せた。空からは何度も見たが、この角度から街並みを眺めるのは、もしかすると初めてかもしれない。イライは枯葉がびっしりと散った街路を歩く。煙草を喫いたいと思ったが、やめた。閑静な住宅街だった。生け垣をまわした家が何軒か。キリウが示してくれた住所へは、まず通りを折れる。その角に黒く大きなセダンが停まっていた。風が吹き上げてきて、枯葉が舞った。海風ならぬ、川風だ。

病院は角を曲がるとすぐ正面に見えた。白い壁で、下から数えると七階建てだった。上品な建物だと思った。それは普段、迷彩塗装を施した掩体だの、モスグリーンに塗られた指揮所だの、そういった愛想のかけらもない建物に囲まれて暮らしているからかもしれない。かといって、イライは今さら、こんな上品な住宅街に埋没してしまいたいとも思わない。何となく、遠くへ来てしまった、そう感じた。

病院のエントランスは明るく、暖房が入っていた。常緑の観葉植物の鉢が並んでいて、受付でハスミが収容されている病棟を聞くと、顔色のやたらいい若い看護婦が笑顔を含んでエレベータを指さした。あれで上れという意味らしい。イライはまず煙草を喫いたかったが、手に持ったカタバミの花束が、それを許してくれなかった。ハスミに会うのが、今になって恐くなった。なぜだ？

エレベータは広かった。ストレッチャーごと移動できるようにするためだ。意味もなく自分が艦載機になったような気がした。以前空母に乗ったときに見た、艦載機用のエレベータを思い出したからだ。けれどイライは艦載機でもなく、空母に着艦したこともない。海軍のパイロットは空軍のパイロットを揶揄する。動きもしない滑走路に着陸するなんて、訓練生でもできる、と。そうかもしれない。

そんな揶揄も、イライには無意味だった。イライは海が好きではない。空と溶けてしまうからだ。まして、空母に乗り組むなんてとんでもない。あそこは人間関係がややこしすぎる。

エレベータは七階で止まった。最上階だ。ハスミが収容されているのは、七〇七室だという。エレベータを出ると、清潔そうな廊下がまっすぐに続いていた。アルコールの匂いがする。酒ではない、エタノールの匂いだ。この匂いは嫌いではなかった。もっとも、イライはガソリンの匂いの方が好きだ。オクタン価一〇〇の航空用ガソリンだ。

病院と花束は、相性がいいのかもしれない。少なくとも、フライトジャンパよりは。すれ違う看護婦たちはみな、カタバミの花束よりもイライのフライトジャンパを一瞥した。これならば、キリウの杞憂をそのまま受け入れ、制服で着た方がよかったかもしれない。こういう機会を考え、今度から制服にアイロンをかけておこう。いや、その前にクリーニングだ。

ナースステーションは出撃を控えたディスパッチャー席よりあわただしく見えた。そこを通り過ぎ、部屋のナンバーを見ながら、たどり着いたのが七〇七号室だった。四人部屋で、部屋の入り口横にプレートがあり、ハスミの名があった。どこにも彼がパイロットであることなど書いてはいない。当たり前か。スライドドアは開け放たれており、入ると窓の大きさがまず目に入った。そして、ハスミは向かって右奥の窓際にいた。来訪者に耳ざとくなっているのか、目を閉じていたハスミは、イライが部屋に入ったとたんに目を開いた。瞬間、イライはここに来たことを後悔した。

「やあ、イライ」

ハスミはベッドに横たわっていた。しばらく会わないうちに、彼は痩せていた。

「めずらしいこともあるもんだ」

かすれがちな声でハスミ。声に張りがない。一気に五歳は老け込んだような顔をしていた。イライに傍の椅子にかけるように勧めた。

「それは、見舞いの品か」
カタバミの花束を見て、ハスミは笑った。いや、笑ったようだった。左の頬に大きく絆創膏が貼られており、頭には包帯が巻かれている。そうか。お前はそんな怪我をしたのか。今の今まで知らなかった。知らなくていいことと知らなければならないことがあるなら、眼前のハスミの容態は、どちらだったのだろう。イライは思う。
「よくそんな花、見つけたな。どこに咲いていた」
ハスミは起きあがろうとした。動きが緩慢だった。あの日の彼の機体のように。
「買った。今どき、こんな花は咲いてない」
「そうだな。今朝方は雪が降ったしな」
「雪？」
「気付かなかったか」
「いや」
「明け方、ちらついたんだよ。ここからはよく見える」
そう言って、ハスミは顔をしかめつつ身体を起こした。布団に隠れていた右腕が見えた。操縦桿を握る方の腕だ。二の腕に包帯がぐるぐる巻きになっていた。
「見晴らしがいいだろう。動かない街並みもいいもんだよ」
ハスミが言う。怪我のことには言及しない。あるいはイライが訊くのを待っているのかもしれない。
「花瓶はないのか」
ようやく口を開いたイライから出た言葉はそれだった。
「さあ」
ベッド脇のサイドテーブルに、水差しがあったが、飲料用のそれにカタバミを入れるわけにもいくまい。と、水差しの横に一輪の花が生けてある「何か」を見つけた。気がつかなかった。
「なんだ、これは」
イライが見ると、青く小さな花が一輪、生けてあった。花の名前は、やはりイライにはわからない。ただ、イライにもわかるものが

あった。青い花を生けてある、その容器だ。
「誰だ、こんなものを持ち込んだのは」
「リンドウだ。秋の花だよ」
「花の話じゃない」
　そのリンドウとやらは、二十ミリ機関砲の空薬莢に生けてあった。小さく可憐なリンドウの花を生けるにはちょうどいい大きさかもしれない。それにしても、どこの誰だ、病院に機関砲の薬莢を持ち込むとは。
「新型機のパイロットさんだ。それを持ってきたのは」
「なんだ？」
　言われて、真っ先に考えたのはあのヨノイという名の大尉だった。
「あの男か。殊勝なことをする。それにしては冗談が過ぎるようだな」
「違う違う。女の方だ。カンナリ少尉か。彼女が来たんだ」
　言われ、イライはカタバミの花を持ったまま、しばし立ちつくした。
「ユウが」
「あんたの娘だそうじゃないか」
「……」
　窓からは確かにナヨシの街並みがよく見える。ソラノ川のやたら広い川幅も。その向こうに茶色と黒々とした針葉樹のまだら模様は、基地だ。赤い鉄橋もここから見える。
「いつ来た」
　イライが問うと、ハスミはしばらく考え込むようにして、そして半身を起こしていた身体を再び横たえた。
「忘れた。ここにいると、時間の感覚がなくなる」
「あいつが来たのか」
「その、リンドウの花を持って。お前と同じように、花瓶を最初は探していたが、たぶん見つからないことも予想したんだろう。あの子は俺に謝りながら、それに生けたんだよ」

イライはカタバミの花束を持ったまま。
「機関砲の空薬莢なんて、いい趣味じゃないか。もしかしたら、そいつは、俺を狙ってた敵機を撃ち墜とした弾かもしれない」
「言葉がないよ」
「なんでだ。俺は気に入ったよ」
「節操がない」
「世間知らずなんだよ」
「それは、俺もだ。病院に見舞いの品を持ってきて、花瓶がないとは思わなかった」
「探せばあるかも」
「この花束を生けることができる空薬莢か。戦車砲の薬莢でも持ってくるか」
冗談のつもりはなかったが、イライの言葉にハスミは笑った。空咳のような笑い方だった。その姿を見て、イライは暗澹たる気分になった。もしかすると、ハスミは二度と戦闘機に乗れないのではないか。そう思ったからだ。
「それにしても、どうしてそんな季節外れの花を持ってきた。よく見つけたな」
ハスミはまた半身を起こした。つらそうだ。イライはさらに起きあがろうとするハスミを制した。
「いつだったか、俺にこの花の花言葉を教えてくれたのは、ハスミ、お前だ」
「そんなことを言ったか」
「俺は憶えてる。『心の輝き』。違ったか」
言うと、ハスミは苦笑した。声に出さず、唇を歪めた。
「そうだ。いつの話だったかな。そんな話もしたかもしれない」
「俺はよく憶えてる。お前はパイロット向きじゃない、そうも思ったよ」
「じゃあ何に向いている」
「絵描きか詩人だな。どうだ、今からでも」

イライが言うと、ハスミは顔を曇らせた。それも、露骨に。
「俺がもう飛べないと、そう言いたいのか」
予想外に鋭い言質だった。
イライは窓を向き、街並みを一回り眺めると、ハスミを向いた。
「怪我の具合はどうなんだ」
「見ての通り、と言ってもわからないか。俺は運がよかったそうだ。俺は憶えちゃいないが、あれだけ被弾した機体で帰還できたこと」
「憶えていないのか」
「すまないが、憶えていない。どうやって基地まで飛んで、どうやって着陸したのか、まるで」
「そうか」
「そして、あれだけ弾をぶち込まれて、俺自身には一発も当たらなかったこと」
イライは黙ってうなずく。
「けれど、コクピットは火災を起こしていた。この傷はそれだ。火傷なんだ」
「重いのか」
「この程度で済んだのが奇跡だそうだ。運がいいとさ」
「よかったじゃないか」
「よかったのか。本当に」
「なぜだ」
「右手の握力が戻らない。火傷もしたが、撃たれたときどこかにぶつけたのか、それとも破片がやはり当たっていたのか。右手の握力は、前のとおりじゃない」
イライはベッドサイドのリンドウを眺めていた。青、紫、そんな色。どこで摘んだのか。摘んだわけではあるまい。もしかすると、イライが今も手に持つカタバミと出所は同じかもしれない。
「リハビリをすればいい」
イライは小銃を持つように、花束を持ち替えた。
「それ以前に」

ハスミは視線をリンドウからイライへ、そして窓の向こうへと移す。
「恐いんだ」
「なにがだ」
「飛ぶことがだ」
晴れている。色ガラスのような空だ。真っ白な雲が、ソラノ川の向こう、ちょうど基地のある方角に湧いていた。
「俺はもう飛べないかもしれない」
ハスミが小さくつぶやいた。
「バカなことを」
「そうかな」
「違うのか」
「さっきあんた、俺に言ったじゃないか。今からでも、絵描きか詩人になれと」
「冗談だ」
「それにしちゃきつい」
「すまなかった」
イライが言うと、ハスミが笑った。空咳のように。
「あんたが謝るなんてね。はじめて聞いた」
「そうか」
「それに、見舞いだ。親子揃ってとは。案外義理堅いところもあるんだな」
「それは皮肉か」
「正直な気持ちだよ。あんたたちは不器用なんだな。そう思ったよ」
看護婦が来た。検診か。一言二言、看護婦はハスミに声をかける。それにハスミは応じる。基地にいたときよりも、ずっと繊細そうな声音だった。あるいはいまのハスミが本当の姿なのかもしれない。戦闘機を降りた彼が、本当の姿なのか。自分も、戦闘機を降りたとき、本当の自分に戻るのか。ではいったい、本当の自分とは何だ。そんなものがあるのか。

「きれいな花ですね」
看護婦が言ったが、それが誰に向けられたものなのかイライはわからず、黙っていた。
「何という花ですか？」
看護婦の目がイライのフライトジャンパから彼の目に移った時点で、彼女がイライに訊いているのだとわかった。
「カタバミ」
一言で答えた。
「花瓶、持ってきましょうか」
看護婦は、いくつくらいだろう。若い。ここの看護婦も、すれ違ってきた医師たちも、みんな若く見えた。イライは看護婦の申し出を受けた。ここに戦車砲の薬莢があるとは思えなかった。看護婦はイライからカタバミの花束を受け取り、部屋を出て行った。
「見舞いに来たのは、ユウと俺だけか」
「キリウも来た。それだけだ」
「俺は三番手か」
「順番なんて関係ない。あんたが来ること自体、俺は予想もしていなかったよ。不意打ちだ」
ハスミはやはり痩せた。いや、痩せた、という言葉は当てはまらない。彼は、やつれた。
「なあ、イライさん」
再び横になったハスミが言う。
「なんだ」
「リンドウの花言葉、知ってるか」
にやりと笑ってハスミが言う。
「知ってるも何も。俺はこの花の名前も知らなかった」
「正義、だよ。正義」
ハスミが言い、イライは黙っていた。
二十ミリ機関砲弾の空薬莢に、一輪だけ生けられたリンドウの花。鮮やかな青。可憐だった。ユウは、この花一輪だけを持ってここに

来たのか。花束ではなく。
「俺が苦手な言葉だな」
イライは応えた。
「ひとつ、訊いていいか」
ハスミが問う。
「なんだ」
「あんたの娘は、カンナリ少尉は、……純粋培養か」
イライは即答しない。その間に、先ほどの看護婦が花瓶に生けたカタバミを持って戻ってきた。黄色いそれは、リンドウのように可憐だった。どちらも野花だ。ユウがなぜリンドウをたった一輪持ってきたのかはわからない。ハスミが言った花言葉が象徴するなら、正義はひとつでいいということか。そんな思慮が彼女にあるような気がしない。いや、わからない。
「なあ、どうなんだ」
ハスミがなおも問う。
看護婦が一礼して退室していくのを見送り、イライはようやく口を開く。
「俺が純粋培養に見えるか」
「それが答えか」
「違うか」
「はぐらかされた感じだ」
イライは小さく笑う。声に出さず。
イライは再び窓に目を向ける。飛びたい、と思った。自分の飛行機はもう直っている。ハーモニゼーションも二日前に調整された。いつでも飛べる。今日が休日なだけだ。
「空ばかり見てる」
ハスミが言った。力なく。
「窓が大きいだろう。よく見えるんだ。さっき、四機上がったな」
「見えるのか」
「見える。ノスリが四機だった。違うか」

「そうだ。誰が上がったのかは知らないが」
「飛行割りを見てこなかったのか」
「今日は休みだからな」
「あんたらしいよ」
「どういう意味だ」
「そのままの意味だよ」
ベッドサイドに、リンドウとカタバミが並んだ。花瓶は白いセラミック製のもの。模様もなく、まるで高圧線の碍子のような材質だ。リンドウは、一輪、機関砲の薬莢に正義をささやかに主張していた。機関砲弾が正義だというのだろうか。俺たちの戦争に、正義があるのか。きっとあるのだろう。どこかに。探せば。けれど、関係ないとイライは思う。敵がいるから俺は飛ぶ。やはり、俺は飛ぶことに理由を探している。
「そろそろ、俺は帰る」
イライは腰を上げた。居心地のいい病室かもしれない。四人部屋に、ハスミはたった一人だった。軍の意向か、それとも病院側の配慮か。だったら個室をよこすだろう。イライは前者の意思を感じた。
「今度は、基地で会おう。待ってる」
イライは言った。空虚かもしれない。言ったあとで自分の言葉の響きに気付く。
「ありがとう」
ハスミは、一言、そう言った。そう言うと、イライから視線をはずし、窓へ向いた。
イライは、ハスミの視線をたどる。
空と、町と、川と、赤い鉄橋と、森と、その向こうに平原。基地。
やはり、制服で来ればよかったと、イライは悔いた。フライトジャンパは、戦闘機の匂いが強すぎた。見舞いに着てくるべきではなかった。
煙草を喫いたいと思っていたことを、イライは今、思い出した。

17

未帰還機が六機出た。

その日、イライはタクシーアウトしていく四機のノスリを、ストーブが燃え、ケトルが蓋を弾ませる待機所から眺めていた。朝の出来事だった。煙草を喫っていた。あと数本で切れる、そう思った。煙草の箱は軽かった。今日はフライトがない。ハスミを見舞ってから、まだ飛んでいない。飛行割りを毎日見るが、イライの名が乗らなかった。機体はすでに調整され、ガソリンを入れればいつでも離陸できる状態になっていた。テストフライトをさせろとホガリに言ったが、断られた。俺が許可を出すわけではない、と。

滑走路とエプロンが黒々としていた。そのほかは、白かった。

雪の季節だった。

海流の関係なのか、このあたりはさほど雪が多くない。多くないというだけで、降らないというわけではない。もうすぐ根雪だ。寒暖計を見なくても、季節がもはや秋ではなく、冬のそれだというのはわかった。わかっていた。イライは憂鬱になる。様々なことで。まず、離着陸に気を使う。なかでも着陸だ。滑走路が凍結していれば、当然着陸の際の制動距離が果てしなく伸びる。過滑走帯ぎりぎりまで機体が止まらないこともある。万一爆装した状態で離陸して、爆弾を投下することなく帰投する際は、帰り道、海上で爆弾を投棄する。夏場も同じことをするが、冬場は深刻だ。オーバーランでもやって脚を折った日には、飛行割りから数ヶ月単位で名前をはずされるばかりでなく、配置転換すら覚悟しなくてはならない。イライはそこまで未熟ではなかったが、過滑走帯をはるかにオーバーしたあげく、戦闘機を逆立ちさせてそのまま炎上したパイロットを知っている。彼は二度と飛ぶことはおろか、自分の足で歩くこともできなくなってしまった。そんなことをぼんやり、煙草を喫いながら午前中を過ごしたとき、待機所があわただしくなった。飛行服姿のチ

ナミとユサがパニックドア方式の待機所の扉に体当たりをして飛び出していった。見ると、エプロンでは二機の戦闘機がトーイングカーに引かれて、すでに暖気中だった。主翼下に増槽タンクを二本、やがてもう二機、トーイングカーが戦闘機を引っ張り出してきた。つづいて待機所に現れたのは、アイズだった。起き抜けのような顔をして、それでも飛行服は上下きっちり着込んでいた。

「イライ大尉」

声に振り向くと、キリウがいた。めったなことでは待機所に顔を出さない飛行班長だ。彼もまた飛行服をまとっていた。しばらくぶりに彼の飛行服姿を見た気がした。

「なんだ、あんたも飛ぶのか」

新しい煙草に火を点けて、イライはキリウに笑って見せた。

「三〇三から四機が未帰還になった」

姉妹スコードロンの第三〇三飛行隊の話だ。

「ケツを拭きに行くのか。班長自ら」

「三〇三は残存戦力から六機、さきほど離陸させてる。こちらからも出す。あんたも飛んでくれ」

「俺がか。冗談はよしてくれ。飛行割りからはずされっぱなしの俺が飛ぶのか」

「わたしも冗談を言っている余裕はない。敵の編隊が防空識別圏に迫っている。数は、わからない。先遣の三〇三が全滅してる。爆撃機でも控えていたら大事だ。出てくれ」

イライはソファに座り直した。

「新型はどうしたんだ」

「彼らは実戦部隊ではない」

班長らしさをこんなところで出さなくてもね。イライは危うく口にするところだった。けれど飲み込んだ。

「一度出撃してるじゃないか。なぜ出さない」

「我々がやる。イライ、頼む」

そう言って、キリウはまっすぐにイライの目を射た。めずらしく

真摯な態度に、イライはいささか驚いていた。
「おれたち旧世代をまとめて始末するのか」
「どうしてそんなことを」
航空ヘルメットにマスク。どれくらいの高度から迎撃を行うのか、それでなんとなく想像がつく。ならばなおさら、ターボジェットの彼らを出せばいい。一個飛行隊分展開している、ノスリ?型だっている。
イライはキリウから視線をはずした。彼らはどこまでも純粋培養で新世代なのだ。撃墜すべき敵がいるというのに、人間に絶望していないのだ。彼らの眼前には希望しかない。仮に希望がないのであれば、彼らは自分で希望を作り出そうとする。それが自分の使命だとでもいうように。
イライはますます屈託する。キリウもそうだ。あの新型機を駆るヨノイもそうだ。純粋培養の彼らは、イライにとってまぶしい。だから目をそらした。
視線をはずしたままのイライを、キリウは最後ににらみつけるような目を向けると、それ以上の言葉を残さず、イライの前を去る。イライは残された。
残された待機所は、それでもにぎやかだった。窓の向こうの、タキシングしていく戦闘機の爆音でだ。喉に渇きを感じていた。煙草を喫いたいと思った。そして、今の自分が飛べば、二度とここへ帰ってこられないような気がした。以前なら、きっと思っただろう。それならそれでいい、と。それ以上に、以前の自分なら、二度と帰ってこられないかもしれない、そんな感情を抱くこと自体が少なかった。僚機が撃墜される。それは屈辱だ。自分が撃墜される。それはもっと屈辱だ。自分が撃墜されることを想像する。それも屈辱だ。イライは自分が戦闘機に乗る理由について、一瞬だけ考えた。まっとうな理由からではないような気がした。一瞬でそう感じた。
爆撃機が控えていたら?
俺が撃ち墜とす。

俺が存在できなくなる原因を排除するためだ。
そうしていままで生きてきた。
窓が震える。ノスリのプロペラが巻き起こす後流が、窓にぶち当たっている。機番を読む。セムラだった。キャノピーが日を浴びていた。そこだけ夏と同じ色をしていた。今は冬だというのに。凍てついたエプロンから誘導路を経て、さらに眼前の滑走路を、二機のノスリが離陸していく。
イライは嘆息する。
もしかすると、胸の内に湧いていた諦観を含ませて。
イライは、待機所を出た。喉の渇きを感じたままに。ＰＸに行く気など、起きるはずもなかった。
空はよく晴れていた。雲もなく、風も弱かった。気温は下がっていたが、照り返す雪面に、イライは目を細めていた。
爆音を聞きながら。

行き着いた先に、なじんだ機体があった。かすかな煙草の匂いを感じた。爆音は空をまだ揺るがしていた。レシプロエンジンとしては、もはや戦闘機搭載型の最大出力限界近くに達しているノスリのＥＪ２０は、火を入れ、スロットルを開けると、とてつもない爆音を奏でる。頼もしく、力強い音だ。イライはその音が好きだ。かすかな煙草の匂いの先に、暖気中のノスリがいた。
「来ないと思ったよ」
煙草は何本目だろう。掩体に寄りかかり、ホガリが笑わない目をしていた。
「来るつもりはなかった」
イライは寒さに震えた。待機所から幾ばくかの逡巡ののち、結局足は乗機の眠る掩体地区に向いていた。
「では、なんでそんな格好で来た。俺には飛ぶ気のないパイロットの姿には見えないがね」
「寒いからさ」

「普段しゃべらないから、あんたの口は減らないんだな」
ホガリはまだ笑わない目をしていた。けれど、イライはそこに自分と同じ色を見た。ホガリがなぜパイロットにならなかったのか、訊いたことはない。基地のパイロットたち以上に、戦闘機を知り、そして好んでいるように見える。なぜ飛ぶ方にまわらず、送りだす方を選んだのか。機会があれば、そうだ、機会があれば、今度訊いてみよう。はぐらかされるかもしれない。が、今度、訊いてみよう。今じゃない。
「暖気は十分だ。点火時期も調整した。ハーモニゼーションも完璧だ。俺が思うにね」
「信頼しているよ」
「では、俺もあんたの減らない口を信用することにしよう」
「飛べるんだな」
「燃料搭載量を知りたいか」
「増槽は二本か」
「しかも満タンだ。離陸でこけるなよ。凍ってる」
「着陸の方が心配だ」
「着陸の心配をしているなら、大丈夫だ。行ってくれ」
イライは軽くうなずいた。
なぜ、飛ぼうと思うのか。
コクピットに身を沈める。掩体の中は冷えている。外以上に。イライはヘルメットをかぶり、マスクをつけた。酸素ビンは三本。燃料を使い果たして、ちょうどいいくらいの量だ。久しぶりのコクピットだった。操縦桿の感触や、いやに固いシートの座り心地が、妙に懐かしい。計器類のチェックをする。ハスミの顔がよぎった。もう、奴は飛べないのか。飛ばないのか。わからない。プリフライトチェック、終了。異常なし。ホガリにハンドサインを送る。チョーク、はずせ。スロットルを開ける。機体がゆっくりと動き出す。そういえば、ホガリはいつ煙草を消したのか。キャノピーを閉じ、ロックする。そして、するすると誘導路に、機体を滑らせる。

バックミラーにホガリが映りこむ。首をすくませて、プロペラ後流を受けていた。ピッチを上げる。コクピットのヒーターは作動しているが、どうにも寒い。上がればもっと寒いだろう。基地のグラウンドを呼び出す。離陸のクリアランスを求める。やはり、自分が最後だ。あきれたような管制官の声が耳を打ったが、許可が下りた。滑走路に進入する。それにしても、風もない。雲もない。気圧が高い。空気が硬いような気がする。硬質な金属か、そんな色。塗装したような空の色だった。まっすぐ伸びた滑走路は、ところどころ凍り付いている。それが空を映して青かった。

スロットルを全開位置に。一瞬でエンジンは吹け上がり、機体は満タンの燃料分をスポイルされた加速力で滑走路を走り出す。じれったいと感じたが、イライは操縦桿を引かず、速度を稼ぐ。雪をかぶった山と、裸の木々。右手に待機所と、管制塔が加速度を上げて後方へすっ飛んでいく。普段より速度超過気味でエレベーターを引いた。反応はよかった。下半身から伝わっていた地上の感触が、ある一点で消える。機体が浮いた。ギヤを上げ、角度はそのまま、加速しながら緩やかに上昇する。味方の編隊は、管制塔の誘導では、もう五十マイルほど先行している。無線はオープンにしていた。ナヨシの街並みを右手に見ながら、左へロール。二〇〇ノット、いい速度だった。やはり久しぶりのGが、意外なほどに心地よかった。もしかすると、自分はこのために飛んでいるのかもしれない。飛んでいると実感するために。

イライは、作戦に支障が出ない程度のエンジン出力で、可能な限りの速力と高度を稼ぐ。僚機はない。今は、自分だけだ。いや、きっと今までも、編隊飛行をしていたときですら、飛んでいたのは自分だけだったのだ。だから、屈辱を感じたのだ。それはこれからも変わらないに違いない。左旋回を続けると、再び基地の上空に差しかかる。北向きに離陸した際のコースだ。戯れるつもりはなかったが、イライは素早く機体を背面に入れる。頭上に滑走路と基地が広がった。二機のハチクマは、どこにいる？

見えるはずもなかった。

先行していた味方の編隊は全部で十六機。いずれも無線封鎖をしていなかったから、イライの耳にはパイロットたちの声がすべて届く。空中戦はおよそ飛ばない人間がイメージするほどに殺気だったものではない。いや、相手を撃墜するために飛ぶわけだから、空間は殺気に満ちている。ただ、交わされるパイロットたちの声音は、あるいは緊張が含まれていたとしても、怒鳴り合うことはない。静かなる殺意が、空域全域にみなぎっていた。

機関砲の試射は必要なかった。イライはスロットルを最大に、昇れるだけの高度を稼いでいた。二機を最小単位とする現在の空中戦で、イライは明らかに編隊を乱していた。自分は十七機目の戦闘機で、ぽつりぽつりと浮かぶ雲を利用して、すでにたなびき始めている黒煙の先を目指していた。誰かが、すでに、撃墜されている。それが敵機なのか味方機なのかはわからない。

「ヒムロ・ナナよりヒムロ・リーダー」

イライは静かに声を出す。

「ヒムロ・リーダー、ナナ。今頃どうした」

キリウの声だ。落ち着いている。

「リーダー、ナナ。飛べというから飛んできた」

「ナナ、リーダー。ヒムロ・キュウが一七〇、レベルにいるはずだ。目標は、見えるな」

「誰か墜ちたか」

「ヨンが墜ちた」

ヒムロ・ヨン。割り当てられたコールサインは誰だったのか、今は思い出すよりも先にスロットルと操縦桿にそえた指に、わずかな熱がこもった。

「ナナ、リーダー。聞こえているか」

キリウの呼びかけに、イライは無線スイッチのオンオフ二回で応えた。あとはもう話す必要がない。ヒムロ・キュウ、チナミだ。機

番を確かめるまでもなく、手前に湧き上がった雲の峰のすぐ下側にいた。イライはやや機首を下げる。速度が上がり、キャノピーが風を切る音が暴力的に大きくなる。風がやや強い。横風気味だ。ラダーペダルの左側を踏み込んだ。
「ヒムロ・ナナ、キュウ、生きてるか」
「今頃登場か。レベル、二五〇、二機いる。速度差はほとんどない。奴ら、爆撃機の護衛だ」
「爆撃機？」
「町を狙ってるわけじゃなさそうだ。進路が違う。海峡に出ようとしている」
「何機見た」
「まだ腹のでかい奴が、最低でも四機。まだ後続があるかもしれない。レーダーサイトは何も言ってこない」
「護衛は、エスコートは？」
「セムラが一機やった。ナナ、イライ、三時、いた！」
チナミは言うが早く、素早く機体を右へロール、雲の峰を回り込むようにして変針した。主翼端から真っ白いヴェイパートレイルを曳きながら。イライも続く。機関砲弾を装填、電気式の装填装置が小気味よい音を立てる。イライ機はほぼ主翼を垂直に立て、右主翼を下にしたまま、チナミ機の三〇〇メートルほど後方に占位する。雲が近い。キャノピーに触れるようだ。触れたらさらさらと音がしそうな気がする。空が青い。高度は、二万フィートにやや届かない。
見えた。敵機は無塗装のプロペラ機だ。まだ遠かったが、イライの目には機種がわかった。単発のプッシャー、ノスリと同じターボチャージャーを搭載したＥ２０１の型式を持った機体だ。機体規模はノスリとほぼ同じで、エンジン出力はわずかに彼らの方が上だ。陽光に機体をきらめかせ、四機。二対四では分が悪い。
「キュウ、チナミ、ダメだ。編隊を組み直せ」
「遅刻したくせに何を言ってる」
「セムラとアイズは」

「名前を呼ぶな」
「奴らはどこだ」
「爆撃機を追いかけてる」
「エスコートがここにいるんだ。近いんじゃないのか」
「奴らは、体のいいおとりだよ。おとりにしては、ちょっとばかり強敵だが」
ハスミがいてくれたら。イライはプロペラピッチを最大に。ロールから水平飛行へ操縦桿を戻すとき、やや機体がぶれた。風が強い。
「チナミ、流されてる」
「ネコザメはこいつに乗ってるんだよ」
ネコザメ。敵の爆撃機のコードネーム。相変わらず幕僚監部のネーミングセンスを疑う。
「やり過ごすか」
イライの問いに、
「墜とす」
普段、質問に質問で返すような口調のチナミがめずらしくまっすぐに答えた。
「行くぞ、大尉」
「お前と心中はゴメンだ」
「死ななければいいだけだろうが」
言うとチナミは唐突に機体を背面に入れ、そのままパワーダイブに移行した。イライはやや遅れた戦闘隊形で続く。Ｅ２０１は四機編隊の間を詰めている。かき乱す気か。チナミとイライの二機は背面のまま、ほぼ垂直に降下する。キャノピーが、カナードが、そして主翼が猛烈な風切り音を立てている。この速度で引き起こせば、リベットが飛ぶ。下手をすれば、また翼にしわを寄せてしまう。急激な機動で速度を殺す必要はない。チナミはあのハチクマが得意とするような一撃離脱を考えているに違いない。垂直降下からゆっくりと機首を上げ始めた。それでも降下は続く。対気速度計の針がが四〇〇ノットのあたりをふらふらしている。五〇〇を超えると引き

起こすこともできなくなる。頃合いだった。
「イライ、十二時」
「わかってる」
「頭をやる。イライ、カバー」
無線スイッチをオンオフ二回。イライは応え、チナミよりやや高度を持ち、対気速度三七〇ノットでレベルオフ。光学照準器の端に四機編隊の二機が飛び込んでくる。気付いているはずだ。それでも相手が回避行動を取らないのは、向こう側の速度も速すぎるからだ。急降下からの引き起こしは、もともと対地攻撃機だったノスリの機体強度の方に分があった。
閃光。チナミが撃った。やや遠い気がしたが、曳光弾がきれいに集束して、見越し射撃をした先頭の機体に次々と吸い込まれていく。黒煙。一機、撃墜だ。
「イライ」
「ライトターン、後ろをやる」
先頭を撃墜された相手の編隊はブレイク、一機と二機に分かれる。イライがチナミと入れ替わり、分かれた一機を追う。速度はまだノスリの方が数段上だ。降下からレベルオフ、それからまだ旋回すらしていない。ラダーペダルが粘っこい。いつもの感覚だ。それでだいたいの速度がわかる。正面に湧き上がる雲が白い。雲の中に逃げ込む気か。その前にイライの照準器の真ん中に、瞬きするほどの時間、相手の機体が飛び込む。すかさず短くイライは撃つ。四門の二〇ミリ対空機関砲が吠える。発射速度を上げているため、発砲音は断続的に聞こえる。パイロットにとって、飛翔していく弾丸は、その実際の速度よりずっと遅く見える。早く、早く当たれ。イライは航跡を見なかった。すぐさま操縦桿を一度引きつけ、瞬時に左へ倒し、ラダーペダルの右を強く踏み込んだ。風車とまでは行かないが、ノスリは敏感に反応する。ややタイムラグを感じるのは、まだ両主翼に増槽タンクを下げているからだ。捨てるか？　ネコザメに追いつくまでは、まだだ。

閃光。イライのバックミラーに四散するＥ２０１が映りこむ。撃墜だ。あっけない。

「イライ、そのまま上昇だ、上昇。後方、六時」

チナミにの声がざらついている。イライは振り向きもせず、スロットルを再び最大位置へ叩き込み、タービンが猛烈に回転するサイレンに似た音を背後に聞き、眼前の雲の峰を駆け上がる。とたんに背後から曳光弾が襲ってくる。ブレイクした相手編隊の残り二機だ。これで二対二。チナミは……？　探すまでもなく、イライの左主翼の遙か下、高度差にして三〇〇〇フィートほどにいた。突き上げる気だ。

増槽タンクを捨てたい衝動に駆られる。雲の峰を駆け上がりながら、息苦しかった。ノスリのエンジンがいくら強力でも、垂直に上昇することなどできない。上昇角度はいいところ五〇度だ。徐々に速度が落ちていく。その前にイライは操縦桿を引き、瞬間的にスポイラーを立てた。ノスリの機体特性のひとつだ。上昇角度がこのあたりで、操縦桿とスポイラーを併用すると、瞬時に背面反転ができる。機体後部に重心がある割に、こういう芸当ができるのも、やはり出自が対地攻撃機であるからかもしれない。が、この技を実戦で試す人間はあまりいなかった。失敗すればそのまま失速し、敵の餌食になるだけだからだ。

反転したイライのノスリは、追いすがっていた敵機とほぼ正対した。イライは迷うことはなかった。トリガーを引く。長く引いた。自機が背面から順面へ移行する間、発砲した。弾幕を張るようにして、曳光弾が筋を描く。そのうち何発かでも当たればいい。当たらなくても、下から突き上げてくるチナミがもうすぐ撃つだろう。敵機との相対速度は、互いに上昇中だったこともあり、せいぜい三〇〇の上あたりだ。が、すれ違う手前、相手機のキャノピーが砕け散るのを見た。当たった。それでいい。機体への命中に変わりはない。パイロットに当たったか？　どうでもいい。機体に当たれば、それが致命傷ならば戦闘機もろともパイロットは死ぬ。パイロットに当

たれば、……二〇ミリ対空機関砲の直撃を受けて、パイロットに生存の可能性などみじんもない。順番の違いだ。どちらでもかまわない。自分が攻撃する分には、だ。自分が撃たれたとしたら、そう考えるのは、乗機のメインギヤが滑走路にそっと触れ、トーブレーキを踏み込んで機体が完全に静止し、キャノピーを上げ、ハーネスをはずし、コクピットを降り、そして、機首の機関砲まわりに浅黒いススがこびりついていたり、あるいは撃墜した敵機の破片が作り出した傷を見たときだ。飛んでいる間にそんなことを考えていては、殺される。

「イライ、チェック・シックス」

鋭い声に、イライは瞬時に機首を翻し、右主翼を上にしてバンク。曳光弾がイライのキャノピーの真上あたりを通過した。撃墜した敵機のウィングマンだ。

「チナミ、任せる」

「勝手なことを」

右主翼を立てた体勢から、そのままロールし、イライは右へ旋回した。得意とするフェイントだった。速度は落ちるが、敵機が一機なら、オーバーシュートしてくれることもある。まして、相手はノスリよりも機動性と加速力にやや劣る。最高速度ではノスリが劣るが、降下速度ではノスリが上だ。単に機体が頑丈なのだ。が、イライは急降下で速度を稼ぐと、緩やかに操縦桿を引いた。左のラダーペダルを踏み込み、操縦桿をやや左へ。機首をやや上に向けたまま、イライはキャノピー越しに上空を見る。一気に一〇〇〇フィートほど降下した。速度は上々、そのまま正面の雲に入る。雲は白く陽光を反射していたが、密度はさほど濃くもなく、飛び込んでも機体が翻弄されるようなこともなかった。

「チナミ」

呼びかける。

「戻ってこい」

「生きてるか」

「こんなときに皮肉か。いい加減にしてくれ」
雲の中でイライは上昇しながら旋回している。高度計が時計回りに鋭く回る。急降下で得た速度を、いま再び高度へ変換するのだ。エンジン音は快調そのものだった。甲高いタービンの音と、機体が空気の中へ切り込んでいく音。コクピットはにぎやかだ。そしてイライは、高度計がさきほどの急降下で失った分の高度を取り戻した頃合いで、イライから見て頭上方向、陽光が差し込み明るく輝く雲と空の境界を目指した。おそらくは、このあたりだ。
「チナミ、どこだ。太陽はどちら側に見える」
「話している暇はない。右上だ右上」
怒鳴りながらもチナミは答えてきた。ハスミや、そしてタグサリほどの回数を飛んだ経験はなかったが、チナミもまた、生き残ってきたパイロットだった。あの孤島の基地と比べてのどかだとはいえ、こうして敵の爆撃機が防空識別圏ぎりぎりを飛んでくる。やはりここも前線なのだ。前線で生き残っているパイロットは皆、優秀だった。あらゆる意味で。
雲が切れた。
真っ青な空、そして、真っ白な雲、乳白色に染まりかけた雲の峰々。時間が流れている。空中戦を始めて、それでもまだ十数分と言うところだ。基地を飛び立ってから、どれくらいだろう。太陽が移動しているのがそれでもはっきりとわかる。もう、午後だ。そして、雲と雲の谷間に、無塗装の戦闘機と、制空迷彩のノスリがいた。近い。あたりだ。こういうカンははずれたことがない。説明しろと言われても、数値化できるものでもない。けれど、なぜか、当たる。
「チナミ、動くな」
返答を待たずに、イライは撃つ。機関砲の残弾が気になり始めていた。全弾を撃ち尽くしたことなど滅多になかったが、今日の目標は敵の爆撃機であり、敵の戦闘機ではなかった。しかし、と考える。ほんのわずかな時間。戦闘機の目的は、敵の航空機を撃墜することだ。目の前にいるのは敵機とチナミであり、撃ち墜とすべき存在は、

チナミではなく、間違いなく敵機だ。彼の名は知らない。知らない方がいい。きっと知り合えば悪い奴じゃない。そう思った自分を不思議だとイライは思った。今まで敵機のことなど考えたことはなかった。目標は敵の戦闘機であり、敵のパイロットは戦闘機の付属品程度に考えていた。だとしたら、自分もこのノスリの一部であり、部品ということだ。ある意味当たっていて、まったく見当違いな認識のような気がした。それでは自分はなんのために存在しているんだ。

撃つ。考えるのはやめた。

照準環の中に敵機の主翼がかすかに掠めた。それは撃ったあとだ。敵機と自分の相対位置はほとんど変わらない。自分が直線的に追いかけている体勢で、だから見越し射撃もほとんど必要ない。当てるつもりはなく、チナミを逃がすための数発だった。

「チナミ」

「わかってる」

雑音の向こうで、別の僚機がネコザメの編隊に襲いかかっていると誰かの声が叫んでいた。到達したらしい。チナミの機体がやや傾く。機首をわずかに水平より沈めた、主翼の抵抗がもっとも少ない姿勢での加速に入ったのだ。イライが撃った相手はまだ飛んでいたが、二対一で戦いを挑むのは、愚の骨頂だ。自殺したいのなら止めないが、賢明な判断ではない。敵のパイロットも自殺志願者ではなかったようだ。全速力でイライたちの二機から離れていった。敵の戦闘機の編隊は、今どこにいるのか。

チナミはイライ機よりもやや高度を取り、そしてキャノピーの向こうからイライに頭を振った。それが合図で、二機はほぼ同時に増槽を捨てた。抵抗を失った機体が加速を増した。やがて、前方の碧空に、ちらほらといくつかのきらめきが、二機を誘うように舞った。

「いた」

どちらともなくつぶやいた。黒煙は見えない。それにしても高度がある。三万フィートに届く。コクピットは寒かった。残弾は、ど

れくらいだろう。燃料残量は、ほとんど心配がない。イライは右手にチナミを見、身体の芯がほんのわずか、熱を帯びるのを感じる。なんのために飛ぶのかって？　きっと、このためだ。

空中戦は間延びしていた。味方が何機墜とされたのか、敵機が何機生き残っているのか、一瞥しただけではわからなかった。甲高いタービン音を背中に聞いて、正面に四機、やたらとバカでかい飛行機が見えた。ネコザメだ。敵の四発エンジンの爆撃機だ。銃座がちらちら発砲している。当たるはずもないとイライは妙に冷めた気分で思っていた。戦闘機の速度に比べれば、爆撃機のそれは、地上の対空砲を攻撃するよりも簡単だ。少なくともイライはそう思っていた。何せ、相手も飛んでいる。致命傷を与えれば、放っておいても墜ちるのだ。地上の対空砲はそうはいかない。やはり、俺の相手は飛行機なんだ。

「ヒムロ・ナナ、キュウ。ほかは？」

「サンとニ、ロクが見える。墜とされた様子はない」

「頼もしいことだ」

墜とされたヨンは誰だったか。イライはまだ思い出せずにいた。

「行くぞ」

「黙ってろ」

イライは機体を左へ素早くロールさせる。空気が薄いのが、操縦桿を通して感じる。エルロンに粘りがない。ターボエンジンを搭載したノスリの、進化の果てが高々度迎撃機となった？型だ。基地でさんざん古参を相手に遊んでいた？型はどこにいる。ハチクマと同じでおやすみか。いい身分だ。口には出さないが、イライは胸の内で罵っていた。

「ヒムロ・ナナ、キュウ、リーダー。目標、一八〇、あれを墜とせ」

キリウだ。まだ残っていた。セムラの機体も見える。見知った機体で、いま見えない者はいなかった。優秀なことだ。先遣が全滅したのはなんだったのか。イライは無線スイッチのオン・オフ二回で応えた。

二機の増援に、ネコザメは右主翼を下げた。旋回を始めている。こいつはまだ腹がでかい。ネコザメを見るのは何度目だろう。それほど見慣れた相手ではなかった。でかい。バカでかい。が、その分足が遅いようだ。四機編隊を組んだネコザメの、シンガリにまず後方から照準環を合わせた。この爆撃機は、側方と前方と上方にそれぞれ対空機銃を装備しているが、どういうつもりか下方と後方には銃座がない。後ろから狙ってくれといっているようなものだ。

「ネコザメは全部で何機だ」

あと、三〇〇、二〇〇。カウントダウンをしながら、無線に訊いた。

「視認したのは六機。一機はクチナシが撃墜した」

キリウの声だった。クチナシは姉妹スコードロンの三〇三に割り振られたコールサインだ。イライは口の中で苦笑を噛みつぶす。クチナシとはひどいコールサインだ。香りは好きだったが、戦闘機にふさわしい名前ではない。自分に割り振られたヒムロ・キュウのコールサインも同じだ。まったくやる気が失せる。

「大所帯だな。どこを狙いに来た」

「ガス田だよガス田」

誰かが言った。雑音に紛れて誰かわからなかった。

「このまま北へ飛べば、掘削中のガス田があるのさ」

「それを?」

「分捕るんじゃなくてぶっ壊しに来てるんだよ」

乱雑な口調には覚えがあったが、イライはついに思い出せないまま、ネコザメの真後ろまで駆け寄っていた。パイロットの三分頭だ。トリガーを引く。ネコザメのエスコートはどうした。こんなに簡単に撃ち墜とされていいのか。イライは撃った瞬間、いや、撃ち終わった瞬間、機体を背面に入れてスプリットS。いつまでも張り付いていると、追い越す瞬間に撃たれる。十二、七ミリとはいえ、直撃を受ければひとたまりもない。だから、自分の撃った弾が当たったかどうか、見届けることはなかった。が、機体を逆ループから順面

に戻したとき、仰ぎ見たキャノピーの上遙か高く、黒煙がたなびいていた。当たったらしい。二十ミリではこの程度か。雲が多くなってきていた。どこまで追いかけるんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3870z/

ABSOLUTE WING

2011年12月13日02時08分発行